ネコマタとマイちゃん

河野 将軍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネコマタとマイちゃん

【Ｎコード】
Ｎ８３８５Ｋ

【作者名】
河野　将軍

【あらすじ】
『世界の歪み』の影響で“異能力者”が現れ始めた！　対抗するのは妖怪っぽくない『妖怪』ネコマタと『神様代行』のマイちゃん！　笑いがあったりシリアスあったりの異能力バトル！
時々本文を修正したりしてるので、たまに読み直してみて下さい。ちょっとずつ文章力が上がってるかもしれません（自己満足ですけどねホントにはい…）。

プロローグ：麻雀のルールがわからない（前書き）

この作品は間違いなくフィクションです。実在の人物、団体、事件などには本当に一切関係ありません。
初めて書いた作品なので文章はかなり雑だと思います。それでも最後まで読んでくれたらとても嬉しいです。嬉しすぎて発狂します。
どうぞよろしくお願いします。

プロローグ：麻雀のルールがわからない

とある路地裏。
生ゴミが溢れた青いポリバケツ、味がなくなって吐き捨てたガム、換気扇からでる白い煙、そんな汚い場所。
日の光が入らないこの薄暗い路地裏には、人間がほとんど来ることがないため、野良猫達のたまり場となっていた。
猫好きの人はそれはもう発狂するような光景だろう。なんたってそこらじゅう猫パラダイスであるからして。
それは置いといて、そこには大きい雄猫が四匹と、少し背の低い女の子が一人いた。
猫の数は三毛猫が二匹、白猫が一匹、そして黒猫が一匹。
「あんた…何してんの？」
女の子は黒猫の後ろに立ったままそう言った。
歳はまだ１５ほど、青のジーパンを履き、黒い服の上に青と黒のチェック柄のシャツを着ている。更に、首には小さな十字架のネックレス、右腕に二つの腕輪を付けていた。
……あんまり女の子らしい格好ではない。事実、身につけている物は全てメンズ。
「…何って、見れば分かるっしょ。…それポンッ！！」
答えたのは黒猫だった。
四匹の猫は輪になって麻雀をしている。実際は四匹の内三匹は見ているだけで、残りの一匹が牌を動かしているだけだが。
もちろん幻覚ではない…。
頭から尻尾まで真っ黒な黒猫だった。ただしその尻尾は二本ある。
「ハッハッハァ、ロンだぜ勝ったぜえ！　分かってんだろなあ、負けたら脱げよ！　すぐ脱げよ！！　てか脱がしてやるからなっ！！
やっべぇ超テンションアゲアゲ→なんですけどおお！」
無駄にイケメンな大声が路地裏に響く。

女の子は生ゴミを見る時のような目で黒猫を見て一言、
「…うざっ」
とだけ言った。
「うざって…、いま真剣勝負真っ最中なんだよ。なんか用があるなら一行にまとめて言いなさい」
「最近変な事件が起きてるじゃん？　神隠しみたいに人がいなくなるってやつ。実際は血痕が残ってるってテレビで言ってたから誰かに襲われたんだと思うけど、ネコマタ…あんたなにか知らない？」
「俺の話聞いてた？」
ネコマタと呼ばれた黒猫はちょっと涙目になった。
「なんだよマイちゃん、俺を疑ってんの？　よっしゃリーチ！！
…やめてくれよ、俺は人を襲うなんて変態行為はしねえっての。…
あああ！！　てめぇ何ちゃっかりあがってんだよ分かったよ脱ぎゃあいいんだろ脱ぎゃあさあ見るがいい美しすぎて鼻血だしてもしらないかんね！！」
「一人麻雀もうやめろ！！　てか脱ぐもの無いだろが！！」
マイと呼ばれた女の子は自分の毛皮を剥ごうとしたネコマタを止め、腕組みしながら話を続ける。
「じゃあなに？　あんたじゃないなら誰？」
雀牌を片付けながらネコマタが、
「俺は知らん…けど…」
「けど？」
片付け終わり、マイと向き合う。
「なあんか妖怪っぽくない…“あっち”関係の匂いがする」
マイは首を傾げて頭の上に？マークを出した。
「ほら、『世界の歪み』ってやつ。何だったっけ？　その関係で人間に影響がナンタラカンタラホンニャラ…？」
ネコマタの頭の上にも？マーク。間を空けて、
「あぁ！　なんか超能力が使えるようになるってやつか」
マイは手の平をポンッと叩き、思い出した事を動きで表現する。

「…でも、なんでそう思うの？」
と、マイが聞くと自分の髭を撫でながらネコマタが、
「勘」
ペロッと可愛く舌を出した。
言った瞬間、マイはネコマタの髭を引き抜いた。相当に腹が立ったらしい。
「イギャァァアアアアアアアアアイイ！！？　何故！？　どゆこと！？　解せぬ！？　馬鹿じゃねえの！？　てかバカだ！！」
ネコマタは魚のように跳ねる。
「てめぇがバカだ。真面目に答えろ」
マイの視線はそれはそれはもう、さながら絶対零度の如く冷めきっていた。
「だ…だから、まだここら辺で俺以外の妖怪確認してないし、『能力者』だったら神隠しも出来るかなって…」
肉球で頬を押さえ、自分の考えを述べるネコマタ。
「…神隠しかあ…ほんと、いい度胸してるよ」
マイは俯いてため息をついた。
跳びはねるのを止めて、ネコマタはマイの方を向く。
「…まあ、たしかにな…」
マイもネコマタの方を向いた。そしてネコマタは、
「“本物の神様”がここにいるのに神隠しのまねごととは、本当にバカだぜ」
と呟く。
マイは軽く頷き、
「って言っても、ただの代行だけどさ」
などと言った後、マイはネコマタの横を通り過ぎて、まっすぐ歩きだした。ネコマタは頭だけ後ろに向けて、
「お帰りかい？　出口は右に曲がってまっすぐだぜ？」

「いや、左に行く。寄らないといけないから。」
「…？　なんかあったっけ？」
「アニ〇イト」
「……好きだな」
「テニプリＤＶＤボックスが私を呼んでいる！！」
ガッと力強く握りこぶしを作る。そんな様子を見て、ネコマタは呆れ返る。
「まあいいけど…、こっちはこっちで調べてやるよ。ただし、報酬は魚三匹な。さんまならなおよし。」
マイは振り返って、
「よし、シジミをやる」
「魚類ですらないぞ！！　それは貝類だ！！」
マイは笑いながら、左に曲がってア〇メイトに向かった。姿が見えなくなった後、
「…はあ、仕事熱心なんだかどうなんだか…」
いつの間にか猫達もいなくなっていたので、ネコマタも路地裏から出ていった。
とある路地裏に誰も居なくなった。

そして、このお話は始まる。
妖怪のネコマタと、
神様代行のマイの、
愉快で怪しいなんでもありな話。

第一話：VSステイク？- キタレアニメタイコク（前書き）

ネ：「サイクリング行こうぜ」

マ：「だが断る」

第一話：VSステイク？- キタレアニメタイコク

「マイちゃん、どうして昨日午前高校遅れたの！？」

四月三十日火曜日晴れ昼休み、私立間蔵〔マクラ〕高校三階（全部で四階）一年R組窓側の座席にて、マイちゃんこと高上　舞〔タカガミ　マイ〕は話かけられた。

「…ちょっと五月病で行く気がしなくて」

「そっか、五月病なんて誰だってなるよね！！　むしろ午前中に治してきて学校に来るなんて褒めるべきだよ！！」

そう言って、羽蝶　蜜子〔ハチョウ　ミツコ〕はマイの頭を残像が残る程の超スピードで撫でた。黒髪のポニーテールがまさに馬の尻尾のように揺れに揺れている。

蜜子はマイの親友で幼い頃からの知り合いである。少し茶色がかった髪を邪魔にならない程度に切り揃えられ、なかなか綺麗な顔立ちをしている。ご覧の通り常にテンション高めの性格。

「…蜜子、…ちょ、…まじ、…揺らさな、…昼飯が、…出る」

「ん！？　あっゴメン、さっきお弁当食べたばっかりだったね！！」

「マジで勘弁して…、ブレザーにゲ〇ついたらクリーニング代出してもらうから…」

「なんと！！女の子のマイちゃんから〇ロ発言とは…まあいつものことか！！」

「いつもゲ〇吐いてるみたいに言うんじゃない！」

第三者視点から見れば大声でかなり下品な会話をしているかなり迷惑な女子高生である。

セーター姿の二人は向かい合うように椅子に座り、そんな周りの視線を無視して（というより気づいてないだけ）会話を続ける。

「それにしても昨日の先生のマイちゃんへのキレっぷりは凄かったよねえ！　学校だけマグニチュード８の大地震が襲ったような感じ

だったよ！」
「あー…それは私も思った…、鬼懺〔キザン〕先生キレるとあんなに怖いとは思わなかった」
「授業中はあんなに優しいのにねえ！　ハハ！！」
「連絡するの忘れたって説明したのに…」
と、言っても連絡出来るわけがない。なぜなら彼女は、とある路地裏で妖怪であるネコマタから神隠し事件の情報を聞き出し、ついでにアニメ〇トに寄ってテニ〇リＤＶＤボックスを購入、更にはサイゼ〇ヤでハンバーグステーキのライス付き＋ドリンクバーを頼んでお昼ご飯を済まして来たのである。これをそのまま説明すれば中二病患者のレッテルを貼られること間違いなし。
「…あ、そういえばあの事件ってどうなってんの？」
「ん？！　あー、あの事件ね…！」
ほんのちょっとテンションを落とす蜜子。
あの事件とは、最近この学校の近くで起きている失踪事件のこと。

最初は男性のサラリーマン、

次に同じく男性のカメラマン、

最後に主婦。

この三週間の間に突然三人もいなくなった。一週間に一人のペースである。
順風満帆なはずの彼らが失踪する理由もなく、その証拠に失踪した後、必ず失踪者の家の近くに血の跡が残っている。
ＤＮＡも本人と一致し、誰かに襲われて監禁されている可能性が高いと警察がテレビで言っていた。
少しの間を空けて蜜子が、
「何の進展も無いっぽいよ。テレビで何も言ってないし。…てゆう

かあんまし女子高生っぽい会話じゃないよね。…マイちゃん興味あるの？！」
見つめてくる蜜子から目を背けながら、
「いや、まあちょっと…。あんまりニュース見ないから…」
「はあ…、だからマイちゃんみんなの話題についてこれないんだよ…」
「…まあ、あんまし気にしてないし…」
マイはどちらかと言えば友達が少ない方である。かといって嫌われていたりイジメられたりされている訳では無く、ただ純粋に友達と呼べる人が少ないだけなのだ。もちろん蜜子は例外である。
キ～ンコ～ンカ～ンコ～ン…と、鐘の音がぼろいスピーカーから出て来た。いつの間にか昼休みが終わっていたらしい。
「やばっ、次の授業鬼懺先生だ」
マイは慌てて教科書を出すためにロッカーへと走る。
ついでにロッカーを開けながら、マイは失踪事件について考える。
たまには真面目に仕事をしなくては…。

そう、マイの仕事は犯人を見つけて捕らえること。

マイは『神様代行』と言う特殊な仕事をしているのだ。

―――――――――――――――――――――

さてここら辺で、『神様代行』と言う怪しい仕事を高上　舞がし

ているのかを説明しよう。
約八ヶ月も前のことである。
マイの家庭は親が共働きをしていてなかなか帰って来ない為、自分と兄だけでなんとか家事をこなしている。そのためお小遣をもらう機会が少なく、節約しながら欲しい物を買うといった状況である。
マイは苦しんでいた。マンガ、ゲーム、グッズ、などなど自分の趣味をかなり我慢せねばならないからである。
「砂漠の真ん中で生活しろと言ってるようなもんだ」
と、マイは語る。
そんなわけでお金の為にバイトを探すことにした。しかしレジ仕事は会話が苦手なのでやりたくないし、肉体労働も疲れるからしたくないし、
「てか今までバイトしたことねえし」
と愚痴る始末。
そんな時、一枚の貼り紙を見つけた。

《バイト募集中！
日給三万、好きな時に来て好きな時間に帰ってよし！
仕事内容はバイト先で説明します！
もちろん怪しくありません。本当です！
希望者は朝８時に〇〇町の駅前まで！》
……怪しいにもほどがあった。
「こ……これだあああッ！！！！」
…が、何の気の迷いかマイはその話に飛びついた。
飛びついてしまった。
以外とバイト先が近く、バイト経験がないマイにとって、あまりに都合のいい話しに見えたのだ。
翌日、案の定希望者はマイだけで、駅前には白いフードコートを着た男がいるだけだった。
「説明の前にこれを…」

ボソッと聞き取りずらい声で男が言うと、マイの右手の甲に何故かインクのついてないハンコを押し、金色の腕輪を着けさせた。そして

「では、今日から貴女は『神様代行』です…。『天界』で処理仕切れない怪事件の解決を手伝って下さい…。拒否した場合さっき押したハンコの効果で頭に激痛が走った後、脳みそが爆発します…」

とんでもないことを言い出した。

「嫌で…っ！？　ぬぐぅぉお～～！！」

すぐ断ろうとしたが、考えた瞬間脳みそを直接揺さ振られるような感覚に襲われた。…なんか本当っぽい。

苦しむマイを無視して男は事情を説明する。

何でも、この世界は大まかに三つにわかれていて、

悪魔が住む『地獄界』

人間が住む『地上界』

天人が住む『天界』が存在しているらしい。

その中でも、『天界』の仕事には『地上界管理』と言う特殊な職業があるらしい。死んだ生き物の魂をリサイクルし、新しい命として地上に帰すのが主な仕事で、常に地上を見守っている。そしてもし、予想外の死、つまり悪魔が引き起こしたもの、異能力によるもの等が起きた場合、原因究明、解決も行っているらしいのだ。

しかし、最近天界人により『世界の歪み』と命名された謎の現象により、異能力者が増えはじめ、対処仕切れなくなったのだ。

そこで藁をも掴む勢いで地上人に助けを求める最終手段をとることとなったのだ。

それだけを説明した後、

「ではまた後で連絡します」

と言って、男は目の前で蜃気楼のように消えてしまった。

「……」
訳もわからないまま、放心状態ですぐ家路に着いたマイ。言いたいことがありすぎたが、とにかく忘れたかったのだ。
家に着いた後もずっと放心状態が続いたが、
「まあ手の込んだイタズラか…」
と勝手に解釈して現実逃避。
しかしその夜、自宅にあの男からの電話が掛かってきた。ボソッと聞き取りずらい声で、
「事件解決に協力お願いします…」
もちろん電話番号を教えた覚えはなかった…。
こうして、マイは『天界』にまんまと利用されてしまったのだ。
そして今も現在進行形で、絶賛利用され中である。
普通の人なら文句の一言二言あるだろう。むしろ告訴したい程に。しかし、お金はちゃんと貰える（ちゃっかり一万円になってはいたが）。だからマイは特に何も言わなかった。
それで物が買えるならそれで満足なのだ。
結局、マイは自分がよければそれでいいのだ。他のだれかを救うためではなく、自分の欲のために事件解決の仕事を引き受けたのだ。
しかし、人間なら必ずなにか自分の得の為に行動するはずである。

自分が手にするために

自分が勝ち残るために

自分が満足するために

自分が生きるために

高上舞だけではなく、人間なら当たり前のことなのだ。
だから『神様代行』になったからといって、マイが化け物になっ

た訳ではない。

マイは間違いなく、普通の人間なのだ。

ちなみに妖怪のネコマタと出会ったのは『神様代行』になった一週間後である。それはまた今度話すことにしよう。

――――――――――――

放課後、蜜子と別れてマイは一人で歩いていた。赤い夕日が街を

包む中、路地裏は一足先に夜を迎えているように暗かった。
ビルや飲食店が多いこの街には雑居ビルなどの建物と建物の間、つまり路地裏や裏道がかなりある。表側は綺麗に見えるが裏側はかなり汚い街なのだ。さらには不良のたまり場だったり猫の集落だったり、時にはヤバい取引が行われてたりしている時もある。
だからとにかく、マイはそっちに近づきたくなかった。不良に絡まれるというのもあるが、まず一番の理由は…
「ザ～ン～コ～ク～ナテ・ン・シ・ノ・テ～ゼ～～♪」
この無駄にいい声で歌ってる黒猫が絡んで来るからである。
「いやあ～、初めてヱヴァ見たけどいいよね～。まあTV版の最終回がいろいろ言われてっけど個人的には有りだと思うんだよ俺。劇場版も良かった」
…路地裏通るんじゃなかった、と後悔する。
二本の尻尾を揺らしながら、
「マイちゃんはどの使徒が好きだ？　俺はやっぱりラミ○ルかなあ～カッコイイよなあ～♪」
「私はカヲ○君」
「……ああ、初号機に握り潰された…」
「やめろ！　カヲ○君はカッコイイんだ！」
くだらない会話が裏道に響く。
「でもさあマイちゃん…、日本ってこのままでいいのかねえ…」
「？」
「このままだとアニメ大国のレッテルが剥がれなくなる気がするぞ」
「全然いい、むしろ瞬間接着剤で貼りまくってやる。キタレアニメタイコクウウウウゥ！！」
「お前のせいで現実が二次元に侵食される！！」
「アニメはいいよ…いいよアニメは…手にいれられない物が全て手に入れられるんだよそうだよだから人類は三次元ではなく二次元に住むべきなんだよさあ行こう平面の世界へフライアウェイキャッハアアアアア！！」

「お前ツッコミ担当だろ！？　戻ってこい！」
マイの立ち位置は時々ぶれる。
まともに戻ったマイはネコマタの方を向く。
「いいじゃない、人間なんだから夢ぐらい見るよ」
二本の尻尾を振りながら、
「正夢にしようとしたくせに…。まあ確かに、人間はどいつもこいつも欲深だからな」
「そうだよ？　人間は自分の欲の為にしか動かないの。ボランティアも結局は自己満足の為だから欲の内に入るよ」
「まあ俺も食欲とかには勝てないからな……あ、そうだ。事件調べてやったから例の物出せ。」
そう言うとネコマタはその小さい肉球をマイの前に突き出した。
「ああ、はいこれ」　ネコマタはシジミを手に入れた。
「……ずっとこれを持ってたことに驚きだよ」
シジミを一口で殻ごと飲み込み、ネコマタは事件について話す。
「事件現場に居合わせた野良猫に聞いたが、人間がいたから物影からビビって出られねえで直接見てないらしいが、あるどいつも同じ匂いと音を感じ取ったらしい」
「？」

「血の匂いと、何かを引きちぎるような音が聞こえたらしい」

「……」

背筋が凍る。
なにが来ても動じないと覚悟を決めていたのに、すでに妖怪という化け物と会話すら出来るというのに、あまりの犯人の得体の知れなさに、素直に恐怖したのだ。
マイは目に見える物なら何だって冷静に対処出来るという自信を持っているし、自分の長所だと思っている。しかしそれは、裏を返せば目に見えない物に関しては何も出来ず、不安になってしまうということだ。
マイはわずかに声を震わせながら、
「…そ、それで？　後は？」
何処かから出した紙を見ながら、
「猫（なかま）から聞けたのはそれだけだ。後はそうだなあ……被害者の年齢がほぼ同じってのは知ってるか？」
「あ、それは知ってる」
と言っても、ニュースを見ないマイは蜜子に教えてもらっただけだが…
「たしか被害者は皆二十六歳だったとか…」
「なんだ、知ってたのかよ。じゃあこんだけだな」
紙を自分の毛の中にしまい、
「じゃあせっかくだからもうちょい調べてやるよ。だから今度こそ魚を用意しな」
「じゃ、今度はアサリね」
「貝類はもういいよ！！　…んじゃな」
ネコマタは残酷な天使のテーゼを歌いながら路地裏の奥へ走って行った。
「…今日はここまでか」
ため息をつきながらゆっくり歩きはじめる。
すぐ事件が起きる訳でもないし、また明日捜そうと思った。

その時、

ヌメリとした、鉄臭い血の匂いが鼻に着いた。

マイの足が止まる。血の臭いは何となく路地裏の奥からした気がする。

「……どうしよ」

帰る気マンマンだったのに、目の前に犯人が、得体のしれない何かがいるかもしれない。

…別に帰ってもいい。

特に時間制限がある訳でもないし、最終的に捕まえればバイト代の一万円はちゃんと貰える。誰が犠牲になっても関係ない。

ぶっちゃけ怖いし。

「……」

マイは真っ直ぐ歩きはじめる。

ビルとビルの間、路地裏の奥へと。

助けたい訳ではない。ただ、仕事が長引くのが嫌だから。早めにお金が貰えるから。

マイはそう自分に言い聞かせ、歩き続ける。

マイは自分の為に、戦うことにした。

第一話：VSステイク？- キタレアニメタイコク（後書き）

ネ：「俺の出番少なくね？」

マ：「友達とサイクリング行ってくるね」

第二話：VSステイク？- ただの変態さ（前書き）

ネ：「今回長いな。そんなことより早く人間になりたい」

密：「そんな貴方にこの薬！！飲めばたちまち人間か∀ガ〇ダムのどっちかになれるよ！！」

マ：「アタシの五目チャーハンどこ？」

第二話：VSステイク？- ただの変態さ

「まいったなあ、ホントにまいった。どれくらいまいったかと言うと……まいったなあ。てか展開早過ぎ……」

とある路地裏。黒猫がブツブツ独り言を呟きながら走っていた。もちろんマイクからの声ではなく、幻聴でもない。間違いなくこの黒猫が喋っている。

「まさかこんな近くから血の匂いがするとは…」

二本の尻尾を振りながらまっすぐ走る。

喋るこの黒猫の正体は驚くなかれ、妖怪の一種で名を猫又〔ネコマタ〕と言う。

猫又とは昔、長生きした猫の尻尾が二つに分かれて妖怪になったものと言われ、人に化けたり、油を舐めたり、時には人を襲って喰ったとか。

そんな妖怪が何故こんな街にいるのか。理由はズバリ、仲間探しのためである

実はもうこの時代の妖怪は殆ど絶滅危惧種みたいなもので、一県内に一匹いるかいないかのレベルでしか存在しない。しかし、最近何故かこの街に妖怪が集まりつつあるのだ。それが何を意味するのかはまだわからない。

とにかく、他の妖怪に会う機会がなかったネコマタは、自分と同じ化け猫仲間と出会うためにこの街を拠点にしたのだった。

「……まさか、マイちゃん襲われてないだろうな…」

ネコマタは、心の底から心配そうに

「俺のご飯運搬係が勝手に殺されるなよ…」

してなかった。

その時、ネコマタの足が止まった。

「…？　匂いが分かれてる？」

血の匂いの出所が複数ある…
まさか同時に複数人殺したか？　いや、不可能だ。まだ新しい血の匂いだし、それぞれ離れ過ぎてる。ならば殺し損ねたか……考え込むネコマタ。
「…マイちゃん、マジで平気かな…」
この失踪事件の犯人はヤバい気がする。ネコマタは仕方なく適当に道を選んで走っていった。
「ん？　よおネコマタ」
途中、知り合いの猫が、猫しか解らない言葉で話し掛けてきた。
「ん？　今忙しいから後でな！」
「いや、お前が言ってた事件なんだけどよぉ」

そして

―――――――――――――――――――――

大型立体駐車場。六階建て。
近くのデパートのために建てられたが、あまりにも街の外れにあるので利用する人がいなかったので、デパートもろとも廃墟となってしまった。
そんな駐車場に一人の女子高生が入って行った。スカートとワイシャツに袖の無い肌色セーター姿、間蔵〔マクラ〕高校の制服（夏服）。
肩まで伸ばした黒髪を結んでポニーテールにし、鞄から取り出した金色の腕輪を右手に着け、高上　舞〔タカガミ　マイ〕は『神様代行』として犯人を捕まえに来たのだった。

「…とりあえず、…探すか」
匂いの出所は間違いなくここ……だと思う。途中他のとこから匂った気がするがとりあえずここに来た。迷ってもしょうがない。
適当に一階ずつ見て、非常階段で上に上がる事にする。
そして六階、この上は屋上になっている。
左右からは街が一望出来た。前方はずっと駐車場。どこまでも駐車場。車は一台も無く、立入禁止の看板が倒れていた。
……本当に広い。
どんだけでかいの建ててんだよ。確実に金の無駄遣いだろ…。
上下はコンクリートで固められ、何本も柱が四列になって続いている。高さもだいぶある。
駐車場の真ん中まで歩いて、誰もいないのを確認して、
「……じぁあ次は屋上か」
と、階段に戻ろうとしたその時、

カン…カン…カン…と、誰かが階段を降りて来た。

思わず驚いた。もしかして犯人かもしれない…。
「嬢ちゃん…お母さんに教わらなかったか？」
非常口からその男は出て来た。
「こんな時間に一人ぼっちでいると……」
男は体を屈め、足に力をいれる。
「変態さんが出るってなあぁ！！」
次の瞬間、男はマイに向かって突撃した！
右手に持ったナイフを振り回しながら、たった四秒でマイに接近する。
「うわっ！？」
マイはそれを、
「近寄んなあああぁ！！」
ガキンッと男の股の“アレ”を蹴り上げることで止めた。

「ヘキュッ！！？　…カッ！？　…コホッ？？」
ナイフを落とし、バタリとその場に倒れ込む。
「……」
マイは犯人を倒した。
「マジで！？　こんなアッサリと！？」
とか言ってる間に、男は顔だけ上げた。
「…ま、まさ…か…、こんな…嬢ちゃんにやられるとは…。君、強いね…、この投石　炎岩〔トウセキ　エンガン〕、油断した…」
見た目若く、ワックスでツンツンにした髪と少しアゴ髭をはやした男。ガラシャツの上にヨレヨレの黒いスーツを羽織っている。ケガでもしてるのか、スーツに血が付いていた。
「……まあ、慣れてるから」
『神様代行』になってから体が強化されてるのと（血の匂いが分かったのは嗅覚が強化されていたおかげ）、多少は実戦経験もあることがあるから慣れていると言う意味です。
炎岩と名乗った男は倒れたまま、マイをジロジロ見た後、
「その服、間蔵高校の制服か？　懐いなぁ…。俺、そこの卒業生だよ」
マイは無視して、
「アンタ誰？　もしかして犯人？　だったらアタシは、アンタをギッタンギッタンにボコさないといけないんだけど」
炎岩はゆっくり立ち上がった。
「フッ、俺ぁただのしがないヤクザの下っ端やってる変態さ…。所で嬢ちゃん、アンタ俺の好みピッタリなんだけど、付き合ってください」
「嫌です」
「友達になってください」
「だが断る」
「ヤらないか」
「そこに座れ！！　ボコボコにしてやる！！」

握りコブシを振り上げる。
瞬間、右頬に鋭い痛みが走る。
「……えっ！？」
マイの目の前を何かが飛んできた。
振り向く。すぐ後ろのコンクリの柱にヒビがはいっていた。そのヒビの中心に灰色の円柱が、いや、灰色の杭が刺さっていた。
炎岩はバックステップで素早くマイと距離を置く。二人の間はおよそ十五メートル。
「仕方ない…、付き合ってくれないならとりあえず逃げるまでだ。モタモタしてると人呼ばれるからな…」
炎岩の足元のコンクリートが、ザラザラと音を立てて削り取られる。そして、砂状になったコンクリートが炎岩の頭上に集まって行く。
「せっかく『能力』使って、幹部どもをボコボコにしてまで組を抜けたのに、また相手するのはやだからなぁ」
集まったコンクリートが五つに分かれ、杭の形を作る。
そして、炎岩の周りに浮いて停止した。
「見ろよ、このスーツ。幹部から奪った戦利品なんだぜ？　今更返しますって訳にゃ…」
右手を、マイの胸に、心臓に向けて振り下ろす。
「行かないんだよなッ！！」
五つの杭が真っ直ぐマイの心臓に向けて飛ぶ。速度は拳銃のそれ以上、目にも留まらぬ速さで飛来する。
しかし、マイは炎岩が手を振り下ろす前に動いていた。
マイは右腕を前に突き出し、力を入れる。
その瞬間、右腕に着けた二つの金色の腕輪の内の一つが光を放ち、手首を包む。その間約一秒。

光が消えた時には、
マイは一本の剣を右手に携えていた。
あまりに特徴が無い剣。見た目はＲＰＧだと一番最初に装備しているような両刃剣。鍔にも目立った装飾は無く、刀身も曇ったような白色。全長はちょうどマイの胸の高さくらいの長さである。
そんな剣をマイはひょいと軽く持ち上げ、飛んでくる五つの杭を一つ残らず切り裂く。
「……ぁあ？」
炎岩はア然とした。
それもそのはず、暴力団すらものともしない、最強なはずの自分の力を、どこからともなく取り出した剣一本で防がれたのだ。
「……なんじゃそりゃ？　嬢ちゃんも能力持ち？　まさか、俺と同じ選ばれた人間なのか…！？」
マイは剣をつまらなそうに担ぎ、
「それこそなんじゃそりゃ？　アタシは『神様代行』ってのやってるだけなの。アンタみたいのを取り締まわないといけないの。分かる？」
「なるほど…つまり俺に告白を……」
「何でだふざけんなッ！！」
無視して炎岩は一歩下がり、仕切り直す。
「つまり俺と嬢ちゃんは同じ『能力』持ちなんだろ？　だったら勝負勝負！」
「……殺してえ」
深い深いため息をはくマイ。
正直こうゆう性格のタイプの『能力者』は何回か見たことがある。
ここまで好戦的なやつは初めてだったが、『能力者』が選ばれた人間だとか神だとか、主人公気取りの中二病患者。この投石　炎岩という男はその典型的パターンの一人だろう。

「言っとくけど、本当は直前で止めようとしたんだぞ。俺の『石杭射出〔ストーンステイク〕』はもっと速い」

炎岩の足元が削られ、また空中で杭の形になる。

「そして、もっと大量だ」

炎岩の周り、半径十メートルのコンクリートが砂に変わる。

すべて、炎岩の頭上に浮かぶ大量の石杭へと変わった。

「……………勘弁してよ……」

マイは剣を両手で持ち、腰の位置に構える。

炎岩はマイを確実に仕留めるために、百本以上の全ての杭を打ち出すために、両手の人差し指でマイを指差す。

「さあ止めてみろ！　さあ切り捨ててみろ！　さあ倒してみろ！！　ただし、俺の杭は止まることなく、剣も追いつくことなく、無敵だけどなぁぁッ！！」

ヒュンヒュンヒュンッ！　と杭が風を切る。長さ三十センチ、太さ十センチの石で出来た杭が、まるでライフル銃から打ち出された鉛玉のようにマイに襲い掛かる。

「ッ……ハッ！」

息を吐き、マイは剣を振る。

『神様代行』の肩書きがマイの身体能力を底上げしてくれているため、飛んでくる杭の一つ一つを確認し、確実に切り付けることが可能なのだ。

最初に右肩、次は左脇腹、それとほぼ同時に右足に来る。

確認し、剣を振る。最初の杭を右手の剣で真下から切り上げ、左横から右下に切り落とし、二つの杭を同時に切る。切り捨てた杭はガラガラと落下した。

だが、それでもまだ杭が飛んでくる。

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンッ！

風を切る音が永遠と連なり、止まることを知らない。
炎岩は指を動かさず、足元のコンクリートを削って減った杭を補充する。そして、饒舌になった炎岩は笑いながら、
「クハハハァ！　どうしたどうしたどうしたよぉ、もっと頑張れよ！　こっちはコンクリがありゃあ弾∞なんだぞ！？　気張ってくれなきゃつまんねぇぜえぇ！」
マイは剣を持つ手を右手だけにし、腕を動かし続ける。
ズバズバとリズムよく切り捨てるが、少しずつ、確実に体力が消耗してきた。たしかに体力も底上げされているが、あくまでも無限ではないのだ。
「ハッ…ハッ……んっ…ケホッ」
息が荒くなる。
だが、炎岩はその手を止めない。
「…ん～、もう限界か…。まあ、俺の彼女になるんなら…許してやるかな？」
「……だ」
「ん？　ゴメン、よく聞こえなかった！」
「嫌だ！！」
次の瞬間、ボゴンッ！　と、大きな音と共に砂煙りがたつ。
「…当たったか？」
手を降ろし、杭を止める。
「……ありゃりゃ？」
マイはそこにいなかった。あるのは地面に開いた一人分通れる穴だけ。
「……ッチ、逃げたのか……。まあいいや…ここまで来たら何が何でも何だろうと、俺の愛人にしてやらぁ」
炎岩は穴にゆっくりと近づく。頭上にあった杭は炎岩から離れて行くに連れてボロボロ崩れていった。
「今行くぜ…、その場で張り付けプレイに突入してやっからな♪
……っとと！？」

途中、足元の小さな穴に蹴っつまづいた。倒れそうになって踏み止まる。
「……穴??」
どうやら、地面の四角く開いた穴に足がはまってしまったらしかった。削り過ぎたか？　いや、そんなはずは……と、穴を見つめる炎岩。

次の瞬間、ボゴンッと音を立てて、足元が崩れ落ちた。
「ッ！？　…なッ！？
さいの目に綺麗に切り取られたコンクリートと共に、炎岩も下の五階に落下する。
そこに、剣を構えたマイがいた。
「！　……このっ！」
マイは逃げる所か攻撃の雨を避け、反撃に出る為に下の階に降りたのだ。
そしてもう一つの理由。炎岩は杭を作り出す時、柱や天井を使わず、足元のコンクリートしか使わなかった。もし、能力が有効なのが足元のコンクリートだけだとしたら……
「空中で……杭を作れるか？」
炎岩に向かってマイはジャンプした。剣を下段で構え、切り掛かる。
「っ、…まだまだあアァッ！！」
叫ぶ炎岩は無理矢理身をよじり、落ちるコンクリートのブロックの一片に足を付ける。ブロックは形を変え、小さめの石杭になった。そして、マイの眉間に発射される。
「ッ！」
マイは剣を盾にして防ぐ。
だが、杭のあまりの威力に吹き飛ばされた。ドンッと背中から地面にたたき付けられる。肺から息を吐き出し、苦痛で顔が歪む。

「ゲホッ！？　ぐっ……まだまだっ！」
それでも、マイはすぐに立ち上がり、尻餅をついている炎岩に向きなおす。
炎岩はまた距離を置き、余裕の笑顔を浮かべた。
「クハハハハハァ！　結局どうする？　遠距離攻撃は俺の専売特許だぞ？」
確かに、マイの武器は剣。この距離からは攻撃出来ない。
「…じゃあ」
しかし、マイも笑顔を浮かべる。
「…こっちも遠距離攻撃」
「何て？」
剣を水平に炎岩へと向けて、

ギュンッ！！　と、一直線に剣先を伸ばした。

「は、…はぁああッ！！？？」
比喩ではなく、本当に剣が伸びてくる。
炎岩は身を屈めるが避けきれず、左肩にかすった。肩を押さえて痛みを堪え、歯を食いしばる。
「グッ…ウウゥウウウゥウゥッ……！！　な、なんだ……その…剣！？」
剣が元の長さに戻る。
「…『メタモルフォーゼ』っていう剣で、初めてバイトに来た時に貰ったやつ。質量無視して形を変えることが出来るとか…、まあなんとなくで使ってるけど」
「じゃ…じゃあ、最初っから使ってれば…」
「…疲れるし」
「！？」
マイは本気ではなかった。
何度も言うようだが、いくら体が強化されていると言っても、限

界は必ずある。パワーもディフェンスもスピードもスタミナもＨＰも、結局はマイの元々のステータスにわずかにプラスされただけに過ぎない。
疲れるものは疲れるし、怪我するものは怪我するのだ。

疲れたくない、

怪我したくない、

汚れたくない、

めんどくさい。

だから本気を出さない。

しかし、それでも炎岩と戦うには充分過ぎた。その気になれば、マイはいくらでも攻撃するチャンスがあったのだ。
「……」
コツ…コツ…と、無言で右手の剣を構えながら炎岩に近づくマイ。
炎岩は怯んで動けない。
「…こ、殺すのか？」
炎岩は震える声で言った。
「いや、こらしめるだけ。降参して白状するなら、『能力』だけ消して警察に突き出すだけで済ませてあげるけど…」
「わかった…わかった…。暴力団のことは、ちゃんと警察に言う……」
「じゃなくて、失踪者はどこかって言ってんの」
炎岩はキョトンと目を丸くする。
「……なにそれ？　俺は組の人間を攻撃しただけだぞ？」
マイの足が止まる。

「？？？」
（まさか、犯人はコイツじゃない？　だったら誰？）
マイは頭を抱えて考え込んだ。その間に、
「……くっ！」
炎岩は立ち上がり、『能力』を発動する！
「！　しまった！」
今度は足元だけではない。壁も柱も天井も、すべてが塵となり、一点に集まって行く。炎岩は笑いながら、
「クハハハ、…俺の力の有効範囲は足元だけじゃない、足に触れるコンクリ全部だ！　…え？　何で最初から使わないかって？　疲れたくないからだよっ！！」
マイの足元まで砂となり、真下に落下する。
「う…うわっ！」
今のマイなら多少高い所から落ちても耐えられる。マイは四階三階をすっ飛ばし、二階に着地した。
「…あれ？　四階と三階は？」
マイは上を見上げ、現状を確認する。遥か高くにあるのは赤く染まった空と薄い雲。

それと、とてつもなく巨大な石杭。

「…でっけぇなぁ、おい」
炎岩は二階から上の駐車場のコンクリートすべてを使い、超巨大な杭を作り出したのだ。
「『鬼殺しの大岩杭』……俺の必殺技だ！！」
怒りと疲れが混ざったような声が上からする。ここからは見えないが、炎岩は杭の上にいるようだ。
「避けれるもんなら避けてみろ。止めれるもんなら止めてみろ！斬れるもんなら斬ってみやがれえええええぇ！！！！」
杭が落下を始める。マイを潰すため、ビルのような円柱が空を切

り裂きながら降ってくる。
マイはそれを、冷静に、静かに見つめる。
「…じゃあ避けてあげる」
ゆっくりと足を曲げ、
「…じゃあ止めてあげる」
剣を変形させて伸ばし、
「…じゃあ斬ってあげるッ！！」

マイは杭に突っ込んだ。

「ァァァァァァァァァァッ！！！！」
杭の尖端からズバズバと、リズミカルに斬り刻む。
伸ばした剣が巨大な杭を端から端まで動き斬り付け、杭はコンクリートのブロックへと変わる。斬撃のあまりの勢いに巨大な杭は上に押し返され、結果的に空中で静止しているように落下が止まっていた。
「…なんだ！？　何で落ちない！？」
炎岩は理解出来なかった。理解出来る訳がなかった。たった一本の剣だけで、たった一人の女の子だけで、自分の本気の攻撃を防がれるなんて信じられる訳がない。
『神様代行』の肩書きが与える力は確かにわずかな物だ。ただし、力はマイの潜在能力を最大限引き出した状態にプラスされる。そして、マイの潜在能力は桁違いだったのだ。
もちろん炎岩はそのことを知るよしもない。
「こんな…こんな事って…！　ありえねーだろ！！」
「ウォルィヤァァッ！！」
杭の四分の三を切り刻み、マイは剣をトドメと言わんばかりに振り上げる。バカンッと杭が真っ二つに分かれ、巨大な杭は巨大な音と共に地面に落ちた。
よろっと炎岩は衝撃で体勢を崩す。顔がくしゃくしゃに引き攣っ

ていた。
「ウオ！？　…そ、そんな！？」
そして、炎岩はその割れ目に立つ人影を見た。
「……お望みどおり、止めたよ」
何事も無かったかのように、当たり前のように、剣を担いだマイがそこにいた。
「う…うわっ、は…ハッ、クソッ…」
炎岩は膝をつく。その顔に、戦いの意思は無かった。
マイは炎岩の前に立ち、幼い子供に問うように優しく聞いた。
「本当に、アンタが失踪事件の犯人じゃないの？」
炎岩は俯きながら、
「…知らない。俺にはそんな度胸は無い。…ビビりながら暴力団の下っ端やってただけだ」
「……なんでそんなことしてたの？」
「よくわかんねえ。気づいたらこんなことしてた…」
「……」
マイは何も言わず、制服のスカートから紙を取り出した。その紙を炎岩の頭に貼る。すると、紙は溶ける様に消えた。
この紙はいわば目印の様な物で、『天界』の役員はこの目印を頼りにやって来て『能力』を奪う。
そしてマイは、
「…アタシが言うのもなんだけど、…やり直せるよ。まだまだ先は長いから」
それだけ言って、人が来る前に走って帰って行った。
「……年下の女の子に言われちゃったよ……」
炎岩は座ったまま、空を見た。赤色から、ゆっくり紫色に変わろうとしていた。

―

「あ、ネコマタ～～～」
帰っている途中、ネコマタに会った。
ネコマタはマイに駆け寄って、
「マイ、大丈夫か？　犯人は？」
マイは困った顔をして、
「あー…違ったみたい。炎岩とか言う変態だった」
「…そっか、で、今日はもう帰んのか？」
「うん。…なんかあんの？」
「まあな」
ネコマタは毛の中から出した紙を見ながら、
「被害者の共通点がな、もう一つ分かった」
「？」

―

「全員間蔵高校の卒業生だ」

―

「……やり直して、何すりゃいんだろ？」
ボリボリ頭を掻く間蔵高校卒業生、投石炎岩。
親に心配かけて、好き勝手やって、挙げ句の果てヤクザの下っ端

やって、嫌になったから勝手にやめた自分に何が出来るのか。
「…とりあえず、警察行かなきゃな」
暴力団の仲間が来る前に自主することにした。諭されたのが女だろうと何だろうと、感謝しなければ…。
そう思って、投石　炎岩は歩き始めたその時ふいに、足音がした。暴力団の連中か？　いや、早過ぎる。野次馬だろう。と、急いで去ろうとした。

だが、その足音は真っ直ぐ、炎岩に向かって走って来た。
「！？」
気づいた時にはもう遅い。首筋に鋭い激痛が走る。

何かが炎岩の首筋に食いついた。
「…！？、……！！？。ごっ…ゴボッ！！、、、ァ…ごえェ！？。。」
皮膚を破き、血管をちぎり、喉仏を砕き、牙が気管を貫いて穴を開ける。
血が開いた穴から空気と共にゴボッと噴き出した。食いついた“それ”は血を飲み乾そうと喉を鳴らした。
炎岩の体はビクッと痙攣し、感覚が麻痺する。
「…！？　…くっ…そ！」
それでも炎岩は足を動かす。
かろうじて一本の石杭を作り、それに向けて発射する。
当たるぎりぎりで喉から離れ、服がわずかに破けただけだった。
炎岩は首を押さえながら逃げる。しかし、もう走れない。ふらふらとよろめきながら細道に入る。
そこで、足が止まった。
「…ひゅ～…ひゅ～…」

喉に穴が開いていて上手く息が出来ない。血も止まらない。
後ろからやつが来るのが分かる。もう、ここまでだ。
炎岩は汚い細道で前のめりに倒れる。結局やり直すことなく、あっさりと死んでしまうのだろう…。

いくら後悔しても、

いくら反省しても、

いくら謝っても、

あいつが止まる訳にはならない。
…そういえば、あいつどっかで見た。昔、あの顔を見たことがあったはずだ。

…確か……あれは……

グチャ

炎岩の意識は、そこで途絶えた。

第二話：VSステイク？- ただの変態さ（後書き）

∀：「俺の出番少なっ！！」

炎：「彼女募集中！幼女熟女問わないぜ」

マ：「五目チャーハンどこだっつってんだよっ！！」

第三話：VSビースト？- 動物保護団体に訴えるぞ（前書き）

ネ：「第二話の前書きで蜜子の『蜜』が『密』になってたぞ？」

蜜：「気分によって使い分けます！！」

マ：「気分で名前変わるの！？」

第三話：VSビースト？- 動物保護団体に訴えるぞ

五月六日木曜日の曇り。
最近、警察がよく来る間蔵〔マクラ〕高校。
なんでも、事件の被害者がこの学校の卒業生だとやっと調べ出し、教員に事情聴衆しに来ているらしい。
そんな学校の屋上では、昼ご飯を食べに来たり、彼氏彼女とイチャイチャするために来たり（死ねばいい）、ただ暇だから来た生徒がちらほらといた。
その中に、一際大きな声がアタシに向かって喋っていた。
「本当なんだって！！　でっかい石が浮いてたんだって！！　信じてよマイちゃん！！」
羽蝶　蜜子〔ハチョウ　ミツコ〕。
アタシの親友。茶色がかった髪を邪魔にならない程度に切り揃え、藍色のブレザーを着ている。テンション高め。
「……ご飯飛ばすな」
そんな大声を聞いているのはアタシ、マイちゃんこと高上　舞〔タカガミ　マイ〕。
黒髪ポニーテール、寒くないからブレザーを脱いでセーター姿。
アタシと蜜子はお昼ご飯を食べるために屋上に来ていた。
そして、食べながら蜜子はマシンガンの様に喋り続ける。
「マイちゃんと別れたあと本屋に寄って立ち読みしてたらいきなりバーンッて大きな音がしてワーーッて！！」
「う…うんうん……」
長い付き合いだけど、こんだけ喋られるとつらい…。
それに、アタシは見たどころかそれを実際に体験しているから、今更聞いても驚かないよ。
六日ほど前、投石　炎岩〔トウセキ　エンガン〕とか言う男と戦った。蜜子が言っているでっかい石とは、炎岩が使った『能力』の

ことだろう。
…そう言えばあいつ、あの後どうしたのだろうか？
ちゃんとやり直すことが出来てるだろうか？
「うぉおーーい！！　聞いてんのかあ！！」
おっと、まだ喋っていた。
「聞いてる聞いてる。ガ〇ダムＳＥＥＤ最高」
「一言も言ってない！！」
まあ、放課後にでもネコマタに聞いてみよう。聞けばだいたい教えてくれるし調べてくれるし…

そう言えば、あいつどうやって調べてるんだろ？？？

―――――――――――――――――――――――――

「平成版ガメ〇２は傑作だと思う。レギオ〇のデザインとか神」
放課後、路地裏のど真ん中でネコマタは他の猫と共に特撮映画トークに花を咲かせていた。
「事件はどうしたあああああぁッ！！」
マイ、ネコマタに向けて渾身の肘打ち。
「背骨がああああアアアアアアアァッ！！」
普通の猫なら即死レベルの一撃を背中に直撃させた。メキメキゴキゴキと音がなり皮膚と肉と血管が裂け真っ赤な血が飛び散り目や鼻や他のあらゆる穴という穴から液体が

「そんな描写いらねぇんだよ！」
「いやいや、ちゃんと書かないと読者が想像しにくいでしょ？」
「お前が言うな！」
もちろんネコマタは妖怪なので死にません。ご安心下さい。
いつの間にか身体を元に戻し、改めてマイと向き合う。
「てかさ、事件事件うるさいんだよ…。シリアスも良いけど、笑いも必要だぜ？」
マイは近くにあったポリバケツに腰掛ける。
「アタシはアンタを見るだけで笑えるよ」
ちょっとにやけるネコマタ。
「お、なになに？　俺ってそんなに和み系？」
「滑稽で笑える」
「……泣くぞ」
その目は既に涙目だった。
ふうっとマイは息を吐き、
「…ま、いいや。たまには喋ろっか？　…そういえば、仲間って奴見つかった？」
「よくぞ聞いてくれた！」
涙目から一転、キラキラと目を輝かせて、嬉しそうにしながら喋りだした。
「うん、どうやらこの街に集まってきているのは本当みたいだった。この前会ったぞ」「ホント！？　何？　カマイタチ？　天狗？　河童？　それともアンタと同じネコマタ！？」
マイは身を乗り出す。
「イヌマタ」
そしてすぐ動きが止まった。
眉間にしわを寄せて、記憶の中からイヌマタの情報を検索する。
……出て来なかった。
「…なにそれ？」
「オスの柴犬の妖怪で名前の通り尻尾が二本ある。そして特撮なら

ゴジ〇シリーズが好き」
「最後の情報いらない」
やっぱり知らなかった。未確認の妖怪は案外多いのかもしれない。
マイは半分呆れながら一様聞いてみる。
「…そいつだけ？」
「いや、あと二匹会った」
目がミラーボール並に輝く。
「トリマタとサカナマタって奴らだ！　好きな特撮映画は平成仮面ラ…」
「もーーいいよっっ！！」
マイは立ち上がり、ネコマタをつまみ上げる。…以外と重たい。
「痛い痛すぎる！！　首の皮が剥がれる！！」
猫なのに痛いのか……。
「なんでどいつもこいつも〇〇マタなんだよっ！！　流行りか！？
流行ってんのか！？」
「違うって名前だって」
「何だトリマタって！？　何だサカナマタって！？　サカナマタに関しては魚類じゃねえか！！」
「本当にいるんだから仕方がない」
「ムムゥ〜〜〜…」
そう言われたら反論出来ない。この世界の裏事情はネコマタの方が詳しいし、嘘は極力つかない奴だから、多分本当なんだろう。信じたくないけど…。
ぺいっとネコマタを放り投げ、またポリバケツに座る。
「もっとメジャーなのはいなかったの？」
マイはもう一度質問した。
ネコマタは首をさすりながら、
「あのなぁ、妖怪は集まってきてるけど、そうそう見つかることは無いと思うぞ。上手く人間社会に紛れ込んでるからな」
まあ確かに。簡単に見つかったら妖怪は単なる珍しい動物、また

は人種となるだけである。見つからないからこそ、妖怪は妖怪でいられるのだ。
「…アンタ、即行アタシに見つかったよね？」
「ギクッ……な、何の話？　田中くんの話じゃね？」
「わざとらしい」
　ネコマタはこの街に来た瞬間にマイと出会った。話によれば、隠れることなく堂々と路地裏にいたらしい。
「アンタ妖怪っぽく無いんだよ！　もっと天狗とか河童とか見習いなさい！」
　ネコマタは目線を反らしながら、
「あれは油断したんだよ…。ちゃんとしてれば平気だし…」
「ちゃんとって何すんの？」
「そりゃあ…人に化けるとか」
「ふ～ん……。…マジでかっ！？」
　ガタッとポリバケツから崩れ落ちるマイ。
「今までそんなことしてなかったじゃん！」
「いや、やるタイミングが無くて……。見たい？」
　マイは首を高速で縦に振る。興味ありまくり…。
「仕方がない、では……その前に、格好良すぎて失禁すんなよ。あと…」
「はよせい」
　すぱーんっとネコマタの頭を叩く。かなりいい音がした。
「ウッ、はいはい…、では……」
「……ゴクッ」
　固唾を呑んで見つめるマイ。
「…では、……まず！、あらぶる鷹のポーズをとり！！　そのまま身体を一周半右にねじり！！　さらに一分間息を止める！！」
「ぉお！？」
　なんか凄い！？
「…のはつらいから省略」

「省略出来るんかいっ！？」
「次に、ヒンズースクワット千回を十秒間に五セット！！　終わったら宇宙〔ソラ〕に向けて電波を飛ばし、宇宙人と交信！！　宇宙人と友達になったらドラ〇エ５のラスボスとバトル！！　エンディング見終わったら島〇紳助さんにイタ電！！」
「いや待て！？　それは関係あるのか！？　そしてもっと内容が難しくなってるよ！？」
路地裏で動きまくる黒猫と、それにツッコミを入れる女子高生…。奇妙にもほどがある。
「するとぉおおお！！」
「い、いよいよ！？」
ようやくネコマタの動きが止まった。つられてマイも動きを止める。
「……」
「……」
ネコマタは頭から二本の尻尾どちらの先まで変化無し。
しばらくの間の後、マイは無表情でネコマタを睨みつけ、
「……変化は？」
「確率十分の一で出来たり出来なかったり」
軽いジョギングをした後の様な、爽やかな汗をかいた笑顔でした。
「よし、アタシが変化手伝ってやる。まずはその顔からだ」
「そのコブシは何！？　ちょっ、やめ、変化じゃない変化じゃない！！　どっちかって言うと原形崩す感じ！！　ゴメンってマジだから冗談抜きだから！！　動物保護団体に訴えるぞ！！　あっ？！　いや！！　ッガ…！　ゴェ、、、ブァッ…。んお？？　ギャァアアアアアイイィィ」
どこにでも無い様なやり取りが、この路地裏で起きていた。

「…まったく、マイちゃんのやつ……、危うく俺のイケメンフェイスが台なしになるところだったぜ……」
っと、夕暮れの路地裏で俺は独り言を漏らした。
せっかくシリアス続きだから笑わせようとしたのに、笑いどころかグロが入るとは…。予想外だったぜ。
「さて、魚の骨でもねぇかな～♪」
行きつけのゴミ捨て場に足を運ぶ。寿司屋の裏っかわの細い道にあるから頻繁に魚の生ゴミが出る。ふっふっふ…まさに魚天国だ。
「……ん？　…あぁ、ここかぁ」
しばらく歩いていたら、目の前にコンクリートの瓦礫の山が会った。近くにショベルカーやトラックが置きっぱなしになっている。
マイは炎岩とか言う奴と戦ったらしいが、ここで戦ったようだ。
「派手にやったなぁ」　っと、瓦礫の山の手前に何かがあった。身体が勝手に山へと向かう。
「さ…魚か！？」
それっぽく見えたがそんな訳無かった。小さなマグロのキーホルダーだった。確かどっかの寿司屋で貰える奴だったはず…。
「……気に入った！」
俺はそれを持って帰ることにした。だって猫なんだもん、キーホルダーでも魚が好きなのは仕方がない。
サッと口にくわえ、細道にあるポリバケツの所に直行。
「ルンルン～♪……ん？」
角を曲がると、ゴミ捨て場にすでに先客がいた。
猫ではない、犬でもない、鳥でも魚でもない。
目が血走った人間がそこにいた。

「……こわっ」
とりあえず、普通の猫のふりしてさっさと魚を取ろうっと。
ポリバケツの上に飛び乗り、隙間から頭を突っ込もうとして、ふと横の先客を見てみた。
男、四十後半、身長低め、ボサボサ白髪混じりの髪、無精髭、細い目が血走ってる、右胸ポケットの破れた白衣、何故か裸足、…と言ったところか？
こんな奴無視無視、と思ったが、何かこっちを見開いた目で見ていて気になった。
ん～～～、ん？何ガン飛ばしてんだ
なんて考えた瞬間、

男は手を突き出して飛び掛かって来た。

手だけならまだいい。問題なのは、爪が刃物の様に鋭く、俺に目掛けて振って来たことだった。
後ろに跳ねて避ける。目の前で爪がギュンッと空を裂き、ポリバケツが簡単にバラバラとなる。
男は息を荒げ、汗をかく。何か焦っているようにも見えた。
「なんだぁあ？　ケンカ売ってんのか？　…ふん、じゃあ買ってやるよ」
喋っちまったがもうどうでもいい。キーホルダーを毛の中にしまい、全身に力を入れる。本気でぶちのめすために。
「喜びな！　この大妖怪ネコマタ様の妖術は、そんじょそこらじゃ見れないんだぜぇえ！！」
「……」
無言の男が四つん這いでこっちに走って来たが関係ない、攻撃範

囲内だ。
唇をすぼめ、肺を限界まで膨らます。敵はすぐ近く。もう五メートルも無い。
ここで一気に、
敵に向けて火炎を吹く！
ゴウッ！！　と勢い良く燃え上がり、男は、あっという間に炎に包まれる。
「…楽勝楽勝」
口から煙りを出しながら、俺は余裕の笑顔を浮かべた。
ちなみに、この火炎は俺のもともとの力ではない。
かなり昔、当たり前に妖怪がいた時代。鬼火とか輪入道とか、火を使う妖怪ももちろんたくさんいた。
俺は化けたりちょっと腕力があるだけで火は使えない、でも使ってみたかった。だって、自分に無い力は誰だって欲しいだろ？
だから、見様見真似でやってみた。
するとどうだろう？すんなり使えた。使えないと思ってたのに、二三回試しただけで使えたのだ。
やってみれば以外と何でも出来る。ようはやる気だった。
それに比べて人間はすぐ無理だの、努力が必要だの、やりもしないでそんなことを言う。やってみれば案外簡単かもしれないのに…
とにかく、変な男は焼かれておしまい。最初に向こうから仕掛けて来たから文句は言うまい。
「……ふん」
食欲をなくしたから帰ろっかな。
「……？」
しかし、三歩ほど歩いて気づいた。

獣の様な息遣いが、揺らめく炎の中で聞こえることに。
「！？」
即座に振り返る。だが炎の中に男はいなかった。
その時、上から引っ掻く様な音がする。そのまま俺の後ろへと素早く音が動いていった。
もう一度振り返ると、今度こそ男はいた。
「……壁を使うのか」
「……」
壁に張り付き、爪を食い込ませて移動してきたのだ。
「この！？　きめぇんだよ！！」
今度は火球を作り、二発飛ばす。
だが男はそれにビビることなく、壁から壁へと跳び移ることで簡単に避けて見せた。
「……？」
なんだ？この違和感。なんか、俺の経験が何か言っている気がする…
男は俺の前に着地し、止まった。
「……それを……わたせ！」
「…喋れるのかよ」
それってなんだ？俺の宝毛？
「わ…わぁたせぇえええ！！」
痺れを切らして突っ込んで来やがった。…めんどくさくなってきた。
「…あ～ぁあ、めんどくさい。めんどくさいから…」
前足に力を込める。そして、
「ブッッつぶす！！」

おもいっきり腹を“ぶん殴った”。
「ゲォォッ、、、！！　なっ……なに！？」
まあ驚くのも無理ないか…。なんたって、“腕だけ人になる”とは思わなかっただろうからな。
……そこ、想像したらキモかったとか言わない。
「言ってたろ？　俺の妖術は、そんじょそこらじゃ見られないってな！」
俺の中で一番最高のキメ顔で言ってやった。
「……く、くそ」
男はさっさと逃げて行った。猫に負けるとは…情けない人間だな。ハッハッハ！！
「ハッハッハッハ……ハッ…あれ？」
今思えば、あれって犯人じゃね？
「…しまった、忘れてた。顔覚えてないぞ」
……ま、まああれだ、顔以外なら覚えているぞ？まず……白衣だろ？ヒゲが…あったっけ？髪型……身長……。
「ヤバい！！　ぜんぜん覚えてな……？」
まて…白衣？被害者は間蔵高校の卒業生でほぼ同年齢。犯人が高校の関係者の可能性大。この近くに病院とかないし、白衣を着るような職業って…。
「……もしかして」
俺は何か気づいたっぽい。

「犯人って、学校の先生？」

まったく、昨日はネコマタのせいで疲れた…、もう学校休みたいよ…。
なんて考えながらアタシは教室移動のために廊下を歩く。蜜子は先に行っちゃったから無言でいると、
「…あ、先生」
白髪混じりでボサボサの髪を掻きながら、背の低い男が歩いていた。
「ん？　あぁ、高上さん」
「キーホルダー見つかりましたか？」
右胸ポケットが破れた白衣を着て、無精髭を生やした生物学の先生は、
「…いいえ、完全に無くしてしまったみたいです」
「そうですか…。先生、何か顔色が悪いですよ？　大丈夫ですか？」
お腹にアザがある、鬼懺　槐〔キザン　エンジ〕先生は、
「えぇ、ちょと、お腹が空いてて」
申し訳なさそうに言った。

第三話：VSビースト？- 動物保護団体に訴えるぞ（後書き）

イ：ト：サ：「「「俺たちの出番は？」」」

ネ：「誰？」

マ：「あれじゃね？モ〇ハンの新しいモンスターじゃね？」

ネ：「じゃ、狩るか」

俺：「誰なのかは俺が書いた本編を見直そう！！」

ネ：「あ、逆鱗ゲット」

第四話：VSビースト？- 獣になるんですよ（前書き）

ネ：「サブタイトル大幅に変えました」

マ：「タップダンス覚えました」

蜜：「ササクレ出来ました！！」

鬼：「旅行先に下着を忘れました」

第四話：VSビースト？- 獣になるんですよ

五月七日金曜日、晴れ。
空は真っ赤に染まり、学校はもうすぐ最終下校時刻となろうとしている。
ゴールデンウイーク中だが、昨日と今日は連休の穴埋めの為に登校日だったので学校は開いていた。
「何ですか？　聞きたい事って。授業の事なら職員室で聞けばよかったのに…」
間蔵〔マクラ〕高校の一階階段の左隣り、理科準備室。狭苦しく、肌寒さと棚からのアルコールの匂いが印象的なここで、野太い男の声がした。
「いえ、勉強の事ではなくて…」
続いて、女の声。
「いくら僕のことが好きだからって、告白にこの場所はちょっとマズイですよね…。まあ僕は結婚してませんから告白されたら断る自信がな」
「全然違います！」
女の名前は高上　舞〔タカガミ　マイ〕。間蔵高校の女子生徒で黒髪ポニーテール、白いシャツに袖の無いセーターとスカートの制服姿。
男の名前は鬼懺　槐〔キザン　エンジ〕。生物学の教師で四十代後半。ボサ髪無精髭、白衣と黒いズボン姿。
棚に並べられたビーカーや薬品に囲まれながら、マイは鬼懺先生に質問する。その声は、どこか緊張しているような、切羽詰まったような声だった。
「単刀直入に聞きます。…先生は、失踪事件と関係あるんですか？」
ハァ…っと、鬼懺は呆れた様に溜め息をついた。
「……警察にも聴かれましたが、何も関係ありませんよ」

「じゃあ、先生にアリバイはありますか？」
「推理小説の見すぎですね…。僕は授業もあったし、学校に残ってテストの採点したりしてましたから、殺害する暇なんてありません」
「どうして殺害だと？」
眉をひそめる。
鬼懺は奥から椅子を出し、ゆっくりと座った。
「警察がそういってましたから…。血がべっとりと現場に残ってたとか…。それから考えて、恐らく殺害の可能が高いと……」
「でも、死体は見つかってません。いつ襲われたかも分からないはずです」
マイは一歩たりとも引かず、立ったまま反論した。
「…勝手にですけど、鬼懺先生の事調べました。…被害者の三人…、金澤〔カナザワ〕さん、重木〔カサネギ〕さん、鷹末〔タカマツ〕さん。先生はこの三人の担任だったんですよね？」
もちろん、これは全部ネコマタに調べてもらった。偉そうにしてるけど、マイは何もしてない…。
「そうですよ？　でも、卒業してから一度も会ってません。…もう何度も警察に聴かれましたから、いいでしょ？」
「…そうですね。じゃあ、もう回りくどい事は言いません。」
マイはスカートのポケットから何かを取り出し、手の平に乗せて前に突き出した。
「証拠を見つけました」
「？　……それは」
「先生のですよね？　これ」
それは、マグロの形のキーホルダーだった。この街の寿司屋の限定品で、そうそう手に入らない。
マイは、これが鬼懺先生の物だと知っていた。
「先生の携帯のキーホルダー…、事件現場の近くにありました。忙しい先生が、何でそんなところにキーホルダーを落としたんですか？」

鬼懺の表情が固まる。明らかにイライラしていた。
「……帰りはそっちが家の近道だったんです。学校が終わってすぐ帰宅しましたけど、うっかり路地裏に落としてしまったんでしょうね」
マイからは緊張感が消え、まるでじわじわとカエルを追い詰める蛇の様に鬼懺を睨む。
「変な音とか、しませんでしたか？」
「…いいえ、何も？」
「……先生、どうやって帰りましたか？」
「だから徒歩で……！」
鬼懺は息を呑んだ。
「…先生。その頃は“謎”の倒壊事故がありましたよね？」
マイと炎岩〔エンガン〕が戦って、駐車場は完全に崩れ落ちていた。そのため、現場保存や瓦礫の撤去をするために、その周りや裏道を封鎖していたのだ。
そこを通れるのは、野良猫ぐらいなものである。
鬼懺は険しい顔で黙り込んだ。しかし、すぐ笑顔に変わって、
「ハハハ…。まあ、急いでたから無理矢理に通って帰ったんです。事件とは関係ありませんよ」
それでもマイは鬼懺と向き合う。そして、トドメと言わんばかりに、
「ちなみに、アタシは“事件現場”に落ちていたと言いました。“事故現場”とは言ってません」
動かぬ証拠を突き付ける。
「…ぁ、……」
今度こそ、鬼懺は黙り込んだ。リクライニングの様に、滑らかに椅子にもたれ掛かり、顔を上げて天井を見つめる。
そんな鬼懺へと、マイは一歩近づく。
「なんなら、証人を連れて来ますか？　人間じゃないですけど」
「…やはり、あの喋る黒猫からキーホルダーを受け取りましたね？」

天井を見ながら鬼懺は言った。さっきまでの優しい声ではなかった。
「認めるんですか？　推理小説ならここで、大どんでん返しがあると思うんですけど」
「小説じゃないからいいですよ…。どうせ、警察にもすぐにばれる事ですから」
そう言って、鬼懺は立ち上がった。マイは身構えるが、襲う気は無いようだ。
「…高上さん、僕はね……獣になるんですよ」
突然、鬼懺はマイに向かってそんなことを言った。
「……」
マイはそれを黙って聞く。
「突然、僕は獣の本能に従うようになって、飢えを満すために人を襲うようになってしまいました。僕の意思とは無関係に、人を食べようとするんです」
「じゃあ、失踪者はみんな、失踪したんじゃなくて…」
「はい…。食べ切ったんです…」
失踪者は確かに殺されて消された。ただし、血も肉も骨もまるごと食べ切ることによって消したのだ。
「……なぜ、先生の元生徒を襲うんですか？」
「優先的に、記憶にある人間を全て食糧だと考えてしまうのです。…僕の一番記憶に残っている人は、やはり、元教え子達なんです…」
声のトーンを低くする。
「僕は……もう襲いたくない、僕はどうしたら……！！」
俯き、頭を掻きむしりながら、苦しそうな声で呟いた。
「……先生―」
マイは、
「僕は……どうすれば……！？」
「先生は―」
そんな鬼懺を、

「嘘が下手くそですね」

睨み続けながら言った。
「……」
鬼懺は手を下ろし、マイの鋭い目を見る。鬼懺の瞳孔は開ききり、まるで洞窟の様に暗かった。
「何故、嘘だと？」
低いトーンのままの声でマイに聞いた。
と、その時、

「そいつは俺が説明してやるぜ！」

マイの足元から声がした。
尻尾が二本の黒猫妖怪、ネコマタがそこにいた。
「あれ？ネコマタいつの間に…」
「侵入楽々だったぜ。途中女子高生に触られまくったけどな」
ニヤケながら、ネコマタはマイと鬼懺の間に入った。
鬼懺はマイから目線を外し、下のネコマタを見る。
「やはり、あの時の喋る猫ですか」
「ＹＥＳ、俺だぜ」
なぜか誇らしげ。
「…では、説明お願いします」
「あぁ、してやるよ」
尻尾を振りながらネコマタは喋り出す。
「まず、お前は獣の本能に従って食べたと言ったな？」

「はい、そうで…」
「異議ありっ！！」
人差し指（肉球）を鬼懺に突き出し、突然叫んだ。普通にビビる鬼懺とマイ。
「肉食獣は獲物を食べ切らない。本能に忠実なら、必要なだけ食べて残す。少なくとも、人をまるごと骨まで食べられる訳がない！」
…まあ言われてみれば、お腹の中に人がまるごと入る訳が無い。質量保存の法則を無視している。
いい気になったネコマタは指を下ろさず更に、
「もう一つ。俺の火球を恐れることなくお前は突っ込んで来たよな？」
「……それが？」
「火を恐れない獣は、俺の記憶の中ニャア無いんだよ」
と、指で指したまま言った。
それだけ聞いて、鬼懺は笑った。さっきまでの優しそうなものではなく、馬鹿にした様に口元を釣り上げた笑顔だった。
「ハハハハ、なるほどなるほど…確かに、僕は嘘をつきました。よく分かりましたね。百点あげましょう」
かなりあっさりと認め、パチパチと拍手をする。ネコマタは眉にシワを寄せた。
「…やっぱりお前は、食欲から人を襲ったんじゃなかったんだな？」
「はい、殺意があったから殺しました」
鬼懺は、昨日何をしていたか聴かれたように、やはりあっさりと答えた。
「…隠す気は無いのか？　推理小説なら黙り込む場面だと思うが…」
「ありません。せっかくだから喋ろうと思います」
「……展開的には助かるが―」
「何でですか？」
後ろにネコマタは振り返った。
黙っていたマイが喋っていた。

「何で“食べる”なんてことしたんですか？　そんな殺し方、大変なだけじゃないですか…」
疑問を投げかけるマイ。それを鬼懺は当たり前の如く、
「…証拠が残りにくいじゃないですか」
そう言い捨てた。
「……え？」
「体に付いた指紋とか取っ組み合いの跡とか、食べてしまえば無くなるでしょ？　後は現場を片付ければ分かりません」
鬼懺は証拠が見つかるのを恐れ、食べる事を“栄養補給”のためではなく、“証拠隠滅”のために使った。あまりに臆病で、あまりに人間離れした思考。
こんな思考を持つ時点で、鬼懺　槐はすでに人ではないのかもしれない。
「しかし、キーホルダーを落としたのは誤算でした。しかも、この猫に持って行かれるとは―」
「何も、思わないんですか？」
「はい？」
マイは鬼懺に詰め寄った。
「証拠隠滅のために人を食べて、何も感じないんですか？」
マイは信じられないような、信じたくないような顔で聞いた。
「……いや～～特にはないですねえ。そうゆう『能力』だったから使っただけですから」
「ッ！？　…やっぱり、『能力』を使ってたのか…！」
マイは忌ま忌ましそうに、鬼懺をよりいっそ強く睨む。
「いいのかよ？　いくらなんでもそこまでばらしちまって…。何企んでるだ？」
ネコマタが口を挟む。
鬼懺は証拠が見つかる事をあれ程恐れていたにも関わらず、あまりにも余裕だった。まるで、隠し通せる自信があるように…。
「ハハハハッ。それはですね…」

鬼懺は笑っている。
「君達をここで消すからですよ」
「……なぁるほどぉ。俺らを食べる気か？」
「はい」
一言だけ言って、鬼懺はゆっくりと近いて来た。
ネコマタは後ずさりしながら、
「おいおい、人間一人と猫一匹、食べ切れる訳無いだろ！？」
言いながら、マイの後ろに隠れた。
「何でアタシを盾にするッ！？」
「俺は平和主義者なんだよ！」
二人して盾にしようと揉めていた。…チームワークのカケラも無い。
「大丈夫ですよ。僕の能力は四人を殺害〔しょく〕しても問題ありませんでしたし」
その時、揉めてたマイの動きが止まった。
そして、頭の中で、今の言葉が繰り返される。
「…四人目って、……誰？」
「…つい最近、投石　炎岩〔トウセキ　エンガン〕君を殺害〔くいころ〕しました。その時にキーホルダーを落としたのでしょう」
たわいもなく言った。
ネコマタは炎岩と言う名前を頭の中から検索し、すぐに思い出した。
「あぁ！　マイと戦った奴か。じゃあ駐車場の近くにいた時に襲ったのか？」
「実際は事故が起きた直後ですけどね。本当に襲いやすかっ――――」
ネコマタを飛び越えて、マイはいつの間にか出した剣を振り下ろす。
「ッ！？」

鬼懺の反応が遅れ、両手で握られた目立つ装飾の無い剣が右肩へと迫る。
そして、剣は空振りした。
「…チッ！」
そのまま地面に突き刺さり、ガキンッ！！と、金属音が響く。力いっぱい振り下ろした剣はかなり深く刺さっていた。
その剣をマイは軽々と引き抜き、鬼懺へと顔を向き直す。
椅子や教材を蹴り飛ばし、鬼懺が四つん這いでこちらを睨んでいた。
「…何ですか？　苛立って。カルシウム足りてますか？」
「ブッチリきた…。完全にブッツリきた…。悪びれることなく、四人も食いやがって…」
静かに、剣の矛先を鬼懺に向けた。
そして、叫ぶ。
「力を奪うだけじゃ足りない…、反省させるだけじゃ足りない、泣き叫ばすだけじゃ足りないっ！！　アンタをギタギタにブッ殺す！！」
「…じゃあ、殺される前に殺害〔くいころ〕しましょう！！」
二人は、完全に相手を敵と認識した。
ネコマタは黙ってドアの前まで下がり、二人の邪魔にならないようにする。あくまでも戦わないようだ。
「……」
「……」
マイと鬼懺はなかなか動かない。いや、動けない。
独特の緊張感のおかげもあるが、それよりもまず、戦いの場所が悪かった。

理科準備室。教室の半分も無く、教材の入った棚や書類がごちゃごちゃある為かなり動きにくい。
二人の距離はたったの五メートル程だが、マイの剣は壁や棚に当たりやすく、鬼懺のスピードもこれだけ狭ければ本領発揮出来ない。
誘い込んだのはマイだが、完全に裏目に出てしまったのだ。
どちらかが更に接近すればかろうじて攻撃出来るのだろうが…。
「……どうしました？　来ないんですか？」
先に沈黙を破ったのは、鬼懺だった。
「なら、こちらから行きますよ？　いいですか？」
はったり。
下手に近くと自分が危ない。鬼懺はマイから来させようと挑発した。
そしてマイは、
「…くそっ。」
鬼懺の思惑どおり、挑発に乗てしまった。
後は接近した瞬間に自慢の脚力で飛び掛かるだけ。実に簡単に決着が着く。
しかしマイは、相手に突撃するのではなく、
ギュンッ！！
と、“剣先だけ”前に伸ばした。
「は？」
鬼懺に向けた剣が素早く一直線に伸びる。
鬼懺は反射的に右へと避け、剣が左頬を掠め、転がり、そして棚にぶつかった。
「チッ、やっぱり食べるだけの能力じゃないか…」
壁に刺さった剣を瞬時に元の長さに戻し、ボソッと呟いた。
「ち、ちょっ…えっ！？　何ですかそれ！？」
「『メタモルフォーゼ』だよ？」
「名前だけ言われても分かりません！」
『メタモルフォーゼ』は天界の使者にもらった特殊な剣である。

特徴はずばり、質量無視、変幻自在。まあ、イメージ出来る範囲での話しなので限界はあるが…。
「それより…、アンタの『能力』って結局なに？　人の動きに見えないんだけど…」
鬼懺は四つん這いから立ち上がり、濁った目でマイを見る。
「…いえ、僕は体を動かすのは苦手なので、自然とバランスを崩してこうなるんです」
「……じゃあその動きは…」
四つん這いで構え、飛び掛かる様に移動し、鋭い爪で切り裂く。
これが獣以外の何だと言うのか…。
「…これは『過食循環〔イーター〕』と言って、食した物を百パーセント消化し、身体に余すことなく循環出来る僕の力によるものです」
「……？」
マイはよく分からなかったがようするに、食べた物を血肉やエネルギーに変える消化器官が強化されているという事だ。
唾液、胃酸、胆汁。これらが食べ物を身体に吸収されやすいように分解し、十二指腸で吸収する。しかし、物にもよるがすべて消化することは出来ない。出来なかった物は便と共に排出されるのが普通。
しかし、鬼懺は食べ物をすべて消化しきり、排出することなくすべて即座に身体に取り込むことが出来る。
取り込んだ百パーセントのエネルギーを、百パーセント活用出来るのだ。
もちろん食べた分だけ巨大化する訳じゃない。その分身体の密度が大きくなる。つまり、

血はより濃く、

骨はより硬く、

肉はより太く、
皮はより厚く、
身体は強化される。

「僕はすでに四人殺害〔くいころ〕しました。つまり、僕の身体は四人分の力を持っているということですよ」
「……その力で、四人を襲ったの？」
鬼懺は悪びれることなく、
「はい。おかげさまでここまで強くなりました」
醜い笑顔で言った。
マイはそんな笑顔に苛立ち、唇を噛み締める。
そして、攻撃する前に、一番聞きたかったことを聞く。
「……動機は？」
「…はい？」
「動機は何って言ってんの！」
鬼懺は殺意があって四人を殺したと言ったが、なぜ殺意を持ったかを聞いてなかった。よほどの事があったのか。
鬼懺は少し、嫌な遠い過去を思い出して悲しむ顔を作った。
「……それは……彼らが……」
「……」
鬼懺の言葉を待つ。そして、

「…僕を、……馬鹿にしたからだあぁ！！」

「……は？」

言葉をすぐに理解出来なかった。
「あいつらは…、いつも…、いつも、いつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつも、いつも！！　僕の事を気持ち悪いだの！
ダルいだの！　結婚してないだの！！　毎日馬鹿にして来たんですよぉ！！　……ホントにもう嫌ぁぁ…」
鬼懺はその場でしゃがみ込む。…なんか、最後はただの弱音になってた。
「…そんだけ？」
怒り半分、呆れ半分でマイは言った。
そんなマイの言葉に鬼懺は、ピクッと反応する。
「……そんだけ？…だって？」
幽霊の様にふらふらと起き上がって来た。…かなり怖い。
「…朝早くから学校来て？　…職員会議で叱られ？　…プリントを一生懸命作って？　…生徒にわざわざ解りやすく解説し？　…授業スピードが遅いとまた叱られ？　……にもかかわらず！？　人生の先人である僕が歳下のクソガキに馬鹿にされて！！？　そんだけってなんやねんッッ！！！！！」
なぜか関西弁。
「アンタ学校の先生でしょ！？　何で真に受けるの！？」
確かに。どんな教員でも、生徒から一人ぐらいは嫌われる、馬鹿にされる。それを覚悟でこの仕事をしているはずだ。
それでも鬼懺は止まらない。
「四人だけじゃないんです！　クラス全員に、三年間ずっとですよ？　耐えられる訳無いでしょ！？」
「だからそれぐらい耐えろっつってんの！！　そんな理由で四人も殺して、許されると思ってんの！？」
「いいえ、思ってません！　クラス全員殺害〔くいころ〕した後は自首でもなんでもしましょう！　なんなら首を吊るでもリストカットでも自爆でもしましょう…。しかし、全員殺ってからです！」
苛立ち過ぎて頭が痛くなってきた…。頭を押さえてよろめくマイ。

「…それに、せっかく手に入れたこの力を、使わなくてどうします？　この力、有効活用せねば！」
両手を広げて、見せびらかす様に鬼懺は言った。
「…こんな能力のせいで、…先生は」
鬼懺に力さえ無ければ、食べる能力さえ無ければ、こんな事は起きなかったはず…。
だが、マイは少し考える。
結局の所この事件は、鬼懺が生徒に馬鹿にされた事の腹いせに起こした逆恨みだった。
殺意が湧いて、計画を立て、実行し、罪を犯す。
つまり…、それは…。
「とにかく、今はまだ捕まりたくないのです。だから、証拠〔マイさん〕を消〔ころ〕さねばなりません」
途中で喋られて思考が停止してしまった。
「……じゃあ、戦うにはこの部屋は狭過ぎるね」
そう言って、マイは後ろのドアに手をかける。
「！？　逃げる気ですか？」
そして、勢いよくドアを開けてダッシュで飛び出す。
「お、おい！　マイちゃん？」
後を追う様にネコマタも飛び出した。
続いて鬼懺も飛び出す。
「何処へ行こうと…！？」
廊下にマイとネコマタの姿はなかった。
その代わり、カツカツカツっと、革靴で階段を駆け上がる音が聞こえる。
「…馬鹿ですか？　なぜ上に…？」
職員室は一階にあり、ゴールデンウイーク中に学校に来ている教員はほとんどない。生徒もとっくに帰っている。助けを呼ぶ訳では無いのだろうか？
「……なるほど。…戦うためですか」

獲物を追い詰める様に、鬼懺はゆっくり階段を上り始める。
「…時間がありません。見つけ次第、殺害〔くいころ〕します！」
その目は、淀んだ沼の様に、錆び付いたナイフの様に、肉を求める獣の様に、何処までも何処までも冷たかった。

―――――――――――――――――――――

マイは階段を上がっていた。目指すは屋上。
「広い所、隠れられない所、平坦な所。確かに、屋上はいいかもな…、戦うのに」
後ろからマイを追いかけながら、ネコマタが話し掛ける。
「…アタシは、…バイト料もらえればそれでいい。…アウェイ&ヒットでもなんでも、…戦って勝てればそれでいいの」
「……さいですか」

三階通過。

「……ただの犯罪」
「え？」
ネコマタが呟いた。
「殺意が湧いて、計画を立てて、実行し、罪を犯す。ありふれた、どこにでもある事だ。『能力』は関係ない…。なくても、アイツは別の方法で人を殺してた」
「…殺人がありふれてる訳無いでしょ？　…あとそれは、今の鬼懺

先生を見逃せって事にならないよ？」

四階通過。

「そうゆう事じゃねぇ。…ただ、…なんか、…人間ってめんどくせぇって思ってよぉ…」

「……アタシも、そう思う。欲に忠実ってのも考えものだね…。でも、それでも止めなきゃ…。…あ、言っとくけど、アタシのためだけどね…」

「…止める必要はねぇ」

「…はぁあ？」

屋上の扉の前。

「だってよぉ…アイツ…」

そして、マイとネコマタは立ち止まった。

「ほっとけば勝手に死ぬぞ？」

第四話：VSビースト？- 獣になるんですよ（後書き）

ネ：「見たか聞いたか驚いたかぁあ？俺の名推理！！」

マ：「金〇一少年の事件簿には敵わないね」

鬼：「あそこで証拠を残さなければ…」

マ：「基本先生ってドジですよね」

鬼：「！？」

第五話：VSビースト？- 強くなるきっかけがある（前書き）

ネ：「あ～～、狂ったように金を使いたい」

鬼：「じゃあ二億円をあげましょう」

マ：「すっげぇ！！」

ネ：「……マイちゃん。全部捨てちまおう…」

マ：「は！？なんで！？」

ネ：「…ゴート札だよ」

マ：「何！？あの幻の偽札の！？」

鬼：「ルパ〇三世にこんなのありましたね」

マ：「しっ！ばれちゃうだろ！」

第五話：VSビースト？- 強くなるきっかけがある

「先生、うぜぇんだよ！」

カナザワくん…何ですか？先生にむかって……

「先生、だりぃッス」

カサネギくん…そんなに先生の授業がめんどくさいですか…？

「先生、マジでキモいよ」

タカマツさん…そんなに先生の顔は汚いですか…？

「先生、彼女が欲しいです」

トウセキくん…先生も欲しいです…

まったく……皆して僕を馬鹿にして……

それだから……

僕は……

―――――――――――――

間蔵〔マクラ〕高校の屋上はよく警備員が鍵をかけ忘れる為、ほぼいつでも入ることが出来る。
校舎自体がかなり大きいので、屋上もそれなりに広かった。
そして、生物教師、鬼懺　槐〔キザン　エンジ〕は屋上の扉を開ける。
風は無く、空は真っ赤…とゆうより、日が沈みかけて赤紫色になりかけていた。すでに運動部は帰宅していて、時が止まったように静かだ。
この空の赤さが、この空気の静けさが、この空間の不気味さをよりいっそう引き立たせる。
「…一応聞きます。僕と戦うために、ここへ逃げたのですか？」
鬼懺は、屋上の真ん中に立っている一人の女子高生に話し掛ける。
離れていても声は届いた。
女子高生は制服を着ていて、右手首に一つの金色の腕輪。そして右手に、目立つ装飾の無い剣を持っていた。
「…はい」
高上　舞〔タカガミ　マイ〕は短く、しっかりと返事をした。
「…アタシからも、聞きたい事があります」
今度はマイから質問した。
「…何ですか？」
マイは鬼懺を睨む。対して、マイの目は少し悲しそうに見えた。
「先生の能力は、食べた物を排出せず、一生エネルギーとすることで身体を強化するんですよね？」
「…はい」
「…それって、毒素も取り込んだままになるんじゃないですか？」
「……」
アンモニア、

合成着色料、
発癌性物質、
人間の体に取り込まれる物質。微量なら問題無いものでも、体外に出されないなら話しは別。まさに塵も積もれば山となるである。
そして、四人分の毒素を全て取り込んだ鬼懺が平気な訳が無い。身体はもう毒素でボロボロのはずだ。
「先生の能力は消化して取り込むと言うより、無理矢理体に取り込むんですね…」
「…あの黒猫が言いましたね？」
「もう止めてください。そこまでしてウサ晴らししたいんですか？」
ウサ晴らしのために命を賭ける…確かにバカらしい。そんな事に何の意味もない。
「……そうです」
間を置いて、鬼懺はボソボソと呟く。
「……僕は、…教師に憧れてて、…やっとなれたのに、…なれたのに」
俯き、コブシを握りしめる。わずかに体が震えていた。
「…思っていたのと違った。考えてたのと違った。……馬鹿にされて、…叱られて、…先生らしくなかった。…苦しいだけだった。悲しいだけだった」
聞き取りずらいが、憎しみや苦しみが、声からヒシヒシと伝わってくる。
「…新しく、…やり直さねば。…苦しかった記憶を、…全部、…全部、全部全部全部ぜんぶゼンブ、…消(ころ)さなきゃ！！」
鬼懺は足のバネを最大限に活用するように身体を屈めた。
マイも剣を構え、体に力を入れる。
「だったら、先生の苦しみを全部消してやる！」
瞬間、鬼懺はマイにむかって飛び出した。

たったの一歩で三メートル軽々と進む。これも、食べた四人分の筋力がなせる技。
ギュン！、と。風を切り加速する鬼懺に対し、マイは…
「…行け！　ネコマタ！！」
「よっしゃぁあああアアア！！」
鬼懺の後ろに回り込んだネコマタへ合図を送る。
「なにっ！？」
完全にネコマタの存在を忘れていた。後ろから悪役顔の黒猫が鬼懺に飛び掛かる。
「フハハハハァ！　勝てればいいのだ勝てればぁ！」
ネコマタが鬼懺のズボンの裾に噛み付く。そして鬼懺は…
「……」
無視して走り続けた。
「いぎぃぃぃいイイイぃぃィイイイぃぃッッ！！！」
必然的に、ネコマタは引きずられ、叩き付けられる。
「ネ、ネコマタァアアアアアア！！（笑）」
シリアスな空気を壊さぬよう笑いをこらえるマイ。…とゆうか、マイはこうなる事知ってました。
足にぶつかって鼻血が出まくる。鬼懺の走った跡に、細いレッドカーペットが出来上がっていった。
「消(ころ)す」
ネコマタに気を取られ、マイは鬼懺との距離が二メートル程までに縮められていた事に気付かなかった。
「！？　くそっ…！」
ビュンッ！、と。真横に剣を振り、鬼懺に切り掛かる。
鬼懺はその斬撃を、
「ふん…」
マイを飛び越えることで避けた。
「なに！？」
その代わりにネコマタを斬った。

「なに！？　じゃねええぇ！！」
お腹真っ二つ。かろうじて背骨で繋がってられる程度に斬られ、そして力無く地面に落ちる。
「…ガッ、、ゲオ、。…お、俺が妖怪じゃなかったら、死んでた…」
「…妖怪でも死んでるよね？」
「斬ったお前が言うこと！？」
そんなやり取りを一気に遠くまで離れた鬼懺は、呆れ返りながら四つん這いで見ていた。
「…やる気、ありますか？」
這って逃げるネコマタをほっといて、マイは声の方に振り向く。
「……もちろん」
そして、右手の剣、『メタモルフォーゼ』を鬼懺に向けて、
「あるに決まってる！」
剣身を一気に伸ばす。
「ふん…」
もう一度鬼懺は膝を曲げ、こっちにむかって飛び出した。焦らずに右側へ、紙一重で剣を避けて突っ込んで来る。わずかに左頬を切り、血が流れた。
「くそっ！」
アッサリと避けられ、焦るマイ。だが、それだけでは終わらない。
「だったら、これなら！」
両手で剣を握りしめ、身体を左に捻って思いっ切り振り抜いた。ビュンッ！！と。ムチのように風を切り、左脇腹を狙う。
「芸のない人ですね」
しかし、それでもダメだった。
鬼懺は更に身を低くし、体を地面スレスレまで近づけ、人間には不可能な走りを見せる。斬撃は頭上を通り、そして、鬼懺は止まることなく一直線に突っ込む。
「しまっ…！？」
勢い余ってマイは体勢を戻せない。

「もらいましたっ！」
突き出した右手を開き、鋭い爪をマイの腹に向ける。距離は残り三メートル弱、完全に捉らえた。後は懐に入り、爪を立て、腹を引き裂いて、内臓を引きずり出すだけ。
―喋る黒猫は後にして、とにかく高上さんの死体を食べれば…。喰えなくはないが、邪魔な服と、腕輪と、剣を処理して……
ふと、鬼懺の頭に一瞬疑問がよぎる。それはとても単純なことだった…、
……剣はどこから？
仕舞っておく所も、隠しておく所も無かったはず。何も無い空間から出した…なんて事があるのか？何か違和感があった。
―…変化があったはず。…なにか…なにか…。
―…そういえば、あの腕輪は何？

「『アルティメイタ』アアァ！！！」

鬼懺が懐に入る直前に、マイは剣を左手に持ち替え、大きく叫んだ。
瞬間、右手は一瞬光に包まれる。『メタモルフォーゼ』よりも大きく、鋭く走る光だ。

そして、右手には一本の『刀』が握られていた。

「に…、二本！？」
鬼懺は身を引こうとしたが、すでに相手の間合いに入っていた。間に合わない。
「ふっ！」
マイは容赦なく刀を振り下ろす。音速に近いそれは、もはや目で追えない。
「グオッ！」

「！？」
それでも鬼懺は見えない斬撃を防げた。反射的に突き出した右手の爪に当たり、斬撃がわずかに逸れたのだ。
僅かな隙をついて、後ろへとまたマイと距離を置き、荒い呼吸を繰り返す。
「……腕輪が、…武器になるんですね」
「…これも貰い物だけどね」
メタモルフォーゼが右手首に巻き付くように腕輪に戻り、その右手に持つ刀を肩に担ぐ。
『アルティメイタ』と呼ばれた刀は、巨大な太刀という程大きくはないが、それでもやはり少し大きめな刀だった。片腕で扱えるのは、マイ自身が強化されているからだろう。チェーンが柄の部分にストラップのように付いている以外、やはり目立つ装飾は無く、価値はなさそうだ。
「…なるほど、驚きました」
「まあ無理も無いよ…。いきなり刀が出て」
「そのネーミングセンス」
「アタシが付けたんじゃないっ！！」
天界人のセンスです。
鬼懺は四つん這いになって息を整える。
「…その刀、また違う機能があるんですか？」
「……見る？」
刀を水平にし、鬼懺に向ける。対して鬼懺は口元を吊り上げ、余裕の笑顔を浮かべていた。
「また伸びるんですか？」
そして、真っ直ぐ四つん這いで走り始めた。段々と加速し、マイの下へとむかう。
「…アルティメイタ、射撃準備」
《サーイエッサー！》
しかし、刀は伸びることはなかった。そのかわり、縦にパキッと

分かれ、バチバチと火花が散り始める。
「は？」
マイが何をしているか、走り続けている鬼懺からはよく分からない。
《何時デモ撃テマスヨ！》
「よし、発射」
次の瞬間、刀から光の弾が一直線に撃ち出された。
「はぁあ！？」
光の弾は鬼懺の左肩すれすれを通り、屋上の端まで飛んで行く。そして、落下防止用の鉄柵に当たり、バガンッ！！、と。小さな爆発が起きた。夕暮れの空が一瞬明るくなった。
「……ぅ…グオオッ！！」
鬼懺はかまわず走り続ける。そう何度も驚いていたら攻撃のチャンスを掴み損ねるからだ。
「やっぱ止まらないか…」
《デシタラ、接近戦用ニ切リ替エマスカ？》
「じゃあそれで」
《了解！射撃モードカラ斬撃モードニ切リ替エマス！》
刀の先端が元に戻り、構えなおす。
「……ん？」
だがその時、鬼懺はすでに目の前まで来ていた。
「え、速っ！！」
両手を開き、爪で切り裂こうと飛び掛かって来た。殴るように、振り払うように襲い掛かる爪を、マイは刀で応戦する。だが、
「なんで！？　なんで斬れないの！？」
刃は間違いなく当たっているのに鬼懺の手を斬る事が出来ない。硬いゴムのような感触が伝わるだけだった。
鬼懺の勢いにマイは後へと押される。押され続ける。
「消さなきゃ、けサ、…コ、、殺…、殺さナキゃ！」
鬼懺は死に物狂いでマイに切り掛かる。

《爪ダケデナク、皮膚ノ強度モ上ガッテマスネ》
「あ、そっか！」
鬼懺は食べた物を百パーセント、瞬時に全て身体に取り込む能力者だ。そして、彼は人間を四人食い殺し、合計五人分の密度の身体を得た。
身体の筋力も、爪の強度も、皮膚の厚さも、全部五人分。マイの防ぐための斬撃では、鬼懺の皮膚を斬り裂く事は出来なかったのだ。
キンッ！ガッ！ガキンッ！
防いでも防いでも、鬼懺は止まることなく腕を振り続ける。マイが爪で切り裂かれるのは時間の問題だ。
「…こ、このっ！！」
がむしゃらに鬼懺の腕を刀で打ち上げ、がら空きになった胸に右足で蹴りを入れた。ドゴッ！、と。肋骨から鈍い音が鳴る。
が、鬼懺は動かず、反動で逆にマイが後ろに飛ばさてしまった。
「あれ？」
考えてみれば、鬼懺の体重は人間五人分だった。マイはバランスを崩し、背中から地面に倒れる。
「ぐっ…やばっ！」
起き上がろうとしたがその前に、鬼懺は仰向けのマイのお腹に乗り、馬乗りの状態になった。
「げほぉっ！　…おもっ！！」
「捕まエマシタ」
人間五人分プラス、今までに食べた物の重量が一気にのしかかる。
「カッ！、、…げぅ、…、。い…きが…」
腹を圧迫され、肺が空気を求めて大きく動く。
マイは鬼懺を跳ね退けようと暴れるが、両腕を強く掴まれ身動きがとれない。
「証拠…隠滅…証拠…隠滅…」
目が虚ろな鬼懺はその口を大きく開け、マイの喉元へ更に近づく。
その時、鋭く尖った犬歯から唾液が一滴、顔のすぐ横のコンクリに

落ちた。
ジュウッ…、と。鉄板に水滴を垂らしたように煙りが立つ。
「…ぅ！？」
鬼懺の唾液は能力によって、濃硫酸の如く強力な物となっていた。その気になれば岩でも鉄でも食うことが出来るのだろう。これに触れただけでも、ただでは済まない。
「消し(くイコろ)テヤル！！」
そして…、
「ア…アル…ティ…メイタァ！！」
噛まれる前に、右手の刀から光弾を放つ。光弾は鬼懺の左肩に直撃し、爆発を生んだ。
「ガゥッ！！」
吹き飛ばされ、地を転がる鬼懺だったが、肩に直撃した割には火傷ですんでいた。鬼懺の防御力のおかげではなく、爆発の巻き添えをくらうのを防ぐため、マイは光弾の出力を下げたのだ。
「げはぁ！！　…ごへぇ！　…ごほっ！　…はっ！　……助かったぁ」
重さから解放され、激しく咳込む。
《光弾ヲ二発使用シタタメ、活動時間ガカナリ減リマシタ！》
「ぎ、ぎりぎり行けるかな…。アルティメイタ、もうちょい頑張って！」
《イエッサー！》
起き上がったマイは、追撃するために鬼懺へ走り寄った。
「ガァァ！　…グギィッ…ギ…ヴゥ…ヴゥ」
吹き飛ばされた鬼懺は左肩を押さえて痛みをこらえ、身をよじり歯を食いしばっている。歯の隙間から漏れる荒い呼吸は、まさに獣そのもの。
その有様に、マイは自然と目を背けたくなったが、それでも走り続ける。
立ち上がった鬼懺は左腕をぶらんっと垂らし、右腕だけを前に突

き出した。戦う意思は、まだ残っているようだ。
「グゥルウアゥ！！」
「うぉおりゃっ！！」
そして、二人は正面衝突するようにぶつかり合う。今度はマイが激しく鬼懺を音速に近いそれで切り付け、後ろに押し込む。完全に攻守が逆転した。
キンッ！ガギッ！ダシュッ！
鬼懺を殺す訳にはいかないが、手を抜けばこちらが危ない。全力で刀を叩き込む。そのたび、鬼懺の爪と手は傷つき、段々と血がにじんできた。
「ガァッ！　…ガァ！　…グゥヴ、ヴォッ！！」
鬼懺は鬼の形相で唾液を飛ばし、人のものとは思えない、地の底から湧き出ているような声を発している。もう手はボロボロだった。
「もう……止まれっ！！」
バギンッ！！、と。ろくに斬撃を防げない鬼懺の腹に、光弾を撃ち込んだ。
「ッ！？」
それでも鬼懺はそれを反射的に右手で受け止める。もちろん、そんなことでは防ぎきれない。鬼懺は遥か後ろに吹き飛び、冷たい鉄柵に激突した。
「…アルティメイタ、……威力…強すぎ…」
《ス、スミマセン…》
ハァ、と。マイはため息をつく。
この『アルティメイタ』という刀は天界人から腕輪の形で支給された武器で、変幻自在の剣『メタモルフォーゼ』とともに渡された物なのだが、実を言うと、この刀の機能は未知数であり、支給した天界人ですら全て把握していないのだ。自我を持ち、射撃モードなる物がある等、まだ他にも機能が備わっているらしいのだが……。
ちなみにこの刀、エネルギーの消耗が激しく、マイは奥の手として使用している。

「…クソッ…くそぉ！」
鬼懺はその鋭い牙をむき出しにし、マイを睨みつける。
「僕は……やり直さなきゃならないのに！　…どうして邪魔を！？」
その顔は真剣そのもの。恐がりながらも覚悟を決めた、そんな顔だった。
マイはその顔から目を背けることなく、しっかりとその覚悟を受け止めた。
「…嫌な過去は、誰だって消したい、やり直したいって思いますよ。アタシだって…」
しっかりと目の前の男を見て、マイは言った。
「…だったら」
「でも、過去は消せません。何したって…消える事はありません」
マイははっきりと断言した。鬼懺はそんなマイに、言い返すことが出来なかった。
「だからもう止めて下さい！！」
「……僕は、……」
そして、屋上に静けさが広が
「ちょい待てや」
る前に、声がした。
「え？」
マイは声の方向、真後ろを見た。
お腹真っ二つだったはずのネコマタが元通りになってそこにいた。
「ネコマタ？　…ちょっと今真剣に」
「いいからッ！！」
ネコマタはマイにむかって怒鳴る。
「…ッ！？」
マイはつい迫力に押され、黙ってしまった。
「……キザン先生よぉ、…アンタ、本当は自分を止めたかったんだろ？」
「な！？」

「……？」
鬼懺は驚き、マイは？マークを浮かべる。
「自分を止めたかった、だけど止められないから、自分を止められるマイちゃんに助けを求めたんだろ？」
ネコマタは二本の尻尾を振りながらたんたんと言葉を紡ぐ。
でも、それならなんで襲い掛かって来た？全く逆の行動だと思うが…。
「ぼ、僕は、…高上さんを襲って」
「ん？　あぁ、アンタが殺人犯すのはストレスが原因だからなぁ、ちょっとイラつくだけで爆発しちまう」
「ッ……」
マイの質問ぜめに鬼懺は苛立っていた。
鬼懺の殺人衝動は生徒に馬鹿にされた事、その消えない記憶からの苛立ち、ストレス。そして、苛立ちが限界を超え、発散するために、カッとなって殺してしまう。
ストレス＝殺人衝動。
「…まあどっちにしろ、マイちゃんと戦って助けてもらいたかったから結果オーライだ」
「…ん、ネコマタ？　意味わかんない」
マイは理解不能だった。
「ちょっと待てよ。つまりだなぁ……」
ネコマタは間を空けて、

「鬼懺は、投石　炎岩〔トウセキ　エンガン〕とマイちゃんの戦いを見ていた」

「…え？」
投石　炎岩。コンクリートを杭の形に変え、飛ばす能力者。約一週間前、マイが倒したヤンキー。
「能力者をぶちのめせる力を持ってるマイちゃんに自分を止めても

らいたかった。そしたらマイちゃんの方からお前に近づいて来た。
…だろ？」
「……」
鬼懺は黙り込み、
「……？」
マイはまだ理解出来てない。
「まぁ、単につじつま合わせの推理なんだが、違和感は最初からあった。初めて俺がコイツと会ったとき、こんな口調じゃなかった」
あの時、『それを渡せ』、と。鬼懺は荒々しくネコマタに言い放っていた。普段の鬼懺の“ですます口調”ではない。
「焦ってたら口調なんて乱れるよなぁ。でも、マイちゃんの剣を見た時のリアクション、口調がそのまんまで怪しかった」
形が変わる剣、それを見て冷静でいられる訳がない。鬼懺はマイの力を知っていたから焦らず、マイに挑めたのだ。
「……僕は」
鬼懺は弱々しく、言葉を発した。
「…もう、…耐えられませんでしタ。…この力を使ッて、…あいつらを殺すたびに、…気が楽にナって、…止まりませんでシた」
自分の意思に反して行動すると言うのは、あながち嘘ではなかったのかもしれない。
「…僕自身を止めるにハ、強い力で押さえ付ける必要があるんデす」
獣を鉄の檻に閉じ込めるように、押さえ付ける必要があった。
「高上さンナら、…出来まスヨネ？」
鬼懺の顔色は悪く、毒素による身体の限界が近づいていた。そんな鬼懺の救いを求める眼差しに、マイは戸惑う。自分に、何が出来るのだろうか…。
「え……えと、えと…」
「いつも通りでいいんだぜ、マイちゃん」
ネコマタは、そんなマイに言った。迷う事はないと、その背中を押した。

「え？」
「いつも通りに、『神様代行』すりゃいいんだよ」
そう言っている間にも、また鬼懺は正気を失いかけていた。ここでマイが鬼懺を止めなければ、また被害者が出る。だが、
「……そっか」
それとこれとは話しは別だ。マイはいつも通り、自分の為に刀を振るえばいい。
落ち着きを取り戻したマイは、そんなネコマタの言葉に素直に感謝した。ネコマタは、頼りになるときは頼りになる奴だと知っていたが、ここまで頼りになるとは…。
「……わかった、ありがと」
「ふふん、魚五匹でいいぜ」
「…オッケー！」
刀を両手で握り、前に突き出し構える。
構えたマイを見て、鬼懺は鉄柵からフラフラと起き上がり、
「グルァアッ！！」
予備動作無しで飛び出した。
「！？」
一直線に向かうのではなく、マイの周りを飛び交うように、より速く動き回る。そして、異変が起きた。
「……増え…てる？」
二人、四人、八人、十六人。
マイの周りを鬼懺“達”が取り囲む。あまりの速さに、漫画でしか見たことがないような残像による分身が出来ていたのだ。
鬼懺の脚力が為せる技、『狩猟包囲網〔ハンティングネットワーク〕』。
抜け出すことは不可能。このままだと、四方八方から爪で切り裂かれるしかない。
「……抜け出す必要はない」
だが、マイは冷静だった。負ける訳にはいかない。今、先生を止

められるのは、自分だけだから！

「アルティメイタ…『一段解放』！！」

マイはアルティメイタを頭上より高く、日が暮れた空に振り翳す。その様は、さながら聖剣を掲げているような神々しさがあった。

「ガアアァッ！！」

残像を残し動き回る鬼懺は、雄叫びとともにマイの後ろから飛び掛かった。両手と口を開き、鋭い爪と牙を向ける。

「ガアアァッ、…ッグァッ！？」

が、突然、鬼懺の足首に痛みが走った。

「ぐぬぬぬっ！」

鬼懺の足にネコマタが噛み付いていた。

「グッ、ゥヴアゥ！」

足を振り回し、ネコマタを無理矢理引き離す。その際、ネコマタの歯が引っ掛かり、カッターで切られたように傷が拡がった。

「ギャア！！」

ネコマタは悲鳴を上げて地を転がって行った。

鬼懺の足に深く歯が食い込んでいたので、かなり出血していた。だが、鬼懺はそれを気にせず、マイに飛び掛か

《何時デモ行ケマスヨ、マイサン！！》　るまえに、

「アルティメイタ……」

マイは右手を上げ、人差し指を暗い空に向けている。その手に刀は持ってなかった。

鬼懺が顔を上げると、星のように光る何かを見つけた。

それは、今まさに振り下ろさんとする握りこぶし…

神の鉄槌…

神罰…

鋭き刃…

アルティメイタは暗い夜空に浮いていた。

「GO」

合図と共に発射された刀は雲を吹き飛ばし、真下にいる鬼餓へと真っ直ぐに飛来する。

「……アリガとうゴざいます…高上さん」

そして、轟音と共に屋上は吹き飛んだ。

――――――

とある日、とある路地裏。

「先生捕まったよ。退院した後に自首したんだってさ」

「…あれでよく死ななかったな。クレーター出来てたぞ？」

「ぎりぎり外したから平気だよ」

「てか、んなこたぁどうでもいい。魚だよ魚！　あんだけボコボコにされたんだから十四は食わんと気が済まないぞっ！」

「はい、アジ」

「ニャイ〜ン」

「はあ、……ねえ、先生って」

「どっちにしろムシャリ別の方法で殺してたぞムシャムシャ」
「……やっぱり？」
「うん。ムシャリ気にム病むシャこリとないムシぞャリ」
「はよ食え」
「ムシャリ…よく噛まないといけないんだぞ？　ムシャ…ぐ、ガハァ！　骨が、刺さった！！」
「……鬼懺先生は、そんなに辛かったのかな？」
「ゴクンッ…まあ、馬鹿にされたら誰だって落ち込むもんだろ」
「そんな安っぽいもんじゃないでしょ…」
「そんなもんだぜ？　鬼懺は心が弱すぎたんだ。強くなきゃ、人生ずっと負け猫だぜ」
「負け犬ね。…どうしたら心って強くなるの？」
「人によってなりかたが違う。そして強くなるきっかけがある。きっかけは人によって内容も来るタイミングも違う。勝ち組はそれが分かるやつ。負け組はそれが分からないやつだ」
「それって本当？」
「モチのロン。鬼懺は変わるきっかけを逃した。だから何時までも負け組人生を引きずる事になっちまったのさ」
「…アタシは、『神様代行』になって、何か変わったかな？」
「力が強くなって鬼懺を倒せた」
「でもアタシが何かしなくても、先生は毒素で死んで止まってたよ？　アタシは、何も変わってない…何も変えてない…」
「バイト料が貰えればいいんじゃなかったっけ？」
「……」
「…じゃあ、この先にきっかけがあるんじゃね？」
「…だといいけど」
「ま、焦るなよマイちゃん。何たって…」
「…？」

「やり直しは出来ねぇが、この先はまだまだずっとあるわけだし？」

とある日、とある路地裏での会話。

第五話：VSビースト？- 強くなるきっかけがある（後書き）

ネ：「今回のお話どうだった？え？流し読み？ちくしょう」

マ：「これで終わり？」

ネ：「いや、まだまだこれから盛り上がってくる」

マ：「ふ～ん。じゃ、次も頑張りますか！」

ネ：「おう！…ところでマイちゃん、サイクリング行こうぜ」

マ：「ゴメン。これから登山しに行くから」

第六話：VSメタル - ワシの息子じゃ（前書き）

マ：「返してよ～！返してよ～！住民票返してよ～！」

ネ：「返して欲しくば何かをよこせ」

マ：「金塊とメリケンしかないけど…」

ネ：「メリケン！！マジかよそれで許す！！」

マ：「じゃあメリケンで殴るから避けないでね」

ネ：「よっしゃあああ！！ばっちこいいぃゃや！！」

マ：「バーン」

ネ：「げふぅ！…まだまだああ！！」

マ：「バーン」

ネ：「おふぅ！いいよいいよ！！」

マ：「バーン」

以下繰り返し。

第六話：VSメタル - ワシの息子じゃ

嫌です　嫌です　嫌なんです　嫌だ嫌だいやだイヤダ

僕はそんなもの知りたくない

僕はそんなもの理解したくない

文字を刻むだけで火を起こしたり

魔法陣を描くだけで好きな所にワープしたり

呪詛を唱えるだけで人を殺したりしたくない

木の棒と木の板を使って火を起こせばより達成感が得られるとゆうのに

己の両足で歩けば道中の風景がより美しく感じるとゆうのに

計画を立て手にした刃物で刺殺すればより開放感と罪悪感があるとゆうのに

そんな楽な方法は僕にはいらない

僕は努力がしたい

だから僕は――

「だから俺様はめちゃくちゃ楽しく、はちゃめちゃ愉快に悪巧みす

るのさ」

―――――――――――――――――――――

『っとゆうわけで、ワシが困っている事はこれで理解したかのぉ？』
「……どちら様ですか？」
日曜日の朝六時ジャスト、アタシこと高上　舞〔タカガミ　マイ〕はパジャマ姿のまま家でダラダラと休日を過ごしていたそんな時、無駄にいい声してる知らない爺さんから電話が来た。ってか、かなり早口で言われて聞き取れなかったよ…。
知らない爺さんは電話越しに『あ、そうじゃった』と、自己紹介をしてなかった事に気づいて、
『ほら、ワシじゃよワシ』
「ワシワシ詐欺ですか？」
『そんな詐欺存在せんわぃ…。まあいつか現れるやもしれんがのぉ。あれじゃ、マイちゃんのバイト先の一番偉い人じゃよ』
「……え？　それってつまり？」

『うむ。ワシが神様の中の神様、大神様〔オオカミサマ〕じゃ』

電話越しに神様光臨したー！！！？
「え！？　あ、いや、すみません！！　ワシワシ詐欺とか言ってすみません！！　声がドラゴ◯ボールのセ◯に似てるとか思っちゃってすみませんんっ！！！」
『……まあそれは置いとくとして、ワシの話聞いてたかのぉ？』
置いとかれちゃったよ。絶対怒らせちゃったよどうしよヤバいよ

…。
「は、はい…。人捜しでございますですよね？」
『日本語がおかしいぞぃ？　それよりも、何としても見つけだして欲しいのじゃ』
「はあ……」
う～ん、本格的な人捜しなんてしたことないなー。アタシなんかに出来るかな？　…とりあえず、その人の情報が必要だよね？
「あの、その人の特徴はどんなですか？」
『ワシの息子』
「さらっと凄いこと言った！！」
大神様の息子！？　いやいやいやいやっ！　…え！？　息子さんが行方不明！？　迷子！？　大神様って息子さんいたの？？
混乱するアタシをそのままに、神様は話を進める。
『もしや家出したのやもしれんのじゃ。神様代行の仕事が忙しいと思うが、よろしく頼むぞぃ』
「ちょ、待ってください！　あの、他に特徴は？」
明らかに情報が少な過ぎる。せめて名前とか服装とか髪型とか…。
『うむむ、そうじゃなぁ。ワシに似て超カッコイイぞぃ！　そしてホントに可愛いやつなんじゃ！　今すぐにでも抱きしめたいくらい！』
「……」
大神様は親バカだった。
『探し出せたらバイト代はずむからのぅ。んじゃ、頼むぞぃ舞ちゃんや！』
ブツッ……ツー、ツー、ツー、
「…もしもし？　もしもし？！　き…切られた…」
結局なにも聞けなかった。
…あの爺さん本当に神様なのか？　窓から人が出て来てドッキリ大～成～功～！　とか言われそう。しかし、
「…バイト代…アップ！」

この前本屋で電〇文庫を大人買いしたからお金が無くなってたし、アタシにとって願ってもない話だ。…でもなー、いたずら電話の可能性も有り得るしなぁー。
「どしたの舞？　誰から電話？」
「何でもないからすっこんでて兄貴」
「コノヤロー」
…まあ暇だったし、アイツに聞いてみるか。大体の事は知ってるし、見かけてるかもしれないし。
と。ゆうわけで、アタシはとりあえず着替えてから出かける事にした。

黒猫の妖怪、裏の事情に詳しい妖怪、ネコマタの所へと。

―――――――――――――――――――――

「カッ、カカッカ、、カッカカカッカカ、カッカ」
ズルズルと…ズルズルと…。その足を引きずるように。
「あぁ、あああぁ、早く試したい。試してみたいよ」
ガリガリと…ガリガリと…。その爪で壁を引っ掻きながら。
「この『力』、この身体が本物なら、俺は無敵。無敵無敵。カッ、カカカカカッ。わ、笑いが止まらないよ」
複雑に入り組むこの街の路地裏の更に奥、『世界の歪み』の影響を受けた『能力者』、沼崎　泥都〔ヌマサキ　デイト〕は歩いていた。
白いシャツに灰色のズボン、短い茶髪に鋭い目を持つ彼の左半身、足先から首筋にかけて肌は変化していた。

鈍い光を放つ鋼。泥都の能力、『剛限鉄硬〔メタルマン〕』。皮膚を鎧のような鋼鉄に変える能力。
だが、その能力が問題なのではなく、沼崎　泥都の人格が何よりの問題だった。
「ノコギリでも切れない、電動ドリルでも穴が空かない、火もそれほど熱く感じないし壁を殴っても大丈夫…」
泥都は左手の指先をコンクリートの雑居ビルの壁に当てて、ガリガリとえぐった跡を残す。
泥都は犯罪者になりたかった。まるで、将来なりたい職業がそれだと言いたいように。
不満や欲求がある訳ではない。ルール、常識、秩序、それらを気にせず、やりたい事をやる自由な様に憧れたのだ。
誰にでも言える事だが、親にも社会にも幼い頃から縛られてきた彼は、世界のすべてに退屈していた。何時までも続く日常に疲れていた。
そんなある日のニュースで、昨夜逮捕されたと報道された連続殺人犯の顔が映った。泥都の目には、殺人犯がルールから解放された人種に見えた。そのやり遂げた犯人の顔を見て、泥都は犯罪者に憧れ始めたのだった。
「後は、これは人を殺せる力なのか…それさえ分かったらすぐ犯行、犯罪、違犯、…やっとなれる…憧れの犯罪者に！」
バゴッ！！　と。喜びを抑え切れず、左拳で壁を殴り穴を開けた。
彼は真面目で心配性な性格である。だから行動する前に準備を怠らず、前もって調べておく。事件を起こす時も調べてから犯行すると決めていた。しかし、犯行に関しての知識が浅い自分では大それた犯罪は計画出来ない。そう考え、今まで犯罪に踏み出せなかった。
「でも今なら出来る。計画なんていらない。盗み放題殺し放題だ！
でも、最低限、最低限この力を検証しないと」
薄暗い路地裏でブツブツとニヤけながら呟く。
「とにかく、まず一人、試しに殴ってみよう。何回殴れば死ぬのか

な？　カッカッカカッ！　五回ぐらいなら逃げる時間も充分だな、強盗殺人も夢じゃない！」
泥都はルンルン気分で暗い路地裏の奥へと進む。が、
「…やっぱここじゃあ人はいないのか？」
人に出会わない。やはり人気のない路地裏で試すのは無理があったか…。と、その時、
コツ、コツ、コツ、コツ…
「！　い、いた、いた！？　カッ、カカカカカカカカカッ！　やった、やったぞ！！　そうだ、慌てるな、落ち着け。どうしよ、いよいよだ！　ドキドキするよ！！　カカッカカッカっ！」
奥にある十字路の右に曲がった所から靴の音が聞こえる。
泥都は子供のようにはしゃぐ。汗ばむ手を握りしめ、緊張しながら早足でなおかつ足音を殺して近づく。
「とにかく、近づいて問答無用で頭を殴る！　この『鋼の拳』で殴りつける！」
心を落ち着かせ、息を整え、何度も頭の中でシミュレーションして、覚悟を決めて、
「……よし、大丈夫。いざ、初陣！」
そして、泥都は右に曲がり、その鋼鉄の握り拳で襲い掛かった。
「ぁあ？」

シャキン

握り拳が、いつの間にかパーになっていた。
「？　あれ？？　…俺の指は？？？」
親指人差し指中指薬指小指。左手の指が付け根から全部落っこちていた。
「あ、ぁああ…ぁあああああああああああああああああああああああああああ！！！！？？」
指がとれた事に気づいた瞬間、泥都は決壊したように叫んだ。付け根からどろどろと血が流れ、止まらない。
「ッ…っせえな！　指斬り落としたぐらいで泣くなよ…ったく」
襲われたガタイのいい男はうっとうしそうに言った。
背が高い青年だった。ワイシャツの上に黒いジャージをチャック全開で羽織り、チェーンやファスナーがジャラジャラ付いたズボンの左右に一本ずつ剣を携えている。そしてなぜか、黒い髪の中から二本の短い角のような物が顔を出していた。
「指？！　指が落ちて！！？　ああああああああ！」
指を動かす感覚はあるのに指がない。不思議な感覚に戸惑い、痛みと驚きがごちゃまぜになる。
「…いや、何か、悪かった。喧嘩売られたと思ってつい…。絆創膏(ばんそうこう)いるか？　ボンドでくっつけるか？」
青年はポケットに手を突っ込んだまま相手の顔色をうかがう。泥

都の顔は激痛と驚きでぐしゃぐしゃだった。
「あぅ…うう、…何で、何で取れたんだよ…」
「ん？　何？　ボンドいる？」
「俺の指だよ！　コンクリートすら簡単に砕くこの指を、どうして！？」
「……そりゃあ、斬れたからだろ？」
青年にあっさり言われ、泥都の自信は煙りのように消え去った。残ったのは犯行に及ぶどころか返り討ちに会い、泥都の力がその程度だったという屈辱の結論だけ。
「ぅ、…っぐうおあああっ！！」
泥都は絶叫し、左肩を前に突き出してアメフト選手のようにタックルする。
「うぉお！？」
青年は身体をくの字に曲げてそれを避ける。すぐ横をタックルが通り、後ろの壁に斜めから激突する。そして、コンクリートの壁は粉砕した。
「……おいおい、マジかよ」
突撃された壁がまるで爆薬を使用したように吹き飛んだ事に、男は驚愕した。
「…カッ、カカカッカッカカカッ！　み、見たかよ、俺の力！　俺は強い、最強の、最悪の殺人犯だ！！」
振り向き、青年の驚く顔を見て勝ち誇る。
「……まだ死んでねえよ。…流石にありゃ無理か…、どうしたらいい？」
泥都は首を傾げる。どうしたらいいって、何で俺に聞くのだろうか？
だがそれは、泥都に問うたものではなかった。
「じゃあぶっ壊しちゃおぅ～♪」

ゴシャッ！！

泥都の後ろから、誰かの回し蹴りが左肩へと炸裂した。

「ギャアッ！！」

そのまま反対側の壁にたたき付けられ、左肩の硬質化した皮膚は回し蹴りによってペンキの塗装のようにパラパラと剥がれ落ちた。白いシャツが赤い血で染まっていく。

「貴乃華〔タカノハナ〕ぁ、どこ行ってた？」

青年は苦しむ泥都を無視して言った。

「べっつに～☆　ボクはちょと散歩ついでにアラちゃんの慌てっぷりを見物してただけだよ～♪♪」

「……相変わらずいい度胸してんのな」

貴乃華と呼ばれたのは小学生ぐらいの子供だった。タキシードのような格好に首の赤い大きなリボンが印象的。金髪で幼い顔立ちから女の子に見えなくもないが、どうやら男の子のようだ。

「…この人誰？　アラちゃんの彼氏★？」

貴乃華は心から楽しそうに、アラちゃんと呼ばれた青年をちゃかした。

「殺すぞ。ってか、知らない奴なら蹴り飛ばすな！　お前のは東京タワーでもへし折る勢いの蹴りだろうが！」

「やっだなーアラちゃん♪　スカイツリーで限界だよ☆」

「大差ねえ！！　破壊神かよっ！？」

「その気になれば世界を敵にまわせます♪」

「止めろ、ちゃっかり世界征服達成しちゃいそうだ」

二人は泥都の事を完全に忘れて言い合っている。

「……く…ぅ」

その隙に、泥都はよろよろと気づかれないように貴乃華の後ろを通って逃げる。体も心もボロボロな泥都は、背を向けて逃げる事しか出来なかった。路地裏の奥へと進む。

と、

「もう、ボクそんな事に興味ないもーん☆　それに…」
泥都はその時、奥にもう一人誰かいる事に気づいた。
「世界征服するのは神之上〔カミノジョウ〕だもん♪♪♪」
暗い路地裏に、白い男が立っていた。
「その通りだ貴ちゃん。世界征服は俺様の夢だ」
異質。
明らかにあの男の纏う空気が違う。
神之上という男は肌が白く、この四人の中で一番背が高かった。髪もシルクのように白く、腰まで伸ばした長髪。イケメンの部類に入る顔に青い目、更には純白の白衣を着ていた。白の印象が強すぎて聖人のようにも見える。
「それとアラちゃんさあ、路地裏だからって一般人を斬っちゃうのはどうかと思うんだよね俺様……」
「そうだぞアラちゃん☆！」
「てめぇも蹴り飛ばしただろが貴乃華！！　…いや、コイツからやって来たからつい…」
三人に囲まれた泥都は困惑し、恐怖した。憧れの犯罪者デビューのはずが、まさかこんな事態を招く事になるとは思いもよらなかった。
「うん？　そうかなるほど、能力者だったか。いや、家のアラストルが世話を掛けた。すまない」
神之上は涼しい顔で、アラちゃんことアラストルの代わりに謝罪した。

「…なんだよ、…俺は力があるんだぞ！？　何で驚かないんだよ！？」
その謝罪の言葉を無視し、泥都は三人に向けて唾を飛ばした。そんな問い掛けに、神之上は答える。
「…君の力は俺様達にとってたわいもない物だからだよ」
「…は？」
「君にとっての異常は、俺様にとってはただの通常だと言ったんだよ」
神之上は頭を上げ、歩き始める。
「異能力を…非日常を手に入れて、自分が強くなったと勘違いしてるみたいだが、実際なにが変わった？」
神之上はゆっくり泥都に近づく。プレッシャーに気圧され、泥都は意思に反して後ずさりした。
「…カッ、カカッカカッ！　もちろん、全て！　俺はこの力で全てから解放された！！　カカカッ！」
と、泥都は高笑いをあげる。が、
「うん？　つまり、ルールからの解放って事か？　残念。お前はまだ解放されてない」
神之上の言葉に泥都の表情が固まった。
「……カカッ？」
「全てのルールから解放されてなきゃ、真の解放とは言えねえよ」
神之上はそう吐き捨てた。
「“社会のルール”なんて小さなものじゃない。親から生まれ、重力に縛られ、朝になったら起きて、夜になったら寝て、腹が減ったら食べて、それを規則正しく繰り返し、そして老いて死ぬ。この“人間のルール”から解放されなきゃねえ？」
人間は生きているだけでルールに縛られる。社会で生きていくルールだけでなく、人間と言う種族であるためのルールもまたしかり。
「…か、関係ない！　俺は犯罪が出来る出来ないの話を…」
「関係あるだろ。いいか？　真の解放ってのは…死ぬって事だ。死

んで、プラスでもマイナスでもない、ゼロになるって事だ」
白く異質な男の言葉は重く、水のように心の隙間に流れ込んだ。
「お前は解放されてない。悪ぶっているだけだ。それに、犯罪者ってのはそれはそれは酷い顔をするものさ」
「……ぁ……ぅぁっ…」

その時、泥都は昔見たニュースを思い出した。殺人犯のあの満足した顔、あれは、解放された者の顔だった…のか？

—…あれ？　なにこの感じ…。

「……あ」
そして気づく。あれは、死を求めた顔だ。苦しみを耐え切れず、自ら命を絶つ事も出来なかった彼らは、自分の心を殺したのだ。あの顔は、今すぐ死にたいという感情の表れだったのだ。

怖い。怖すぎる！

「い、嫌だ！　うわああっ！！」
絶叫し、後ろに退いた足がもつれて尻餅をつく。
「嫌だあ！　あんな顔になりたくないい！！」
今まであれ程にまでなりたかったのに、この男の言葉で夢が打ち砕かれてしまった。
目の前まで来た神之上は泣き叫ぶ泥都を見下ろす。まるで、世界を俯瞰する神様のように。
「……ふん」
そして、神之上は胸ポケットから一枚の紙を取り出し、泥都の頭にぺたっと貼り付ける。すると、一瞬の内に紙が溶けるように消えた。
「……よし、アラちゃん貴ちゃん、そろそろ行くか」

「う～っす」
「は～い♪」
興味を無くした神之上は来た道を戻り、アラストルと貴乃華の二人は神之上を追い越して前を歩く。そんな三人を尻餅をついたままの泥都は、
「……ょう」
怒りを込めて睨みつけていた。
「……ちくょおおおぉおお！！」
そして、自分の情けなさに耐えられなかった泥都は、指がない『鋼鉄の腕』を振り回しながら神之上へと突っ込む。そんな泥都に神之上は、
「はあ…。お前、めんどくさい奴だなああ！！」
振り向きざまに硬質化した腹へ、渾身のボディーブローを放つ。
ミシャッ！　と。黒い皮膚が砕け、胃液が血と共に逆流し、身体の中心から花のように血が広がった。
「ガァッ！！？」
そのまま歪んだ弧を描きながら宙を舞い、後方へ殴り飛ばされた。
「憧れの犯罪が出来てよかったな。あれ？　未遂だったか？　まあいい、本気の殺意を持った時点で殺人者になったみたいなもんだしなあ」
ゴホッと吐血し、泥都の意識はそこで途切れた。…動かない。
「…死んでないよな？」
やり過ぎたか？　と、少し心配になってきた。
「ヤ～ちゃった♪　ヤっちゃった♪　神之上～がこ～ろした♪♪」
貴乃華はキャッキャとちゃかしている。神之上は冷や汗を流しながら、
「いや、でも、大丈夫だって！　危なくてもすぐ天界から人が…」
と、泥都の様子を見ながら言った。
「ちょっと待て。天界から…何だって？」
神之上にアラストルが聞き直した。

「え？　あぁ…さっき貼った紙が目印になって天界人が来んの」
「馬鹿かてめぇ！！　今天界人に見つかったら確実に拘束されるだろが！！」
「え～？　元々最初に事を起こしたの何処のどいつよ？　ぁあ～ん！！」
「むぐぐ…む、むこうから来たんだぜ？」
やり返したけど…。
「天界人なんかに見つからねえよ。ほら、腹が減ったから飯食いに行くぞ」
「ワ～イ☆　ボクねえ、ステーキとラーメンとステーキとシチューとステーキね♪」
「ハハッ、貯金がぶっ飛ぶな…」
そして三人は何事もなかったかのように笑いながら路地裏を去る。
「んで？　作戦会議もついでにするか？　襲撃とか破壊工作とかは俺が担当な！」
アラストルは凶暴に笑い、
「じゃあね～♪　ボクはレインボーブリッジとか東京タワーとか真っ二つ係ね☆」
貴乃華は無邪気に笑い、
「いいねいいね！　悪党っぽいね！　せっかく地上界に来たんだし、そんぐらい暴れねえとなあ！」
神之上は妖しく笑う。

「じゃ、作戦会議の後、俺様たちは穏便に、冷静に、狡猾に、醜悪に、派手に、迅速に世界征服を始める！　地上人の諸君、ベッドの隅で奥歯ガタガタ言わせながら待ってろよ！！」

―――――――――――――

「……なにあれ？　……怖っ」
その様子を見ていた黒猫妖怪が一匹。

第六話：VSメタル - ワシの息子じゃ（後書き）

貴：「さあさあ始まるザンスよ♪」

ア：「いくでガンス」

神：「フンガー！」

ネ：「…こ、この場合は本家かそれとも…」

マ：「まともに始めなさいよ！！」

ア：「言っちゃったしもう終わりだし…」

第七話：VSヤンキー - いや…これ煮干しじゃん（前書き）

ネ：「新キャラだしすぎじゃね？俺が目立たねえぞ…」

神：「いいじゃないか新キャラ！何が悪い！？」

マ：「かろうじて言うなら、新キャラって事を前面に押し出してるのがウザい」

貴：「ボクそんな事してないもんっ！ね、アラちゃん？」

ア：「お前の喋り方自体が媚び売ってるだろ」

第七話：VSヤンキー‐いや…これ煮干しじゃん

五月三十日の日曜日。天候、晴れ。
中間テストも終わり、いつもなら午前中は家でだらだらと過ごすはずだった高上　舞〔タカガミ　マイ〕だが、今日は違った。
「じゃあよろしくね、ネコマタ」
「…よろしくねじゃないでしょマイちゃん」
誰もいないカヤノキ公園のベンチにはマイとネコマタが仲良く座っていた。マイはズボンにワイシャツとゆう、どちらかと言えばメンズのファッション。
「なんで？　魚もおごってあげたし…」
そんなマイはベンチに寄っ掛かり、尻尾が二本の黒猫妖怪ネコマタを見た。ネコマタはマイの右隣りで行儀よく座っている。
「いや…これ煮干しじゃん。これでどう飢えを満たせと？」
ネコマタとマイの間には煮干しが五匹並べてあった。ちなみにここ最近ネコマタはなにも食べていない。
ブチッ。
「ふっざけんなやあああああっ！！　猫おちょくんの大概にしいやコラアアアアアッッ！！」
その煮干しを蹴散らし、そのぷにぷに肉球でマイにつかみ掛かっり怒鳴り付ける。
「ちょっ、やめ…いたたたたっ！！　爪！　爪が首に刺さっ―」
「こっちはなあ、餓死寸前なんじゃい。死にそうなんじゃい！　おごるとか言っといて煮干しってお前…！？　これで生きろってか？　一ヶ月煮干し生活か？　鬼畜にも程があらあぁっ！！」
今までの不満が大爆発を起こし、喉が枯れるまで叫びまくった。ネコマタにとっては命が掛かっているので冗談では済まなかったらしい。言いたい事を全て吐き出し、ぱっと手を離して座りなおす。
「ぜえ…はあ…ぜえ…。とにかく、いきなり神様捜し出せって言わ

れてもすぐには無理！」
「神様じゃなくてその息子ね…。アタシは人捜しとかした事ないからネコマタを頼りにしてるの。お願い！」
手の平を合わせてぺこりと頭を下げる。ネコマタは少し考え、
「……わかった、調べてやる」
「ホントに！？　サンキュー！」
「ただ～し！！」
ビシッと、小さい手でマイを指さす。
「食い物よこせ。一ヶ月分は食いだめしたい」
…正直、今現在のマイはあまりお金を持ってないので魚一ヶ月分はきつかった。
「むむ～…、ファミレスとか行ければいいけど…猫だしなぁ…」
ペットオッケーな店は大分増えてきたが、この街のどこにあるかマイは一軒も知らない。どうしようかとマイがそう考え込んでいると、
「ふっふっふっ。マイちゃん、忘れちょるぜよ」
ネコマタが気持ち悪く笑い始めた。
「俺が変化の達人だとゆうことをな！　人間に化ければどこでもオッケー！」
「……また変な動きして終わりでしょ？」
久々のマイの冷た過ぎる視線。ネコマタは前回も出来るとか言って何も変化無しだったので、疑うのも当たり前である。
「その目をやめろ…。最近やっと忘れてきたのにまた夢に出て来るだろ…」
額から冷や汗が一滴たれた。ともかく、ネコマタは妖怪である。それゆえに妖術も使える…とか自分で言っていた。
「大丈夫、今度はちゃんとやるぜ。試しに軽～く変化を見せてやろうぞ！」
ベンチの上からピョンと飛び降り、少し離れてマイの方に向く。
「人間かキングギ〇ラかクロスボーンガ〇ダムか浜崎あ〇みか、ど

れに化けたらいい？」
「…普通に人間で」
「…つまんねっ。え～、では！　まず…」
「……」
期待はしてないけど一様見る。
「…鼻毛を抜く。以下略！！」
「短っ！！」
ぷちっ、と。鼻毛を一本抜く。すると、
「ぐぉおおオオオッ！！」
ネコマタから白い煙りが取り巻き始め、あっという間に見えなくなった。
「な、なにいぃぃ！！」
あまりにいきなりだったので立ち上がり、戸惑うマイ。そして、
「ネ、ネコマタ？」
心配するマイの目の前で、ゆっくり煙りが薄くなって来た。
「…ふうっ。マイちゃん、これが俺の変化の術の一つだ」
「こ、これが…！？」

「そう、Ｘｂ○ｘ３６０だ！」

「せめて生物になれやあああアアッッ！！」
マイはバキリッと、思いっ切り踏み潰した。
「ウブォアアッ！　…き、貴様もＰ○３派か！？　俺は認めん、認めんぞお！！」
「聞いてねえよ！　アタシは人間に化けられるかどうか見たかっただけなの！！」

無機物に化けられる事には驚いたが今は必要ない事だ。
「…食べたくないの？」
腕を組み、破壊されたＸｂ…もとい、ネコマタに聞いた。
「わかった！　わかったから食べさせて！」
ネコマタの必死な眼差しに、マイは思わずため息をつく。
「はあ…。じゃあ、変化したらファミレスに行こ？」
そして、つい許してしまった。…なんだかんだ言っても仲はいい一人と一匹である。
「よし行こう！　一度ドリンクバーってやつをやりたかったんだ！」
「ん～、じゃあ美味しいジュースの配合教えてあげる」
「なぬっ、それはいいな！　待ってろ、すぐ済ますから…」
「はいはい…」
誰もいない公園で、マイとネコマタは楽しく会話していた。
「とりあえず、…蜜子がバイトしてる所に行ってみよっかな？」
そんな事を考えていた時、
「よう嬢ちゃん、何してんの？」
「…？」
気がつくと、十五、六人くらいの男達がマイを取り囲んでいた。
革ジャンを着ていたり、ピアスを付けまくってるようすから、ごく一般人ではなさそうだった。
「…あの、なんですか？」
「べっつに～？　ここらでたむろしてたら女子高生がいたから話しかけただけだし？」
「……朝から公園でたむろって…、そしてベタな展開…」
男達はマイにゆっくりと近づく。
そして……。

たくさんあるファミレスの中でも一番人気の店がある。
広さもメニューの多さも店員の態度も申し分ないこの店のドリンクバーコーナーに変な三人組がいた。
「…あれ？　おい、コーラ出ねえぞ？　店長呼べ店長」
一人はガタイのいい青年。黒いジャージ姿に剣を二本携え、何故か頭から小さな角が二本生えている。
「ふっふふ～ん♪　オレンジと～、カルピスと～、ウーロン茶と～、コーラ多めに混ぜて～…て、コ、コーラが出ないっ★！？」
一人はタキシード姿に大きな赤いリボンが首に付いているのが印象的な金髪の子供。
「コーラ、コーラ。おい、貴乃華〔タカノハナ〕、アラストル、持ってくの手伝え」
一人は背の高い美形の男。白いシルクのような長髪に白衣を身につけ肌も白い。そんな白過ぎる男は十杯のコーラが入ったコップを抱えていた。
「お前かよ！！」
アラストルと呼ばれた青年がツッコミを入れた。
「神之上〔カミノジョウ〕のバカッ★　ボクの分が無いじゃないか～…←」
続けて貴乃華と呼ばれた子供が神之上と言う男を睨みつける。
「俺様は喉が渇いたのだ。だからコーラ十杯を飲む。異論は聞くが認めませーん」
「ぐぐぐぅー、神之上なんてコンソメスープだけ飲んどけ★！」
「アイスティーとセットのガムシロップだけ飲んで虫歯になれ！」
「頼まないでも来る水だけ飲んでお腹破裂しろ★★！！」
二人の言い合いは止まらない。

「そこの馬鹿二人！　後ろ詰まってんぞ！」
アラストルは込みはじめたドリンクバーコーナーから離れ、先に一番奥の窓際の禁煙席へと戻った。座り、意味もなくメニューを開く。
「…やっぱ肉がよかったかなぁ…」
「こちら、サラダになります！！」
「うおっ？」
瞬間、横からでかい声がしたと思うと、ウェイトレスが注文したサラダの皿を持って立っていた。茶髪を邪魔にならない程度に切り揃え、フリルの付いた可愛らしい服（人気の理由の一つ）を着ている。ぎこちなく皿を置く感じから、どうやらバイトを始めたばかりである事が分かった。
「ど、どもっす」
ウェイトレスがサラダの皿をテーブルに置く前に受け取る。
ウェイトレスは駆け足で厨房に戻った。…よくあんなにやる気出せるなぁと、少し感心してしまう。
「ハゲ散らかせ☆＃！！」
「身長五センチ縮め！！」
ウェイトレスと入れ代わるように神之上と貴乃華が戻って来た。
「そこの馬鹿二人止めろ、目立つだろが」
「だってこの白髪が…←」
「だってこの金髪が…」
「いいから！」
言い合いを止め、貴乃華はアラストルの隣に、神之上は向かい側に座った。
「…水飲み過ぎて死ねアラちゃん……←」
「…餓死しろアラストル……」
「文句あんなら目を見て言え！！　おい！　聞いてる！？」
結局三人ともうるさかった。
待ってる間暇なので、アラストルは神之上の計画、世界征服につ

いて聞く。
「…で、これからどうする？　やっぱ問答無用で壊しまくるか？」
「落ち着けアラストル、ちゃんと考えてる。まずやる事があるんだ…」
神之上はコーラ一杯を一気飲みし、真剣な顔で言った。
「やる事？」
「うん……」
そして、テーブルの上で手を組み、答えた。
「『神様代行』って奴がいる」

アラストルは首を傾げ、貴乃華も単語の意味が分からなかった。
「天界で処理仕切れない事件を代わりに解決する地上人の事なんだけどさ…。『世界の歪み』の影響を受けた奴とかあっという間に倒したりするらしい」
アラストルはピクッと反応する。
「……ハハァ！　いいねぇ、つまりそいつが邪魔なんだろ？」
凶暴な笑顔を浮かべ、腰の剣に触れる。体は待ちきれんばかりに武者震いしていた。
アラストルは根っからの喧嘩屋である。強いと聞いて我慢など出来る訳がなかった。
「だったら俺が倒す。そんな大層な名前してんなら、それ相応に強いんだよなぁ？」
「ん～。強いのは確かなんだけど、親父が適当に決めたらしいんだよ」
「親父って言うとつまり……」
「大神様〔オオカミサマ〕だよ」
あっさりと言った。
そう、この神之上は天界人であり、全知全能なる大神様の一人息子なのである。

「まったくあのクソ親父、自分の仕事が忙しいからって地上人にまで迷惑かけるとは…」
忌ま忌ましく呟き、コーラを二杯一気飲みする。そんな神之上に貴乃華は、
「ねえねえ♪　神様…ダイコウってつまりさあ、地上人が神様になるって事♪？　地上人じゃないといけないの♪？」
と、いろいろと混ぜたジュースをストローで飲みながら聞いた。
「あ～何て言うかなぁ。地上に調査しに来る天界人は一般的に『天使』って呼ばれるんだけど、そいつらは直接地上に干渉出来ないんだよ」
「カン…ショウ→？」
コップの中の氷を指で転がしながら、
「人が幻に触ることが出来ない、または幻が人に触る事が出来ないのと同じ事だよ。で、地上に唯一干渉出来るのが神様ってわけ。天使が報告し、神様が然るべき処置をとる」
「ふんふん♪」
「さらに、神様はその力を他者に移す事が可能なわけ。そして地上人に神の力を与えた。そいつが『神様代行』。神様の代わりに仕事をする存在って訳」
コーラを空のコップに移す。
「ちょっと待て、だったらその天使に力やればいいだけじゃん？」
アラストルが横槍を入れた。しかし神之上は即答する。
「天使自体も力が大きいんだよ。だから、ほんのわずかな力を与えただけでも容量満杯だから意味がない」
氷が詰まったコップにコーラを入れる。コーラは氷の隙間に入り、すぐにいっぱいになった。
「だから、大きな器に小さな力しかない地上人に白羽の矢が立った。説明終了！」
満杯のコップを手に取り、氷ごと飲み干す。説明を聞いて、
「へえー♪凄い凄い★！！」

ぱちぱちと拍手する貴乃華。
「なるほどぉ、神様の力か…楽しそうだな！」
より戦いたくなったアラストル。
「てか俺のナポリタンまだ！？」
バンッ、と。テーブルを叩く神之上。その時、
「…ん？　何か騒がしい…」
入り口の方からざわざわと声が聞こえる。
「行ってみる♪？」
「ぁあ？　めんどくさいだろ……まあ、ちょっとだけなら」
三人はテーブルから離れ、入り口へ足を運ぶ。すると、
「暴れないでくださいっ！！」
「ぁあんだとぅ！？　客に向かってなんだそぅルゥィエアッ！！」
「わかってねえな茶髪の嬢ちゃん！　俺達はここらで有名なヤンキーなんだぜえ！？」
「舐めたらあかんでやんすよ！！」
茶髪のウェイトレスがスキンヘッド、リーゼント、モヒカンの三人の男に絡まれていた。
「あ、さっきのウェイトレスじゃん」
アラストルは冷静にそれを傍観する。…ベタにも程がある展開だった。
スキンヘッドの男はポケットに右手を突っ込み、何か取り出した。
「いいのかあ？　いいのかあ！？　俺っちのナイフ捌き見たいのかぁあぅルル！！」
銀色のバタフライナイフがひゅんひゅんと宙を舞う。
「出たっ！　タクマ君の『剣の舞い』！！　これを見て生きてた奴はいねえぜ！！」
「さすがでやんす！惚れ惚れするでやんす！！」
どうやらリーゼントとモヒカンはこのタクマ君の取り巻きらしい。
…『剣の舞い』って……。
「…え、えっと～」

茶髪のウェイトレスはリアクションに困っていた。
「うぅるあ、うぅるあ！　まだまだ早くなるぜぇぃイヤフッ！　…
…いっ、手ぇ切った…」
「「タクマ君ンンンッッ！！」」
「……」
なんだ、ただの馬鹿か…。
「あれ、神之上は★？」
「ぁあ？　…あれ？」
周りを見回すが神之上が見当たらず、いつの間にかいなくなった。

「ちょいと待ちなあ！！」

すると、人込みの真ん中から声がした。
「…忘れてた。あいつ、ベタな展開大好きだった」
アラストルの思った通り、神之上はヤンキーの後ろに立ち、これでもかと言う程の決め顔で登場していた。
「なんじゃあぃいや！　いま絆創膏（ばんそうこう）はっとる最中じゃあいィヤゥ！」
「そのウェイトレスから離れな、このぼんくら三人組…。それ以上はこの俺様が許しておかねえ！！」
「……」
ヤンキー三人組もウェイトレスも周りの人も、神之上を見てぽかんと口を開ける。まあ、こんな変な外国人っぽい人を見たらそりゃあなるに決まってる。
「…頭大丈夫かぃい？」
「タクマ君に喧嘩売るとは、なかなかいい度胸してるぜ！」
「日本語通じるでやんすか？」
ヤンキー三人組はガンを飛ばし、神之上を取り囲む。それに対し、神之上は余裕の笑顔を浮かべていた。
「ふっふっふっ、俺様の恐ろしさが理解出来てないようだな。…アラちゃん、貴ちゃん、や～っておしまい！」

自分でやらないのかよ…。仕方なくアラストルと貴乃華は謝りながら人込みを分けて前に出た。
「あらほらさっさ…」「あらほらさっさ♪」
アラストルは剣の柄を握り、貴乃華はピョンピョンと軽くその場でジャンプする。更に二人が出て来て周りは更に困惑しているようだ。
「な、ななっ、なんじゃいわるぇえエイヤッ！！　外人のお仲間さんかぅうわルウェイ！！」
たじろぎながらナイフを振りかざす。が、もちろん二人はそんな物は怖くも何ともない。無視してアラストルがスキンヘッドのタクマ君に言う。
「まあそんな所だ。で、てめぇら強いのか？　ここでは有名なんだろ？」
アラストルは何時でも剣を抜けるように柄に手を置き、笑っていた。
「……ギ、ギャハハハハ！　あ、当たり前だこるぅアィ！　おい、教えてやるぅういエィ！」
タクマも他人任せだった…。リーゼントとモヒカンのヤンキーが言われて前に出る。
リーゼントの男はポケットに手を入れると、中から黒いスタンガンを二つ取り出した。
「俺は『ダブルスタンガン』の異名を持つ男、油板　多紀〔アブライタ　タキ〕！」　更に、モヒカンの男は鉄パイプを背中から出した。
「おいらの名は耶金　山一郎〔ヤガネ　ヤマイチロウ〕、人呼んで『鉄パイプ魔人』でやんす！」
そして最後に、スキンヘッドがバタフライナイフを片手に、
「そしてこの俺っちいぃ、『バタフライマスター』ことぅ、北十字拓麻〔キタジュウジ　タクマ〕だああウルッ！！」
言い切り、三人それぞれ決めポーズを取って見せた。

沈黙

「…聞こえなかったならもう一度ぅ。俺っちは」
「聞こえたよッ！！　てかうるせえよッ！！」
周りに代わってアラストルが怒鳴った。ヤンキー三人は明らかに残念な顔になったがそれが無性に腹が立つ。
「つまりあんたら戦えるんだろ？　だったら来いよ。そこのリーゼント！　取りあえずてめぇからな」
アラストルは油板を指差した。
「え！？　…こ、この野郎…！」
油板はビクッと驚いたが、すぐにスタンガンを前に突き出し、突撃の構えをとる。
「じゃあボクはそこのモヒカン君だね♪　さあ来いっ♪♪！」
「モヒカン君って…おいらの事でやんすか！？　…こ、子供だからって、許さないでやんすよ！」
鉄パイプを振り回し、貴乃華に近づく。
流石にこの緊迫した空気に客や店員が、「警察を呼べ」やら「逃げた方がいい」やらざわざわと騒ぎ出し始めた。
「ギャハハハハぅ！　いいのかよ外人さん。お仲間さんがピンチだずぅえイ！」
ナイフを神之上に向け高笑いをする拓麻だったが、
「ピンチ？　誰が？」
神之上は心配する様子もなく、冷静だった。そんな時、
「死ねッ！！」
油板はスタンガンを突き出し、
「食らえッ！！」
耶金は鉄パイプを振り下ろす。
それぞれの相手の下へ襲い掛かる油板と耶金。ところが、二人は逃げるどころか、

「…なんだそりゃ？」

アラストルは素手でスタンガンを真っ正面から受け止め、握り潰し、

「ドーン♪！！」

貴乃華は蹴り上げでパイプを木の枝のようにへし折った。

「「……あれ？」」

一瞬で自慢の武器をあっさり破壊されてしまった。

「う、うわ！」「ひいっ！」

油板と耶金は素早く後ずさりして拓麻の後ろに隠れる。そんな拓麻も体を震わしてビビっていた。

「て、てめぇるあ！　何隠れてやがるルル！！」

「無理だってタクマ君！　スタンガン触って平気だったんだぜ！？」

「鉄パイプを蹴りで折るなんて化け物でやんす！！」

「……ぅう」

アラストルと貴乃華はまだまだ余裕と言わんばかりにストレッチをし、神之上はウェイトレスと喋っていた。

慌てふためき、戦意が喪失したヤンキー三人組は入り口へと、神之上たちの動きを気にしながら横歩きで近づく。

「こ、今回は手ぇ怪我してたし、このぐらいにしてやるるゥ！　だがなぁ、今度はもっと仲間を呼んでボコしてやるからなァイヤ！！」

そして、負け惜しみを言うだけ言うとドアを乱暴に引き、ヤンキー三人組は駆け足で逃げて行った。

「捨て台詞までどんだけベタなんだよ…」

「ワ～イ♪　勝った勝ったあ♪」

「皆さん！　不良はこの俺様、神之上が撃退いたしました！」

しばらくして、周りから拍手喝采が沸き起こった。
神之上たち三人は人に囲まれながらテーブルへと戻って行く。その間、拍手の音はしばらく止まなかった。
「さて、そろそろ『神様代行』襲撃するか！」

――

「クソッ、クソゥッ！　俺っち達がここまでやられるとはぅぅ！」
「タクマ君、とにかく今は逃げようぜ…？　あいつら絶対人じゃねえよ」
「警察もすぐに来るでやんす！　調子に乗りすぎたでやんす！」
北十字、油板、耶金の三人は道をひたすら走り、この時間仲間がたむろしているであろうカヤノキ公園へと向かっていた。北十字はとある暴走族の頭であり、暴走族の仲間は彼の命令には絶対である。
「このままじゃ済まさねえぞぅ…。仲間集めたら即やり返す！」
「タ、タクマ君、本気かよ！？」
「あぁ本気だよぃェア！　俺っちに手ぇ出した事、後悔させちゃるルルぅ！！」
そんなこんなで公園に到着。
「よっしゃあぁぅルィエア！！　てめぇるあ、集まりやが……るぇえ？」
集合を呼びかけた北十字だったが、彼の目の前にはとんでもない光景が繰り広げられていた。

十五、六人はいるであろう暴走族が、一人の女子高生と一匹の黒猫にボコボコにされていた。そう、“されていた”のである。

「こっちは腹が減って腹が立ってんだよ！　やるならやるでルーキ〇ズとかク〇ーズゼロぐらい頑張れよ！！　特に小栗〇君ぐらいね」

しかも猫が喋ってる…。

「いや、市原隼〇も凄かったよ！　かっこいいよルーキ〇ズ！」

しかも女子高生が剣持ってる…。

「……なんじゃこりゃあああアアア！！？？」

理解不能の北十字は天高く絶叫した。その声を聞き取ったマイは、

「むむっ！　増援か！？」

テンション上がり気味の為、公園に来た三人組を即敵と決め付けた。

「『メタモルフォーゼ・金槌』！！」

即座にマイは変幻自在の剣を巨大なハンマーに変える。そして、一直線に三人に向かって走り出した。

「ま、待て！　待ってくださいィィ！！」

「俺達は関係ないぞ！」

「そうでやんす！」

必死にマイを止めようとするが、マイはまったく聞く耳を持たなかった。もう逃げても間に合わない。ハンマーを真横に振り、ヤンキー三人組をいっぺんにたたき付ける。

「喰らえこの腐れ外道ぐぅあああッッ！！」

三人まとめて空高く宙を舞ったのは、言うまでもなかった。

――――――――――――

「いや～、いい汗かいた。なんかお腹すいたの忘れちゃったなぁ」
「じゃあファミレス行かなくていい？」
「いや、それは別の話しだぜ」
「……」
「やっぱお腹減ってきたかもしれ……マイちゃん？」
「なんか、アタシの出番が少ない気がする…」
「…俺も。そんな気がする」
「……」
「……」
「食べに行くか！」
「そうだな！！」

第七話：VSヤンキー - いや…これ煮干しじゃん（後書き）

蜜：「アタシがいたのわかったかな！！？」

拓：「いや、俺っちの活躍に目が行っててわかんなかっただるるるぅウエエィヤッッ！！」

油：「あの『剣の舞い』の美しさに度肝抜かれたに違いないぜ！！」

耶：「流石でやんす！素敵でやんす！！」

ネ：「それを見ての感想は？」

蜜：「汚い」

拓：「ッ！？」

第八話：VSソード？- 暑苦しい！動き回りすぎ！あとダサい！（前書き）

ネ：「仮面ラ〇ダー龍騎が一番面白い！！」

マ：「いや、仮面〇イダー電王こそ最高のライダーだ！！」

蜜：「サイクロン！ジョーカーー！！」

神：「変〜身ッ！Vスリャアア！！」

貴：「ア〜、マ〜、ゾ〜〜〜ンッ！！☆」

ア：「俺はシャドームー〇が好き」

第八話：ＶＳソード？- 暑苦しい！動き回りすぎ！あとダサい！

姿を欲する
名を欲する
力を欲する
才を欲する
位を欲する

我は産まれながらにして王座へ登る者
故にすべてを持たず産まれたり

強者を切り付け、弱者を切り捨て
追うもの腹を裂き、追われるもの背を裂く

草木は我を神と崇めよ
人々は我を王と知れ
牙持つ者は我を恐れよ
他国の王は我を憎め

我は産まれながらに登る者

故に我は

今だ姿を持たず

―――――――――――――――

同日。
十二時を過ぎ、そろそろ空腹に耐え切れなくなってきたマイとネコマタはファミレスへ向け、広い歩道を若干早足かつ慌てずに歩いていた。
雑居ビルや大型デパートなどが大量に建ち並ぶこの街には当然ファミレスも多い。ちなみにこの街、公園は勿論、図書館、遊園地、市民プール、オペラ座まで何でも揃っている。夏休みはどこにも行かず、この街の内だけで遊ぶ人の方が多いくらいだ。
「まあ、確かに飽きない街ではあるかな～」
「…ネコマタ、何その姿」
マイは横のネコマタの意見を無視し、聞いた。
「ん？　何って変化しただけだけど？」
そう、今のネコマタは黒猫の姿ではなかった。
俗に言うチャラ男。ネックレスとピアスを付け、赤いジャンパーを羽織ってジーパンも着用。黒髪をオールバックにしていかにも悪ぶっている感じだった。
「別にもっと地味に変化出来るけど…こっちの方がよりかっこよく見えるぜ！」
確かに顔も悪くないが、マイはこんなチャラい男の横に一秒たりともいたくなかった。理由は、
「暑苦しい！　動き回りすぎ！　あとダサい！」
です。
「そこまで言う…。あ、ここじゃね？」
ネコマタ（人間バージョン）は人だかりの先のファミレスを指差した。
「お～、流石人気のファミレスだな！　仕事中の警官もサボって食べに来てるぜ。いや、この時間はお昼休みなのか？」
「いや違うだろ…。明らかに仕事の真っ最中だよ…」

何やら事件が起こっているらしく、警察は野次馬を下がらせたり、無線で連絡を取ったり、外で店員らしき人から事情聴衆をしていた。
ゾクッ、と。その時、嫌な予感がした。
「…蜜子は！？」
「蜜子？　マイちゃんの友達？」
マイの学校で一番の親友、羽蝶　蜜子〔ハチョウ　ミツコ〕。彼女はここでバイトをしていたはずだった。もしかしたら何か事件に巻き込まれたのかもしれない。
「蜜子！！」
マイは慌てて走り出す。外にいなさそうだから、ファミレスの中かもしれない。
「え！？　マイちゃん俺放置！？」
ネコマタは人だかりが苦手である為、人を押し退けて行く事が出来なかった。
マイは走り続け、途中、警官がマイを見つけて止めようとしたが、あっという間に警官の制止を振り切ってファミレスの内へ飛び込む。
「蜜子！？　大丈夫！？」
その中に、
「あ！　マイちゃんだ！！　何で来たの！！？」
蜜子はのんきにテーブルに座っていた。
「っておい。…大分余裕だね。事件に巻き込まれたのかと思ったよ」
「アハハ！！　心配してくれてありがとね！！」
マイはしゃがみ込んで安堵する。蜜子の事を本気で心配していたからだ。
蜜子は店内で事情聴衆をされていて、警官は今は席を外していた。マイはキョロキョロと周りを見回し、蜜子に何が起きたのかを聞いた。
「うん！！　お客が店内でナイフを持って暴れててね！！　それをあそこの三人が撃退してくれたの！！」
「…？」

ファミレスの一番奥のテーブルを見ると、誰か三人座っていた。長い白髪の男に金髪の子供、そして頭に角が付いてるジャージの青年の三人だ。
「凄く強かったんだよ！！」
蜜子の方に顔を戻す。
…なんだかまた別の嫌な予感がする。というより寒気がする。そして、予感は的中した。
「そこの君、ちょっといい？」
マイの後ろから聞こえた。最初、警官が戻って来たのかと思ったが、そこにいたのは違う人間だった。

白い、異質な空気を漂わす男がそこにいた。

「えっ！？　いつの間に！？」
男は間違いなく奥のテーブルにいた白髪の男だった。五メートル程の距離を一瞬で移動して来たのか？
そして更に、白衣を着た男は聞き捨てならない事を言った。
「つかぬ事を聞くが、その腕輪は『天界』製？」
「っ！？」
マイは額から汗を垂らす。もしやと思い、一応聞いてみた。
「あの、…あなたのお父さんってもしかして」
「大神様〔オオカミサマ〕だよ？」
「やっぱりかッ！！」
このあっさり感、間違いなく親子である。
男はマイの体を上から下へと凝視し（いやらしい意味ではありません）、納得したように何度も頷いた。
「ほうほう…。って事はお前が『神様代行』か。オーイ！！　アラストル、貴乃華〔タカノハナ〕、『神様代行』見つけたぞ！！」
奥のテーブルの二人を呼び、気づいた二人はこっちに歩いて来た。
「おい神之上〔カミノジョウ〕、女じゃねえか。神様代行って…ほ

ら…筋肉隆々の覇気出しまくってる感じじゃないの？」
ジャージの青年は白い男、神之上にガッカリとした顔で聞いた。
「アラストルよお…そんなターミネーターみたいな奴いるわけねえだろ。親父がランダムで決めたって言ったっしょ？」
「だからてめぇはアラちゃんなんだよ♪　ん？　ほら、自分は筋肉大好き野郎って言ってみ♪？　おい♪」
「…貴乃華は殺す」
金髪の少年まで出て来た。マイは混乱し、このファミレスの内だけ外国になったように思えてきた。
「ねえ、この人達ってマイちゃんの知り合いだったの！？」
蜜子がマイに相変わらずでかい声で聞いた。
…捜してた神様の息子ですなんて、言えるわけない。
「…そ、そう！　知り合いだよ！　久々に会っちゃったなー。お話ししたいからちょっといい？」
慌てるマイに蜜子は笑顔で、
「いいよ！！　話しておいでな！！」
マイは三人を連れ、別の場所で話す事にした。
…それにしても、神様の息子は置いといて、変な名前の二人である。貴乃華なんて名前は何処かの元横綱を連想する名前だし、アラストルとは悪魔の名前である（これは何時の日かネコマタに聞いた）。一体この二人は何なのだろうか…？

―――――――――――――

ファミレスから離れ、ネコマタとよく会う雑居ビルの路地裏に三人を連れてきた。

「神様代行、ここで話すのか？」
神之上がぼやく。
「いいから！　…え～、アタシはあなたのお父さんからあなたを連れ戻せと言われました」
「……あのクソ親父め…、俺様を連れ戻すのに神様代行を差し向けたな…」
わずかに眉をひそめ、憎たらしそうに呟いた。
「なので、どうか天界にお戻りいただけないでしょうか？」
マイは使い慣れない敬語で、なるべく丁重に言った。が、
「断る。俺様は地上界でやる事があるからな」
神之上は断固拒否した。
マイはここで交渉を諦める事も出来るが、引き下がる訳には行かなかった。給料アップの為である。拒否されるのも想定内…。落ち着いて対応すればいい。
「…では、そのやる事をやれば戻ってもらえますか？」
そう、自分が解決してしまえばいいことなのだ。出来る事なら協力しよう。
「うむ、即座に戻ってやろう」
「でしたら、アタシがお手伝い致します。何をすればいいのですか？」

「世界征服」

「出来るかアアアアッ！！」
落ち着けるわけなかった。
対応出来るわけなかった。
子供の夢みたいな事を言い出してつい笑いそうになった。
「少年かっ！？　海賊王を夢見るような少年かっ！？　それがしたくて家出したの！？」
敬語を忘れ、乱暴に怒鳴った。

「そうだとも。本気で世界征服を目指してる。俺様なら可能だ！」
本当に少年のような輝いた目をして熱弁する。…頭のネジが飛んで粉砕してるのかとマイは疑った。
残りの二人はコイツをどう思っているのかと、黙ってるアラストルと貴乃華の方を見る。
「あんた達もなんか言いなって！　本気の目をしてるよコイツ…！」
すると、アラストルはキョトンとした顔で、
「…何でだ？　世界征服なんて楽勝だろ…？」
何の疑いも持たずに言った。
「……は？」
「それにな、俺は神之上側なんだよ。お前なんかに賛同しないし、神之上がやるってんなら協力するまでだ」
「ボクも同じだよ♪　神之上が壊せって言ったら壊すし、潰せって言ったら潰すもん♪♪」
…コイツら正気か？　だんだんこの三人が怖くなって来た。
「とにかく、俺様達は世界征服を達成するまで戻らない。…だが、その前にもう一つやらないといけない事がある」
「……？」
神之上はマイの目を見る。冷たく、貫くような、世界を俯瞰する神のような視線で。
「神様代行が後々邪魔になる。君、消えるか死ぬかしてくれ」
その言葉を聞き、マイは神之上が敵だと理解した。力ずくで天界に連れて行かねばならないと理解した。
「…世界征服は本気で、アンタがアタシの敵って事は分かったよ。…で？　アタシは消える気も死ぬ気もないけど？」
「なら殺すまでよ。…アラちゃんと貴ちゃんが」
「やっぱりか…」
「ワ〜イッ♪♪」
二人が前に出て来た。
「二対一はキツいだろうから、どっちと戦うか選べよ。スポーツマ

ンシップみたいなもんだ」
神之上は何もせず、偉そうに選択肢を迫った。
「…疲れてるから戦いたくない」
マイは昼間、暴走族を壊滅させてきたばかりだった。しかも何も食べてなく、相当疲労していた。
神之上は口元を吊り上げ、
「戦わないなら、俺様達は即座にテロを起こすが？」
…コイツらが何をするか分からない。戦うしかないようだ。
正直、金髪の…貴乃華とか言ったか？　この子とは戦いたくない。可愛すぎる。どストライクだ。となると…、
「…黒ジャージ、アンタだ」
アラストルを選んだ。
「……女とやってもなあ…。モチベーションが下がるぜ…」
が、本人はやる気がなさそうだった。一方貴乃華は、
「ねえねえ神之上♪？　ボクはどうするの♪？　暇だよ～★」
「う～ん…暇つぶしにビルでも壊すか！」
とんでもない事をしようとしてた。
「ちょ、待ってよ！　アタシが戦ってる間に何しようとしてんの！？」
「だって暇だしさあ。そっちに危害加えないから安心してよ」
まずい…。テロが起きようとしてる…。焦るその時、

「はい！　良いところでネコマタ参上！！」

バッ！と。空からネコマタ人間バージョンが降りてきた。
「ネコマタ！？　何処から！？」
「いきなりどっかに行くなよマイちゃん。って事で、そこの金髪小僧！！　俺が相手だぜ！！」
…いきなり来てカッコつけてもねえ…。
「ヤッター→　じゃあ向こうでやろ♪？」

「おう！　…ん？　向こう？」
「ドーン♪！」
ドーンッ！　と。腹を蹴られ、ネコマタは路地裏の奥へと吹き飛ぶ。
「じゃ、行ってきま～す♪！」
貴乃華は元気よくネコマタの元へ駆けて行った。…相手じゃなくてよかったかも。
「じゃ、俺様も行くわ。アラちゃん、後はシクヨロ」
更に、神之上も奥へ行ってしまった。そしてアラストルと二人きりになった。
「……」
「……」
何故か気まずい……。
しばらくして、アラストルがやる気のない目でマイを見た。
「…仕方ねえか。ほら、どっからでも来い」
アラストルは特に構えず、仁王立ちの状態で先手を譲る。
「……その剣は使わないの？」
アラストルのズボンにはチェーンとそして、二本の鞘に収まった剣が両脇に提げられていた。が、アラストルはそれを触れる事すらしない。
「ぁあ？　いいんだよ別に。本気出す必要も無いだろ？」
「……あっそ」
完全にナメられてる。
マイは右手を前に出し、手首の腕輪を剣へと変える。変幻自在、質量無視の剣、『メタモルフォーゼ』。
「へえ…、いい剣だな」
アラストルはマイの剣だけに感心した。
「じゃあ先手を打たせてもらうけどいい？」
メタモルフォーゼを両手で握り、腰の位置で構える。一方、アラストルはいまだ構えようとしない。

「はいはい、いいよ。とっとと――」
ビュンッ！と。アラストルの胸へ突きを繰り出す。
わずか一センチ、当たる寸前のそれを、
「危ねッ！！」
アラストルは身をよじって避け、マイを蹴り飛ばす事で回避した。
「ぐむっ！！」
地面を転がりながら即座に立ち上がったマイ。今度はメタモルフォーゼをアラストルに向け伸ばした。
弾丸の如く、メタモルフォーゼは一瞬にしてアラストルの鼻先まで迫る。だが、
「…ッ」
上体を反らし、前髪がわずかに斬れるだけで剣を避けた。
「…見えてる？」
アラストルの目は間違いなくメタモルフォーゼを捕らえ、ギリギリのようで確実に避けていた。反射的にではなく、自覚的に避けていた。
「……」
アラストルは斬られた前髪を触って、
「……いいねえ！　強いじゃん！」
顔が凶暴な笑顔に変わった。
「ハハハハ！　神様代行をナメてたみてえだな！　悪かった！」
そして、右手で左腰の柄を、左手で右腰の柄を掴み、ゆっくりとその細身の剣を引き抜く。
「現時点を持って、俺はお前を敵と認識する。名は何だ？」
「……高上　舞〔タカガミ　マイ〕」
「よし、俺はお前の名前を覚えた。…あーでもなあ……」
アラストルは左手の剣を引き抜くと共に、
「頑張ってくれねえと記憶に残んねえかもな？」

勢いよく前方へ投げ飛ばした。
「え！？」
剣は棒立ちのマイの脇を通り、そのまま後ろに飛んでいった。
「は、外し…」
「よそ見すんな」
マイが前に向き直ると、アラストルは右手の剣を突き出し、矛先をマイに向けていた。そして、剣先から青白い光が生まれる。
「『雷伝〔ライデン〕』」
瞬間、青い電撃が真っ直ぐに飛んだ。
雷のように眩しく光るそれはまさに電光石火。マイの目には突然光の線が現れたとしか思えなかった。が、
「っ！！」
嫌な予感がしていたマイは電撃が放たれる直前に横へ転がり、かろうじて直撃を免れていた。
「…避けれる！」
剣を構えなおし、反撃のために走り出す。二人の距離は差ほど離れていない。七、八歩ほどで接近できる。
「ハァアッッ！！」
メタモルフォーゼを振りかぶる。
だが、マイは気づかなかった。アラストルは少しも焦っていなかった事に。避けた電撃が投げた剣に当たり、バチバチと青白く光っている事に。
「油断すんなよ、高上ィッ！」
マイの後ろの剣から青白い電撃が放たれ、マイの背中に直撃した。
「ガッ！　、、アアッ！？　、、」
猛烈な熱さと痛み。血液が沸騰するような感覚と、筋肉が無理矢理に引き伸ばされるような感覚。眼球にも毛先にも爪にも、すべてに激痛を感じ、言葉にならない吐き気が襲う。マイはその場で倒れ、痙攣したように震える。
「……ゥ、…ゥアッ、、ッ…」

アラストルはマイを通り過ぎ、投げた剣を拾いあげ、
「全然ダメだな…。やっぱ名前忘れるかも」
呟いた。
「…ク、クソッ！」
マイはメタモルフォーゼを支えにして立ち上がり、アラストルを睨みつけた。
「……アンタ、能力者なの？」
電撃を喰らったマイはアラストルに言った。アラストルはそれを鼻で笑う。
「ちげーよ。俺の元々の力だ」
「そんな訳無い…！　人間の力じゃないでしょ！？」
異能力でなければなんだと言うのか。身体からあれ程の電撃を放出する人間なんて聞いたこともない。
「んなことどうでもいいだろ？　それよりほら、構えろ。神様代行がどれだけ強いかもっと見せろ」
アラストルは二本の剣を交差させ、その凶暴な笑顔を見せる。

「高上　舞、お前と戦って、俺はもっと強くなる。潔く俺の踏み台になりやがれッ！！」
「……なる訳無いじゃん。アンタ達のガキみたいな夢、アタシがぶっ壊すッ！！」
戦い、激化中。

第八話：VSソード？- 暑苦しい！動き回りすぎ！あとダサい！（後書き）

ネ：「ウルトラマ〇タロウが一番好き」

マ：「ウル〇ラマンメビウスが好き」

蜜：「ウルト〇マンマックスだな！！」

神：「パワード」

貴：「ティガ」

ア：「ゴモラだな」

第九話：VSソード？- 放火魔の素質があるようです（前書き）

マ：「今回はアタシとアラストルしか出てないね」

ア：「みたいだな…」

マ：「……あのさぁ」

ア：「ん？」

マ：「『マ』と『ア』の見分けがめんどくさい」

ア：「……じゃあお前今度から『高』に変更だな」

マ：「断るッ！！誰かが『高知』とか『高島屋』とか間違えるでしょが！！」

ア：「いやな……くはないのか？」

第九話：VSソード？- 放火魔の素質があるようです

道幅が広く、誰も住んでいない雑居ビルに取り囲まれた薄暗い路地裏。

いつもなら野良猫がのんびりゴミ漁りをしている空間に、青白い閃光が飛び交う。

「雷伝〔ライデン〕！　雷伝！　雷伝！！」

「クソッ、どんだけ撃つんだよ！」

神之上〔カミノジョウ〕に付き従うアラストルは、『神様代行』の高上　舞〔タカガミ　マイ〕と混戦中だった。

剣先からバチバチと電撃を放つアラストルは苛立ちながらマイに言う。

「どうした、神様代行の力はその程度か？　卍解とか仙術とか悪魔の実とか、何かねえのかよ。出し惜しみしてねえで、きっちりかっちり本気出せ！」

「…出してるっつの」

人が賑わう表通りに対し、危ない取引が頻繁に行われている路地裏にはほとんど人が来ない。剣を振ろうが電撃が飛ぼうが、誰も気付きはしない。

今、この路地裏から聞こえてくるのは黒ジャージの青年と女子高生の声のみだった。

「あ～…ダメだ。全然ダメだな。今朝の男の方がまだマシだった……ふあっ」

アクビをかくアラストル。反撃してこないマイに、段々と興味が薄れてきたようだ。

「む、むむッ！　だったら…！」

奥の手『アルティメイタ』なら、光弾と高速の斬撃なら少なくとも渡り合えるかもしれない。

だが、充電式のアルティメイタはエネルギーの消費が激しい。エ

ネルギーが切れれば腕輪に戻るため、なるべく節約して使わなければならない。
「まだ早いかっ…！」
アラストルの実力が計り知れないかぎり、まだ使う事は出来ない。だが、
「ぶつぶつ言うな。ハッキリと言いやがれ！！」
その余裕もない事も事実。アラストルは両足に力を入れ、細身の剣を両手に真横に弾けるように飛び出した。
「！？」
マイが気付いた時には既に、アラストルは目の前まで迫ってきていた。
「『メタモルフォーゼ・壁』！！」
マイは即座にメタモルフォーゼを縦にし、一枚の鉄板のように平たく引き伸ばす。ガインッ！　と。アラストルの剣は通らず、弾かれた。
「それがどおしたッ！！」
しかし、アラストルは止まらなかった。無理矢理に体勢を戻し、二本の剣の先端をメタモルフォーゼに当てる。まるで電極のように。
「『雷波〔ライハ〕』！」
メタモルフォーゼは一瞬の内に青白い電撃に包まれた。電撃はそのまま、剣を握りしめるマイにまで届く。
「うあッ、…ガッ、……！？」
苦痛に顔を歪ませ、ガクリと片膝をつく。メタモルフォーゼは元の形に戻り、マイは完全に無防備となった。
「はぁ……はぁ……。…何で、何で…こんな…」
アラストルという男は、あまりにも強かった。今まで戦ってきたどの能力者よりも遥かに…。力の差に絶望する程に…。
アラストルはマイに近寄り、見下ろす。
「…ダメだな。お前は強くない。剣の使い方もなってないし、腕力も脚力も俺より劣っている。…何より、お前には戦う意思がない」

「……それは」
頭を上げ、アラストルの目を見るマイ。アラストルは冷たい目をしていた。
「それは……当たり前でしょ！？　アタシはただアンタ達を捜して欲しいって言われただけ…」
「だから何だ！　お前はどうして剣を持っているのか分かってないから強くない。俺は世界征服と、世界最強のために剣を握ってる。マイ…お前はどうだ？　どうして剣を持つ？　どうして俺と戦う？
そこにてめぇの意思はあんのか？」
「……」
そんなもの、あるわけ無かった…と言うより、無いに等しかった。マイは神様代行のバイト代を貰うだけの為に戦ってきた。大きな野望の為でも、知人や見ず知らずの他人の為でもない。ただ、お金の為に、そのちっぽけな理由の為に戦ってきた。
「……アタシには…覚悟が…」
神様代行の力があったからこそ、これまで戦い続ける事が出来た。だが、その力が通用しないなら、マイはただの女子高生でしかなくなるのだ。
アラストルは呆れ果て、マイに背を向けて歩き始めた。
「…さっさと帰れ。怪我するだけだぞ」
振り返りもせず、アラストルは言った。
「……ぁ」
そして、膝を着いたままのマイはそんなアラストルの背中に、
「アルティメイタ、光弾発射」
《了解》
刀の先から撃ちだした光弾をクリーンヒットさせた。
「ぶッベルァラッッッ！！？」

口から血と肺の中の空気を吐き出し、剣を握ったまま身体をのけ反らせて三メートル程先まで吹き飛んだ。ビタンッ、と。俯せに倒れ、背中からプスプスと煙りが立つ。
それを確認したマイはよっこらしょと　立ち上がる。
「…よし、まだ生きてるな。二発目準備」
《既ニ出来テマス！》
「流石だね」
「待てやゴラアアアアァッ！！」
頭だけ起こしたアラストルが歯を剥き出しにして叫んだ。
「ざっけんなあぁ！！　げほっ…てめぇ！　ふ、不意打ちとか…ありえねえだろ！！」
「黙らっしゃい。敵に背を向けるアンタが悪い」
マイはもう一つの武器の刀、『アルティメイタ』を肩に担ぎ、さっきまでのダメージが無かったかのように振る舞う。
「だいたい…、戦う意思だあぁあ？　そんな恥ずかしいセリフをよく言えるねえ。そんなもん、言われなくても見つけるっての」
「う、うるせえ！　実際さっきまで負けてたくせによお！！」
「あれは手加減したの！　朝から疲れてたの！」
「じゃあ何だよさっきの攻撃！　背骨バイーンッ！　てなったぞ」
「背骨からそんな音出ねえよ！　それはほら、アンタが出せって言ってたアタシの本気だよ」
「あれが！？　もっと早く出せよ！　お前ボロボロじゃねえか！」
「だ～か～ら～！　疲れてたから使いたくなかったの！！　扱いが難しいの！！」
「どっちにしろ俺には通用しねえから！！」
「関係ないね！　通用しないなら通用するまでやるだけだね！！」
二人は戦闘中だと言う事を忘れ、ギャーギャーと兄弟喧嘩のような言い合いが路地裏で続いた。
そして、一通り言い終えるとアラストルはゆっくり立ち上がり、グーッと背伸びをする。

「ふん！　まあいい…、やっと本気を出す気になったのか。今度は逃げんなよ！」
剣を構え直し、顔がまた笑顔に戻る。そんなやる気ＭＡＸのアラストルに対してマイは、
「発射」
問答無用で光弾を前に打ち出した。
「だから聞けって！！」
一直線に飛んで来る光弾を、アラストルは上体をわずかに左へ傾け避ける。
それが合図のように、アラストルはマイに向かって走り出した。マイに負けず劣らずの速さで一気に接近する。
「斬撃で出血多量か電撃で感電死か選べよ！！」
「…どっちも嫌だ！！」
マイはアラストルの頭目掛けて刀を振り下ろす。迷わず切り掛からねば隙を突かれるのは確実だった。
だが、本気の攻撃にも関わらず、アラストルはそれすら当たるすれすれで左へ避ける。更に、そのまま二本の剣で突きを放った。
「うわっ！」
地面を蹴り、バックステップで刺さる寸前に逃げる。
「待てよ！」
が、アラストルはマイに密着するようにまたも接近して突きを放ち続ける。その度にマイは後ろへ跳び続けた。
それでもアラストルはしつこく、まるで二人は紐で繋がっているように間の距離がまったく拡がらなかった。
「どうしたよ！　壁にぶつかるまで逃げるつもりか！？」
「…調子のんなっての。アルティメイタ！　何でもいいから攻撃！！」
《了解！　火炎放射準備！》
「そんなのあるの！？」
《私ニ不可能ハアリマセン！　一切ヲ灰ト化ス威力デス！　前ニ私

ヲ突キ出セバ発射シマス！》
アルティメイタの尖端からライターのような小さな火種が出る。
「おいおい！　こんな路地裏でやったらヤバいんじゃねえか！？」
足を止めて大火事を心配するアラストル。が、
「よし、火炎放射レッツゴー」
マイは放火魔の素質があるようです。
刀身を前に向けると、ゴウッ！！　と。アルティメイタの尖端から炎の渦が生まれ、一瞬にして路地裏は火の海に変わった。
コンクリートはジリジリと音を立て、ポリバケツは中身ごと燃え、路地裏の酸素は急激に消耗する。
「……流石にやり過ぎたね」
《…流石ニ出シ過ギマシタ》
まさに地獄絵図。
例えどれ程の力を持っていても、この火の海の中では無事ではない。少なくとも、酸欠で窒息はしているはずだ。
「殺しちゃったかな…？　どうしよ、アタシこの歳で殺人犯だ…」
頭を抱えて悔やむマイだった。
「勝手に殺すなよ」
その時、不意に火の中から声がした。
「！？」
声がした火の海に目を向け、その光景に驚くマイ。
そこには、火の海が真ん中から二手に別れ、その中心に平然と仁王立ちしているアラストルがいた。
「聞いた話だと、昔モーゼとか何とかって人が海を真っ二つにして道を作ったとか言ってたが…俺も似たような事が出来たな。一振りで十分だった」
アラストルはその手に持つ剣の風圧で火を吹き飛ばし、真ん中に安全地帯を作り出していたのだ。
「お前には出来るか？　神様代行…」
「……さあ？」

火は建物の壁に張り付くように燃え盛り、猛烈な熱さが路地裏を取り巻く。これ程まで火が大きければ流石に誰かが気づき、消防車を呼ぶだろう。
「見つかるのはヤバいなぁ…。じゃあそろそろ、もうそろそろ終わろうか？」
そう言って、汗一つかいてないアラストルは左手の剣を斜め上へと投げ上げた。
「！？」
警戒し、一歩後ろに後退するマイ。上空の剣とアラストルを交互に見る。
そして、上空の剣が調度マイの頭上に来た時、剣は空に突き刺さったように急に静止した。
「なッ！？」
何時までも落下して来ないの剣をいぶかしげに見るマイ。
「じゃあな、高上　舞。お前はなかなか良い踏み台になったぞ」
その時マイは、完全にアラストルがノーマークだった事に気づいた。
「しまっ…！」
既に遅い。
アラストルの右手の剣から青白い光りが灯り、空に突き刺さるもう一つの剣にその光りを向ける。
「『電雷雨〔デンライウ〕』！！」
光りは鋭く空を走る電撃となり、上空の剣に当たった。バチバチッ！　と。剣は青白い電気が取り巻き、そして、
バゴオオォッッ！！
マイを取り囲むように空から電撃が降り注いだ。地面は爆ぜ、壁

は崩れ、轟音が鳴り響く。そして、巨大な雷の柱が生まれた。
「ハハハハッ！　悪いな！　バッチリ素敵に決まっちまった！」
しばらくして、雷がおさまり、焦げ臭い煙りが路地裏に立ち込めた。
「…ハァ。こんなもんかな…」
剣を下ろし、アラストルの頭に付いている飾りのような角からパチッ、と電流が流れた。すると、空中の剣が支えを無くしたように落下し始める。
「さて、神之上の所に行かねえと…」
そして、剣は地面に深く突き刺さ

ガキンッ！！

る直前に蹴り飛ばされ、アラストルの角に向かって飛んできた。
「何ぃッッ！？」
アラストルの左角が直撃し、バラバラに砕け散る。血は出ないがその代わり、バチバチと電流が角から漏れていた。
「ヤバい、ヤバい！　電流が制御出来な…！」

「よそ見すんなよ」

「！？」
続けざまに、煙りの中から一発の光弾が飛んできた。アラストルは避けきる事が出来ずに左肩に当たり、そこに小さな爆発が起きた。
「ゴッ！？　、、ガハァ！！　、。…！！」
左肩から地面に崩れ落ち、肩を抑えて痛みに耐える。そして、苦痛の表情で砂煙りの中を凝視し、一つの人影を見つけた。
「な…！　何、、が！！　…クソッ！　何で…無事なんだよ、高上いいぃ！！」
煙りの中に、刀と剣を両手に持つマイがいた。

「……アンタが電撃を剣に流すのをアタシもやったの。平たい長方形の形にメタモルフォーゼを変えて、それをアタシよりずっと後ろの壁に突き刺して電撃を後方に反らしたって訳。お前には出来るか？　アラちゃん？」
「グッ…！　二本同時に使えたのか…」
右手に刀〔アルティメイタ〕。左手に剣〔メタモルフォーゼ〕を持つマイ。今まで同時に使わなかった理由はもちろん、
「疲れるから嫌なんだよねー。刀のエネルギー残量を気にしながら剣の形状のイメージなんて、しんどいしんどい」
と言っても、端から見れば使いこなしているようにしか見えないのだが…。
「…やるじゃねえかよ。完全に油断してた…」
肩を押さえながら起き上がり、あぐらをかくアラストル。そんなアラストルへマイはゆっくりと歩み寄る。
「これ以上光弾受けたくなかったら、世界征服を止めろ。だいたい、アンタとあの神之上とか言う奴と何の関係が

ガキッ

ある……ん？　何か踏んだ？」
足の裏から金属のような固い音がした。マイが足を退けると、
「……なんだ、歯車か」
手の平サイズの赤く色が塗られた歯車が落ちていた。
特に気にする事ではなかったが、マイは何と無く手に取ってみる。
「…赤い…熱い」
歯車に塗られた赤いそれはまだ乾いておらず、温かいというよりかなり熱かった。まるで…
体の中から出て来たように。

マイは茫然と歯車を手に取ったまま、ゆっくり頭だけを動かしてアラストルの左肩を目を凝らして見た。
爆発したアラストルの左肩のジャージは焦げ、開いた穴から傷口が見える。
ゴムのような皮膚が剥がれ、
オイルのような血が滲み、
ワイヤーのような肉がちぎれ、
そして、

カチカチカチカチ…と。歯車同士が噛み合ってクルクルと動いていた。

「……ロ、…ボット？」
マイは開いた口が塞がらなかった。さっきまで戦っていた男が、人でも悪魔でもなかった事に驚愕していた。
「…ロボットって言えばそうかもな」
アラストルは大した事ではないように平然と肯定する。
「…ッ、あ～ぁあ、部品が足りねえよ…。お、これはまだ使えそう」
アラストルは自分の近くに落ちていた別の歯車を見つけ、それを拾い、左肩の中へ無理矢理に押し込み始める。
「いっててて…」
指でニチャニチャと音を立てて傷をこじ開け、ちぎれた肉をほじくり返す。その間血は止まらずにジャージへ拡がり、指を入れる度にビュウッと吹き出した。
「ん、んん、…よし」
しばらくして、カチリッ、と。歯車がはまる音がした。
「ふう…。まあこんなもんか」
左手を動かし、正常だと確認して立ち上がる。
「待たせた。じゃあ……あれ？　どうした？顔色悪いぞ」
「…ア、…アンタ、何なの！？」

あまりに急展開過ぎて混乱するマイ。それを横目にアラストルは落ちた剣を拾う。
「…ああ、だから、ロボット的な何かだよ。ん？　その前に神之上と俺の関係だっけ？」
拾った剣を鞘に納めながら言った。
「まあ的確に言えば、神之上は俺の製作者、親父みたいなもんだ」
「……エッ！？」
戦い、急展開。

第九話：ＶＳソード？－放火魔の素質があるようです（後書き）

マ：「ロボット三原則って何？」

ア：「押さない、駆けない、喋らない」

第十話：VSソード？- 卑怯な手を使わせてもらう（前書き）

ネ：「更新が遅いよッッ！！！」

マ：「忙しかったらしいね。本当にすいませんでした」

ア：「しかも文章力は時間かけたにも関わらずそれ程変化してないしな」

ネ：「もっと頑張れ」

第十話：VSソード？- 卑怯な手を使わせてもらう

神之上〔カミノジョウ〕について、アラストル、貴乃華〔タカノハナ〕との関係も含めてざっくりと説明。

天界には奇跡を起こす技術、つまり『魔法』とか『魔術』とかいう概念が確かに存在した。天界人はその技術で発展し、誇るべき技術として当たり前のように使ってきた。

しかし、神之上はただ一人、子供の時から今日日までずっと『魔法』『魔術』といった物が相当に嫌いだった。

ただ、実際に嫌いだったのは魔法によって得られる結果ではなくその『魔法』という単語。そこに努力の意味合いを感じられないからしい。神之上は地道な努力が好きだった。

周りの反対を無視して魔法を遠ざけ続けていたある日、神之上は地上界の機械技術を知り、興味を持った。それは、たったの十歳の時。

その時からだった。魔法には目もくれずに朝も、昼も、夜も、自ら進んで機械の構造をひたすらに学ぶ日々が続いたのは。

勿論、父親である大神様〔オオカミサマ〕は反対した。が、溺愛する一人息子に対し、強く言い付ける事が出来なかったのだ。

そしてついに、神之上は地上界の技術で天界の技術を越えられる事に気づいた。元々ずば抜けた自分の知識力により、科学を魔法の領域まで至らせる事が可能だと気がついた。

まず手始めに、神様が奇跡の力で生物を作ったのと同じように、機械の力で神之上は生物に見える“何か”を作り出した。

それが、アラストルと貴乃華〔タカノハナ〕だった。

神之上は二人の創造主であり名付け親。
アラストルと貴乃華は神之上の研究の産物であり息子。
これが、三人の不思議な関係である。

——

「…ホントに…ロボット？…生きてないの？」
アラストルの機械の体を目の当たりにしたが、マイは今だに信じきれずにそう言った。
「まあ、人造人間って方が合ってるかな…。あと俺は生きてる。ちゃんと生きてる」
問い掛けに答える機械の体の青年。その言葉を聞く人はマイ以外誰もいなかった。
「視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、加えて第六感。喜怒哀楽の人間が持つ当たり前の感情。欲望。更には食事も可能。自己判断も可能。怪我の自然治癒も可能。…ここまで来たら生きてる人間と変わらないだろ？」
青年は人間として存在する為の物をすべて持つと、少し自嘲気味に言う。
言葉は薄暗い路地裏にわずかに反響し、ビルの間から見える曇り空へと消えた。
「……その証拠は？　人間である…証拠は…？」
マイはアラストルを睨みつける。

「今見た俺の身体が証拠だろ。それに、お前との戦闘を望んだのは俺自身の考えだ。プログラムの感情だったら俺はとっくにお前を殺してると思うぞ？」
アラストルの行動や言動はプログラムによるものではなく、自身の意思、そして感情によるもの。戦いたいという感情があるからこそ、戦いを純粋に望んだ。
だからこそ、世界征服の邪魔者とわざわざ一対一で争ったのだ。
「さてと、話が長かったかな？　…マイ、そろそろ決着にしようぜ？」
話を切り上げ、アラストルは傷口を押さえる手を離す。細身の剣二本の内の一本を両手で握って顔の横の位置で構えた。
「片角が壊れただけで電流が使えないと思うなよ！」
…オシャレとか飾りとかじゃなかったのか？　とマイは思ったが取りあえず言わないでおく。
構えた一本の剣はバチバチと荒々しく音が鳴り始め、青白い電流が取り巻き始める。
「もう出し惜しみは止めだ！　全力でお前を斬る！！」
今までの比ではない量の電流があちこちに飛び交い、壁や地面に当たって火花を散らす。
間違いなく本気の攻撃だと肌で感じ取り、マイも腰の位置に刀を構える。その時、先程までの動揺は緊迫した空気によって消えてしまっていた。
そんなマイの構えを見たアラストルはまた凶暴な笑顔をうかべ、
「…『雷帝十刀〔ライテイジュットウ〕』。これが俺の必殺技だ。必ず、殺す、技だ！」
と、豪語する。余程自信があるのか…なんにせよ、最大の攻撃を仕掛けると自分から宣言した。つまり、この一撃で終わらせるという意味だ。
「もう逃げられない！　もう助からない！　この一撃で決着だッ！！」

「……アルティメイタ」
マイはその一撃に応えるべく、こちらも最大の技を宣言する。
「『一段解放』！！」
《了解！》
返事を返すと、アルティメイタから蒸気が発せられ、心臓の鼓動のような振動動を始める。だが、そんなアルティメイタの様子にアラストルは驚きもしなかった。むしろ不思議がっているような顔だ。
「『一段解放』？　その口ぶりだと、二段三段があるみてえに聞こえるんだが…。それが切り札か？」
構えたままのアラストルは首を傾げ、
「いや、今のアタシの力で出せる限界が『一段解放』なの。…あ、心配しなくても大丈夫だよ？　アンタを倒すくらいの力は十分あるし、アタシはこの一撃に全力を懸ける。…本気で」
柄を握りしめ、臨戦体勢をとる。
二人は互いに睨み合い、しかしその目には殺意とは別の感情を込めていた。
例えるなら…いやまさに、互いに認め合う宿敵と対峙するような感情。敵意とも友情とも違う曖昧な気持ちが二人の間にあった。
「……ハハ。嬉しいなあ、おい。…けど悪いな、俺は少し…」
バリバリと電流が飛び交う中、アラストルの笑顔はわずかに薄れていた。
「卑怯な手を使わせてもらう」
「…ッ！？」
瞬間、マイは自分の意思に反して片膝をついた。
「なッ！？　…なん……、、じゃこ…りゃ。、。…？　気持ち悪…、…」

まるで引っ張られるように体がふらつき、とてもじゃないが立てない。耳にピリピリと違和感を感じながらマイは揺れた。
「俺が無駄に電流をあちこち飛ばしてると思ってたか？」
「え…？」
先ほどからアラストルの剣から出ている青白い電流を見る。壁や地面に当たり、火花が出ていた。
「『雷酔〔ライスイ〕』。電撃を耳の中に伝え、耳石と三半規管に刺激を与えて平行感覚を狂わす技だ…。このダメージだと余裕が無いんでな、使わせてもらったぞ」
「そ…んな…！」
出し続けているこの電流はただの必殺技の演出ではなかく、脳への攻撃だったのか…。
既にマイは足がおぼつかず、完全に術中にはまってしまっている。避ける事も反撃も出来ない。ただ必殺の一撃が放たれるのを待つのみだ。
「ッ…！　あれだけ真剣勝負だったのに！　…そんな勝ち方でいいの！？」
不意打ちに納得せず、刀で体を支えながら叫ぶマイ。そしてアラストルは、
「…いいこたあねえだろ。けどな、負ける訳にもいかねえんだよ…」
顔をしかめ、悔しそうに言った。
「……ぁあ？」
「俺はアイツの…神之上の計画の為にも戦ってるんだよ。アイツに造られた以上は…魔法を、天界を、すべてを否定しちまったアイツを支えなきゃいけねえんだ」
「それは……」
「ここで俺が負けたら、お前は世界征服を止めに行くだろ？　アイツの夢を壊しに行くだろ？」
「当たり前でしょ！？　わがまま言って世界征服だなんて冗談じゃない！」

「…天界の既成概念を受け入れられないアイツには、この野望しかねえんだ…。自分を肯定する手段がこれしかなかったんだよ…！神之上の望みは、俺の望みだッ！」
「……」
マイにはアラストルの心境が分からない。それは、神之上とアラストル、創造主と創造物の関係だから分かる物だからかもしれない…。
「だからマイ。悪いが…死んでくれ…」　戦いの当初の目的を忘れそう言うと、アラストルの剣に取り巻く電流が形作り始めた。
電流の束が九つ、それぞれが鋭利な剣の形で固定され、アラストルが握る剣から放射状に拡がり、間隔を空けて浮く。
電撃の剣の動きは握っている剣と連動し、計十本の剣となった。
「今度こそ…『雷帝十刀』だ！」
「……ッ！！」
耳が痛くなる程にバチバチと音を立てる電撃の剣。
見ただけで分かる…。あれに触れれば感電だけでは済まされない。一瞬ですべての細胞が焼け焦げ、身体がまるごと消し炭と化すのは目に見えていた。
だが、今のマイにはそれを避ける事すら許されない。アラストルが近づくのを、膝をつきながら見ているしか出来なかった。
「…およそ、雷の放電量は数十万A、電圧は十億V、電力換算で平均九百GW、エネルギー換算で九百MJ…。俺の体に溜め込んでいる電気はそれの十倍だ。一度に喰らえば即死だろうな…」
『雷帝十刀』はアラストルが溜め込んだ電気をすべて解放し、なおかつ剣の形に押し固めて放つ必殺の一撃…いや、必殺の十撃。
痛みを感じる事なく、涙を流す事なく、後悔する事なく、速やかに、かつ迅速に電撃によって焼かれるだろう。
「…何で…そんな事が……？」
マイはふらつく体でそう聞いた。
「俺はただの人造人間って訳じゃない。『擬似・神の鉄槌〔トール

ハンマーレプリカ〕』っていう神之上お手製の装置が組み込まれてるんだよ」
「トール……？」
「まあ、説明した所で理解出来るわけないか。ようは天界の兵器の模造品と思えばいい」
そう答えて、アラストルは頭の横で構えたまま少し近づいた。
少し離れた位置で立ち止まり、アラストルはマイの胴体に狙いをさだめる。
「……行くぞッ！！」
剣を強く握りしめると、それに合わせて電撃の剣の青白い光りが強まる。
そして、剣を振り下ろそうとしたその時、
「……ウン？」
アラストルは不意に、何かを思い出した。
（さっきもこんなふうに油断してやられてなかったっけ？）
「……アルティメイタ」
アラストルが俯くマイの顔を見ると、そこにはギラギラと闘志が燃えている目があった。
「GO！！」
「！？　…上か！」
ビルの隙間の曇り空へと見上げる。
一本の刀が刀身をアラストルに向けて高速で落ちて…いや、飛来して来ていた。
アルティメイタの柄からは一対の白い翼のような帯が広げられ、

ミサイルの如く空気の層を突き破りながら一直線に飛んで来る。
「チッ……ハアッ！！」
アラストルはすぐさま『雷帝十刀』の対象をマイから空のアルティメイタに変え、上に向けて剣を振った。
バチバチッ！！　と。九本の電撃の剣が飛び出し、アルティメイタを上下左右全方向から囲むようにぶつかった。
バジバジバジバジッッ！！！
激しく電流が飛び散り、電撃の剣が消え去った。そこには先程よりも速度が落ちたアルティメイタがあった。
「ゥウルアアァアアッ！！」
電流を纏った剣で頭上に落下してきたアルティメイタへと追撃する。
ガキンッ！　という金属音と共にアルティメイタは弾かれ、アラストルの足元に落ち、そして、
「油断した所に追撃だろ！？　神様代行オオッ！！」
アラストルはマイの動きを止める為に広範囲に電流を流す。バリバリと光る閃光が路地裏に走り、豪雨のようにマイを襲った。
「だったら何だコラアアァッッ！！」
だが、マイは電流に臆す事なく真っ直ぐ突き進む。
豪雨のように展開される電撃を避け、ただひたすらにがむしゃらに突っ込んだ。
「望み！？　肯定する手段！？　そんなのを手伝う暇あるなら、もっと良い解決方法、一緒に考えてやれよこのバカアアアアアアアアアアァァッッ！！！！」
「ウオオッ！？」
お互いが剣のとどく範囲に入った瞬間、マイの振り下ろす剣とアラストルの斬り上げる剣、同時に斬撃を放った！
ガギンッ！！　と互いの剣が激突し合って巨大な衝撃波が生まれた。衝撃は砂埃を立たせ、路地裏の空気と二人の身体を引き裂こうと言わんばかりに激しく震わす！

剣と刀が弾き合い、わずかにマイが後退したがそれでもマイは前に出る。アラストルも同じく踏み出し、数十センチという距離で連続で斬り合いを始めた。
右からの斬撃を受け止め、すぐさま下段からの斬撃を受け流す。
胴体を狙うが弾かれ、鋭い突きは避けられる。
振り下ろす刀は斬り上げる剣に阻まれ、代わりに地面や壁に斬撃の跡を残す。
「ハハッ！　…まだ負けてねえぞ！！」
「ハッ…ハッ…、この！」
マイは勘違いをしていた…。アラストルの剣は電撃を放つ為の銃身の役割のみだけだと思っていた。しかし、構え方がなっていないと言っていただけの事はある。やはり剣の扱い方はマイより遥かに上だった。無駄がなく、滑らかで、力強い剣捌き。
「ハハハハッ！　このままお互いに斬り続けてりゃ、俺の勝ちだな！」
「…言ってれば？　アタシはまだ余裕だけど？」
ただの強がり。だが、耐え続ければ反撃のチャンスは必ず巡ってくるはずだ。それまでは…

カチャッ

「え？　うわっ！？」
何かを踏んだ。
必然、マイはバランスを崩してしまい、動きが止まってしまった。
「そこだッ！！」
アラストルはその隙を逃す訳もなく、畳み掛けるように剣を叩き付けた！
そして、

マイの刀が弾かれる。

「しまっ！」

「もらったあッ！！」

そのまま、マイの身体を縦に切り裂くように剣を振り下ろす。

しかし、

「もらってねえええぇッッ！！！」

斬られる直前、しゃがみ込んだマイは先程踏んだ足元の“何か”を素早く拾い上げた。

それは、ついさっきアラストルが弾き落とした万能の刀、アルティメイタだった。

アラストルの剣を避け、マイは刀身の刃尖を突き上げる。

互いの体が交差する。

そして、

「なッ！！？」

「光弾発射ァッ！！」

真下からアラストルへ光弾を撃ち出す！

アラストルの胸に当たった光弾は小さく炸裂し、路地裏が一瞬光

りに満ちた。
爆風で浮いたアラストルの全身からはバギッ！　ガギッ！　ミジッ！　ブヂッ！　と、歯車やワイヤーが破壊される音が鳴った。
「ガアァッ！！」
短く息を吐きながらマイにつかみ掛かろうと手を伸ばしたが、そのままふらつき、吐血したアラストルはガシャリッと剣を落とした。
「ゴォッ、、ク……ソぅ！　。、まだ…、何も、、まだ…！　、強くゥッ！！！　……かっ」

そして、事切れたかのように仰向けに倒れた。

「…はぁ…はぁ…。アタシは十分強いと思うけどね…。…あれ？勝った？」
マイはアルティメイタを腕輪に戻し、その場で腰を下ろした。ゆっくり呼吸し息を整え、そしてやっと自分が勝った事を理解する。
「あはは…、やる時はやるなアタシ…」
ハァ…、と。力を抜いたマイは、一応アラストルの様子を確認する。
ピクリとも動かないが微かな呼吸と歯車の音が聞こえる。死んではいないようだ。
「人造人間には見えんなあ…うん」
（やっぱり信じ切れない。呼吸してるし血ぃ出てるし…。どっちかっていうとサイボーグ？　てか人造人間と同じ意味か？）
「う～ん。あ、そろそろ人来るかな？」
火が上がるわ電撃飛ばすわ壁破壊するは衝撃波出すわ…。これだけ暴れればとっくに警察呼ばれてるだろう。
「…運ぶか」
アラストルを倒れたままにしとく訳にもいかず、一緒にこの場を離れる事にした。
アラストルを背負い、ゆっくり歩き出す。

「お…重ッ！」
強化されたマイでさえ機械の体の人造人間は予想以上に重く感じた。この重さでどうやって動いていたのだろう？
「……」
人造人間。
こんなとんでもない力を持つ人間を生み出せる神之上は世界征服を計画している。もし人造人間を量産したら…、
「本格的にマズイよね」
とにかく、アラストルが起きたら神之上の居場所を吐かせてそれから
「…あれ？　もう一人は何処だ？」
たしか神之上にはアラストルともう一人、貴乃華という子供が一緒にいたはずだが…、と。ぼんやりと考えるマイ。
そして、すぐに思い出した。
「あ、ネコマタの所だった」

―――――――――――――――――――――

「ふざけんな！！　こんな所で戦えるわけないだろ！！」
「大丈～夫♪　神之上が人が来ないようにしてくれてるもん☆」
人の姿に化けた黒猫妖怪ネコマタは走っていた。後ろから迫る、可愛らしい男の子から逃げるために。
「クソッ、クソッ！　ちゃんと考えて逃げればよかった…！」
今二人が居るのは地上ではなく地下。いつもなら忙しなく歩く人々が沢山いるはずのこの地下鉄に、何故か今は二人以外誰もいなか

った。「ねーねー、逃げてないで勝負しようよ♪　ねーってばあ♪♪！」

貴乃華はネコマタをピョンピョン跳びはねながら追い掛ける。

スキップする度に足元の床が砕け、それどころか地面に壁に天井に上に下に左に右に縦横無尽に、スーパーボールのように跳びはねる。

「おかしいだろあれ！　あんな動きする人間見たことねえって！」

「ふっふっふぅっ♪　人造人間のボクは超強いのさ～♪　ピョインっと☆！」

貴乃華は一気に加速してネコマタを飛び越し、行く先を阻むように立ち塞がった。

「そんな訳で♪　君の相手はこのボク、神之上の“最高傑作”貴乃華だよ♪　一分一秒一刹那でも長く戦おうね☆！」

「……へいへい。だったらこのネコマタ様の妖術に、一分一秒一刹那でも長く耐えてみろやッ！！」

勝負、開始。

第十話：VSソード？- 卑怯な手を使わせてもらう（後書き）

貴：「o（、▽、）o」

ネ：「（「∀'）」

マ：「（;、皿、）」

ネ：「（。□。;）」

マ：「（≧≦∇≦≧）殺」

ネ：「ε＝┐（ ・ ―・）┌」

第十一話：VSデストロイ？- 得点は『10．0点』（前書き）

ネ：「……魔女っこ」

マ：「？」

ネ：「『神様代行』という名の魔女っこが剣と刀というステッキを握りネコマタというマスコットキャラと共に敵を倒す」

マ：「……」

ネ：「……」

マ：「……」

ネ：「どうした笑えよ」

マ：「笑えねえ……」

第十一話：ＶＳデストロイ？ - 得点は『１０．０点』

笑って生きて

笑顔で死にたい

――

縦浅町（タテアザチョウ）駅。この街のデパートに直接繋がっている地下鉄である。

婦人服屋に靴屋に本屋、スポーツ用品店にペット用品店、レストランにカフェテリアなどが充実している駅で、昼は地下鉄に乗る以外の目的でも人通りが激しいのが常のはずだが、今はたった二人しか居なかった。

「やっぱしムリイイイィッ！！　あんな奴と戦えるかよッ！！」

「鬼ごっこ飽〜き〜た〜♭　逃げないでよお★！」

二人は誰も居ない地下の商店街で追いかけっこをしていた。

追いかけられている男の名前はネコマタ。チャラチャラした若い男だが、その正体は人に化けた黒猫の妖怪。

追っている子供の名前は貴乃華（タカノハナ）。小学生並の小さな身長に何故かタキシード姿の男の子。そして人造人間。

貴乃華は可愛らしい笑顔でネコマタを追いかける。その顔だけ見

ればとてもほほえましい光景なのだろうが、
「足が疲れた…←　ここ足場が悪い～←←」
ドゴッ！ドゴッ！と、大理石を砕きながら跳びはねる姿はとてもじゃないが笑えなかった。
「自分で足場悪くしてんだろが！　クソッ、どうすりゃ良いんだよ…！」
―だいたい、何で誰も居ないんだ？これじゃあ助けも何も呼べないじゃないか！
「…神之上〔カミノジョウ〕って奴が何かしたか…」
―貴乃華は神之上が人避けをしていると言っていたが、実際に何をした？立入禁止の立て看板でも置いたのか？まさか魔術の類い…
「バッコーン♪♪！」
思考を巡らしていたネコマタの背中に猛烈な衝撃が襲った！
「ギャッ！！？」
貴乃華がネコマタに跳び蹴りを食らわしたのだ。
ミシッ！とネコマタの身体が海老反り、背骨が砕けるどころか内臓全てがメチャクチャに潰された。
石が水面の上を低く跳ねるように、ネコマタも四回五回と地面を跳ねて吹き飛んだ。
「あれれ♪？　思ってたより軽かった♪　…ヨッと☆！」
跳び蹴りの後空中でクルリと一回転し、見事に着地する。
得点は『１０．０点』だろうか？
「あ～ぁあ、ボクの勝ちかぁ…←　つまんないな～←」
貴乃華は憂鬱そうに言った。
地面を砕くスキップをしながら、貴乃華は倒れたまま動かないネコマタに近づく。その顔からは、可愛いらしい笑顔が絶え間無く出続けていた。
ドスドス大きな音を踏み鳴らして近づく貴乃華に対しネコマタは、
「……」
やはり動かなかった。

「ふんふ～んふー……ん★？」
貴乃華はネコマタに鼻歌混じりで近づいていたが、突然口をへの字に曲げて足を止めた。
「…中身がない☆！？」
そこには上着とアクセサリーのみがバラバラに落ちているだけで、ネコマタ自身は消えていた。
確かに、貴乃華はネコマタの身体が軽すぎるとは感じていたがしかし、蹴り飛ばした時はまだいたはずなのに…。
「…逃げたのかな★？」

「確かに逃げとけば良かったな！？」

声は貴乃華のずっと後ろからだった。
「ふおっ★！？」
振り返った貴乃華がまず目にしたのは迫り来る火球。酸素を急激に消耗し、熱気と共に真っ直ぐ飛ぶ。
「え★？」
「『妖術・空蝉』ア～ンド『四連火球』。どうやって移動したか説明は省略！」
ゴウッ！！と燃え上がる火球の数は四発。目の前の一発目の火球に隠れるように連なって飛ぶ。
速度はそれ程速くはない。一般人が全力疾走した平均の速度と同等かそれ以下だ。だが問題は、火球の通路を埋め尽くす程のその巨大さ。そして、左右の革靴屋と婦人服屋の窓ガラスを全て割り、万物を燃やし尽くす膨大な熱量。つまり、
「逃げ道は後ろしかないってことだ。お分かり？」
五十メートル程間隔を空けて勝利を確信するTシャツ姿のネコマタ人型バージョン。
もう五発くらい撃とうかと大きく息を吸

「そいっ♪」
う前に、気の抜けた掛け声がした。
瞬間、突風が通路に吹き荒れた。
「な、何だ！？」
前方から後方へ、ネコマタを吹き飛ばさんとするかのように強烈な向かい風が吹く。
いや、生まれたのだ。
「ブーン♪」
今まさに突風が目の前で生み出されている。
貴乃華の『連続後ろ回し蹴り』。
時計回りにクルクルクルクルくるくるくるくる、独楽のように狂い回る。ビユンビユン！！と何度も空気を引き裂き、通路も店内もそして、火球もメチャクチャに掻き回す。
「…ヤバい…ヤバいヤバいッ！」
焦るネコマタ。だが遅い。
一発目の火球が球の形状から崩れ、続けて二発目、三発目、最後に四発目。
蹴りの風圧だけであっという間に打ち消し去った。
一体どれ程の脚力を持っているのか。あの回転数もさることながら、巨大な火の玉を消せる蹴りなんて前代未聞空前絶後、異常すぎる。
「ふひゅうぅ♪　よし、じゃあ今度はボクの番だ☆！」　貴乃華はピタッと回転を止めたかと思うと、
「いっきまーす♪」
ネコマタに向かって予備動作一切無しで跳び出した。

「え？　ちょま―」
「アターーーック☆！！」
反応出来なかったネコマタの顔面に渾身の『跳び膝蹴り』をぶち込む！
「ひぎゃぶッ！！？」
鼻の骨が砕け、またもや吹き飛ばされたネコマタ。だがそれより、「痛い」より先に頭に浮かんだ言葉は…、

―有り得ないッ！！

―予備動作無しに、身を屈めて両脚のバネを使う事なく、足首の力だけで五十メートルを跳んだのか！？
「グッウゥッ！　…お、お前…俺と同じ妖怪なのか？」
「うん★？　違う違う全然違うよ♪　ボクは『人造人間』だーって言ったじゃ～ん♪♪」
―あ～そういえば、地下に入った時に言ってた気が…。
「ふ～ん、そっかぁ☆　怪我の治りが早いんだね♪」
不意に、貴乃華が膝蹴りを食らわしたネコマタの顔面を見て納得した。
ネコマタの鼻からまだ鼻血が出てはいるが、すでに鼻の筋は真っ直ぐに戻っている。打ち付けられた身体の痣や傷も無くなっていた。
「え？　あぁ、まあ妖怪だからな」
妖怪であるネコマタの体は魂によって構成され、イメージによって形状を保っている。自分の身体を思い出せる限りは即座にイメージ通りに戻せる便利な体だ。だが、身体を構成する魂は確実に削られる。魂の残量が底を付いたら戻す事は不可能になる。それはつまり、妖怪の死を意味する。
「この調子だと耐え切れねえな…」
―やっぱり何が何でも逃げるべきか…。それとも撃退するべきか…。

―…逃げるのは危険だ。超危険だ！背を向けたらまた跳び蹴りを食らうハメになる。隙を作ったらアウトだ！

「…よぉし腹くくったぜ。真っ向勝負してやろうじゃねえか！」

「あ、戦う気になってくれた♪？　ワ～イヤッター♪♪！」

身構えるネコマタと喜ぶ貴乃華。

いよいよ正面対決かとおもいきや、突如ネコマタは、

「くらいやがれッ！！」

真横に走ったかと思うと、割れた靴屋のショーウインドーから革靴や運動靴を取り出して投げつけ始めた。

「……★？」

なるべく硬くて当たったら痛そうな靴を選び、せっせと貴乃華の顔にピンポイントで全力投球を続ける。

貴乃華はそれを首を傾けるだけで避ける。

「……馬鹿にしてる←？　当たらないよそんなの…←」

「マジで？　じゃあこれは？」

ネコマタは靴が並べられた棚ごと持ち上げて投げた。

「簡単～←←」

目の前に迫った棚をあっさりと蹴り上げ、天井にぶつけた。百八十度上がった鋭い蹴りによって棚は見るも無惨に破壊され、バラバラになった金属片が飛び散る。

頭に降り懸かった破片を落とす貴乃華に次に飛んできたのは、

「『妖術・火衣鉄拳〔バーニングフィスト〕ッ！！」

炎を纏ったネコマタの拳だった。

「うははッ♪」

バク転…というより空中飛行。または重力無視。

軽やかかつ滑らかに天井すれすれまで跳躍し、一回転してネコマタと距離を置く。だがネコマタは猪突猛進に走り、一気に近づく。

「逃がすかゴゥルアアアアッ！！」

―休む暇を与えない！あれだけの動きを続ける事は相当無理がある。ＨＰもスタミナも無尽蔵って訳じゃない…、だったら、疲れる

までひたすら攻め続けてやる！
半分ヤケを起こしたネコマタは拳を振り回す。赤く燃え上がる炎に包まれた手が貴乃華の顔に襲い掛かったが、貴乃華は反撃せずに後ろに下がりながら身を捩って全て避ける。
「アハハッ♪！　ダメダメ～、それじゃあ当たらないよ♪」
「いや、当たるね」
「★？」
「蜃気楼って知ってっか？　温かい空気と冷たい空気の層が出来た時に起きる現象でなあ…」
「砂漠に出るやつでしょ★？」
「知ってんじゃん」
ネコマタの左拳が貴乃華の胴体に迫る。もちろん貴乃華はそれも身を退いて避ける。
はずだが、
「え★？　ぐがぁッ、、！？」

直撃。

火の拳が腹にめり込み、炎が舐めるように身体を燃やす。
「言ったろ？　当たるって」
貴乃華の目にはネコマタの拳が一歩手前に見えたのだろう。だが、実際はただの幻。空気の層が光を屈折させ、拳がズレて見えたのだ。
拳に纏う炎の熱で即席の蜃気楼を再現する。偶然ではない。かといって狙って作り出す事も難しい。

妖術。

畏怖と虚無の存在である妖怪がなせる『異能力』。

「…酷いなあ♪　思わず語尾に★マーク付け忘れちゃったよ♪」
焼けた腹を押さえニコニコ笑顔の貴乃華。
「ッ！？」
―効いてない！？浅かったか！？
―いや違う…。間違いなく渾身の一撃は当たった。単純にダメージを与えられてないだけだ！
「…うん…うんうん☆　真面目にやらないと負けちゃう感じだよね…♪　よし、本気出そ～っと♪♪」
「…あのなあ、そのセリフは負けフラグだぜ？」
「やだな～、そんな訳ないじゃん♪」
今まで予備動作一切無しだった貴乃華はギリギリと身体を屈め、
「ボクはアラちゃんにも神之上にも誰にも負けた事ないもん♪」

バキッ！！

―何の音？軽くて生々しい、生理的に嫌な音。首から聞こえた気が…。
「ありゃりゃ…★　もげちゃった☆」
―何が？
ネコマタは首を触る。皮膚が伸びきったように固い。
首筋を見ようと眼球を下に向ける。首と天井が見えた。

―……天井？

ネコマタの首は後頭部が背中に付くまでへし折れていた。

「カッ。…カフッ、。…ッ、！？」
「あ、繋がってた♪」
―何だ今の！？見えなかったどころじゃない。反応出来なかった

どころでもない。

―死んだ事に気づかなかった！？

「けほッ…ゴ、…ちきしょう！」

魂を削り、首を元に戻「ば～ん☆！」した直後、脇腹を吹き飛ばされた。

「グガッ！？」

筋肉と骨と内臓まるごと蹴り飛ばされた。まるで爆薬でも仕込んでいるのかと疑いたくなる威力の『ただの前蹴り』。

格闘ゲームのボタン一つで出る弱攻撃のように単発の攻撃だが、その一撃一撃が最終必殺技級の威力がある。

「頑張らないとぶっ壊しちゃうよ♪」

「グッ…グゾォッ！」

そして、一方的な破壊が始まった。

―――――――――――――――――――――

「貴乃華は俺より強い」

「……起きてたの？」

高上　舞〔タカガミ　マイ〕はアラストルを背負って移動していた。二人ともボロボロに傷ついていた。

「俺は『擬似・神の鉄槌〔トールハンマーレプリカ〕』の電流を利用して戦うし別に戦闘用の身体って訳じゃない」

「…いきなりどうしたの？　アドバイス？」

「いや、戦うなら覚悟しろってことだ。知ったところでどうにもならないけどな」
「……」
「貴乃華は最初から戦闘目的で造られてる。脚部を中心とした肉体強化。無理な動きで身体を傷めるのを防ぐ筋肉硬化と柔軟性。これは外傷からも防いでくれるしな。そして、」
「…そして？」

「無限のスタミナだ」

「む、無限！？」
「『天界式永久循環機関〔エンドレスハート〕』…。正確には身体のエネルギーを発散させることなく循環させる装置だ。アイツは疲れを知らねえんだよ」
「…鬼懺〔キザン〕先生の能力に似てる。でも疲労はあったからやっぱ違うか…」
「誰だそりゃ？」
「こっちの話し」
「…とにかく、貴乃華と戦ったらまず長期戦は無理だな。あの男、戦ってなきゃいいが…」
「ネコマタ？　アイツなら大丈夫。逃げるのが特技だから。…やっぱ心配してくれてる？」
「だから違うっつの！　神之上の計画を邪魔したらアイツに殺られるって事だ！」
「さいですか…」
「ああそうだそうだとも！　……」

――……

―……

―……あれ？

―何で俺は心配してんだ？

「アラストル顔赤いし汗もすごいよ？　どしたの？」

「…何でもない。何でもないから顔見るな」

―あれ？あれ？あれあれあれあ

第十一話：VSデストロイ？- 得点は『１０．０点』（後書き）

ネ：「ロボット三原則って知ってる？」

貴：「押さない、駆けない、死ぬな♀♂」

第十二話：VSデストロイ？-猫は死に場所を選ぶ（前書き）

貴：「遊ぼうずぅえぃ♪」

ネ：「じゃあ宮崎県知事ごっこ」

貴：「どげんかせんといかん♪　どげんかせんといかん♪」

ネ：「どげんかせんといかん！　どげんかせんといかん！」

貴：「くだらぬ遊戯だ……★」

ネ：「ふっ、若いな」

第十二話：VSデストロイ？- 猫は死に場所を選ぶ

笑って破壊し、
破滅を振り撒く。

―――――――――――――――――――――

例えば嵐。
例えば竜巻。
例えば山火事。
例えば地震。
例えば津波。

抗う事の出来ない自然の猛威。それらに立ち向かう人間の、なんと無力な事か……。

おそらくは、この人造人間〔ちびっこ〕も似たような存在なのだろう。

「アッッはははハハハハハ♪！！　潰れて無くなれええェッ☆☆♪！！」

地下街に地を踏み鳴らす轟音が響き渡る。戦闘用人造人間、貴乃華〔タカノハナ〕は大理石ごとネコマタを何度も何度も踏み潰す。

リズムに乗り、ステップを踏むように。
「ゴボッ、、！……ぶぅエッ…！！。ブッ、、…。」
バキバキにひび割れた地面の大理石にも、ボロボロに崩れた壁のタイルにも、チカチカと切れかかっている天井の照明にも、赤く生温かい血液が飛び散り、真っ赤に塗りたくられる。
血が絶えず噴き出しているが、それでも魂と記憶が残る限り死ぬことがないネコマタ。いや、死ぬことが“ない”のではなく、“出来ない”のだ。
ぐちゃぐちゃゴリゴリと、肉と骨を一回一回潰される想像絶する苦痛を坦々とその身に刻み付けなければならないのだ。潰されたら再生し、また潰されて、また再生する。

死ぬ程の痛みの繰り返し。

（あ～、ダメだ。痛すぎて逆に痛くなくなってきた…。もう意識が飛ぶ…。記憶が飛ぶ…。魂使い切る前に死ぬとは思わなかったわ…）
魂が極限まで削られ、なおかつ己の姿を思い出せなくなれば妖怪は死ぬ。ネコマタは苦痛によって自分の形を忘れかけていた。つまり、死にかけていた。
なんとかして抜け出したかったが、気力が切れかかったネコマタは逃げる為に『妖術』を使おうともしない。そもそも、妖術は見た目よりもずっと集中力が必要となる『異能力』。苦痛で気がおかしくなりそうなこの状況では、ネコマタは集中して妖術を使う事が出来なかったのだ。
「ねえねえ、いつ死ぬの♪？　どれくらい潰せばいいの♪？　どれくらい殺せばいいの♪？」
「…―。……―…、、…-…――…！。、」
もはやネコマタの喉は喋る為にも、食べる為にも機能しない。ただ肺と胃から溢れる血液の通り道となっていた。
「う～ん…、さっきみたいにパパッと逃げないねぇ★　もう死んじ

ゃったかな♪？」
（んなわけねえだろバッキャロウ。…さて、どうするかな？）
頭を踏み潰されながらネコマタは辺りを見回す。今はちょうど通路のど真ん中。右も左も白いタイルの壁で、通路の奥には店が並ぶ。この場で利用出来る物は何もない。
（クソッ、投げつける物もありゃしねえ。少しでも気を逸らせれば、その間に身体を治して体勢を立て直すことが……って、流石にそこまで出来ねえよな。ぬぅ…）
だんだんと苛立ってきたネコマタだが、単純な力の差がありすぎるのだから仕方が無い。今のこの状態では例え今の攻撃を抜け出したとしても、すぐにまた捕まって蹴られるのがオチだろう。
そんな怪力の貴乃華は踏み付けを継続しながら大きく伸びをする。あくまでその表情からは疲労が見られない。
「…どうしよ★　もう神之上と合流した方がいいかも…★」
薄れた意識の中、ネコマタは踏み続ける少年のそんな呟きを聞いた。
（神之上ねえ…。世界征服とか、わんぱく坊主が見る夢だろ…）
神之上と神之上が造った人造人間であるアラストル、貴乃華の三人は一つの野望の為に動いていた。野望とは地上界の統一、つまり世界征服である。三人は野望の実現を確信していた。そして、今現在進行形で絶賛侵略中なのである。
（……たったの三人で世界征服？　いや無理だろ。いくら驚天動地で言語道断の強さを持っていたとしても、世界中の国なんて途方もなさ過ぎだぜ）
確かに、三人だけで全ての国の軍隊と渡り合うのはまず不可能。時間も途方もなく掛かるだろうし、相手も馬鹿ではない。なにかしら策を練ってくるだろう。
（…てか征服して何のメリットが？）

ネコマタの思考が加速する。荒れる大海の中で漂っているような朦朧とした頭に（よくそんな頭でいろいろと考え込めたものだな…）、ピリピリとした感覚が浮上してきた。

（…まて、何か変だ！）

「…――お、――おま…え…――ゴボッ」

「ん♪？」

ネコマタは喉に溜まった血を押し出して声を発する。だからといって貴乃華の踏み付けが止まる訳ではなかったし、止まるとは期待してなかった。時間稼ぎついでに駄目元で聞いてみる。

「…おま…えらの、ブッ！　…目的は…！」

ネコマタの感じた違和感。侵略を実行して、世界征服を達成して、支配者になって、…その後は？　天界人の、しかも神様の息子である神之上が何故地上界を侵略する必要があるのか。生活に不自由はないはずだ。

「……神之上はね←」

ネコマタの予想に反し、貴乃華は素直に反応した。

「神之上はね、神之上のお父さんに証明したいんだよ★」

（証明？）

「天界は『魔法』の発展した世界だけど、神之上はその曖昧な奇跡の力が嫌いなんだって★　だから、『機械技術』で魔法を越えられるって証明して、お父さんを困らせたいんだよ★」

さっきまでの狂喜から一転し、無表情に近い、神妙な表情に変わった。

「だから神之上はボク達を使って侵略するの。侵略して、“アレ”を再現するの★」

「ッ…、ア…“アレ”？」

「うん。『あれ』を科学で再現出来たら充分に混乱を起こせられるんだって。そのためにボク達は頑張るの★」

（なるほどな…。『あれ』ってのは知らねえがとにかく、神之上の目的は地上界じゃなくて天界の混乱だった訳だ）
天界は地上界の問題、異変を解決する役目がある。だが、今の天界は『世界の歪み』という異能力者大量発生現象の異変を抱えている為に、これ以上は処理しきれない状態だ。
神之上の狙いはそこだった。天界社会のパンクを狙っていたのだ。
（目的は分かった。…後は動機とか知りたいところだが、まあ今はどうでもいいか）
ネコマタは心の中で呟いた。
「じゃ、もう行かなきゃ♪　そろそろ死んでよ♪」
貴乃華はその強靭な足をネコマタの頭に置き、ミシミシとゆっくり体重を掛ける。
「ちなみに何で早く死んで欲しいかっていうと、ボクが疲れたって訳じゃないからね♪　神之上の計画に間に合わなくなるから急いでるだけだからね♪」
床に亀裂が走り、ネコマタの額から流れた血が床に広がる。それでも更に足の力に拍車を掛ける。
「……ぅぅ…ぅ」
頭蓋が砕ける寸前のネコマタはか細いうめき声を上げながら、その踏み砕かんとする足を、ボロボロの両手で力無く掴んだ。
「…止めてあげないよ☆？」
貴乃華は無視して力を入れ続ける。着実に頭蓋にヒビを入れていく。
「そう…かよ…、助けて、くれねえかよ…」
「お菓子をくれてもやーだね♪」
「けど…残念だな、ちびっ子…。ここじゃあ、俺は死なねえ…」
「★？」
ネコマタは貴乃華とは逆に、全身の力を抜く。
「猫は死に場所を選ぶ」

“人”から“猫”に、変化を解いた。

「なっ、えッ★！！」

足の下にあったはずの踏み付けていた頭部が煙りのように消え失せ、代わりに、貴乃華の後ろから煙りのように黒猫が出現した。慌てふためく人造人間。

「消えた…。消えて…猫ちゃんが出て来た…」

「ふふん、違うぜ。さっきの人間が俺であり、この黒猫が俺の本当の姿だ。…それにしても痛かったぜぇえ？　痛すぎて、『変化の術』が“解けちまったい”」

準備運動のようにネコマタ黒猫バージョンは小さい頭をコキコキと鳴らし、やっと重たい鎧を脱ぐ事が出来たような、そんな僅かに緩ませた顔になった。二つに分かれた尻尾も軽やかに揺らした。

「散々に踏み付けてくれちゃったなあクソガキ…。猫を、もとい妖怪を怒らせたらどうなるか、教えてやろうかコラッ！」

「…ア、アッハハ♪　そのセリフは悪党の負けフラグだよ、黒ニャンコ君♪」

蛍光灯が割れ、少し暗くなった地下街に殺意が充満する。小さな火種で一気に爆発するような不安定さ、緊張感。爆ぜれば戦いは加速し、燃え広がり、歯止めは効かなくなるだろう。下手にこの空気の均衡を壊せばすぐにで

「あ、そういえばクソガキ。お前の名前って―」

貴乃華は『踵〔カカト〕落とし』を目の前のネコマタに放つ！

上から下へとノーモーションで、ギロチンの如き威力と速度の右脚を振り下ろす。

振り下ろした瞬間、それこそ爆発したように激しく大理石が砕け散った。

「ちょっと五月蝿いよ、黒ニャンコ君★」
パラパラと小石が音を立てて落ち、砂煙りで視界が悪くなる。だが、
「なあ、お前って何で貴乃華って呼ばれてんの？」
ネコマタの声は確かに煙りの中からした。
「★！？　外した★！？」
目の前の砂煙りが薄くなる。
貴乃華の振り下ろした脚の真横。さっきの位置から僅かにずれて座っていた。
「教えろよ。でもすぐに忘れ―」
「フッ☆！！」
踵落としに続いて足払い。
相手を転ばす為の技だが、貴乃華にしてみれば、足首を吹き飛ばす殺人技に過ぎなかった。猫なら即ミンチに早変わり。
身を屈め、反時計回りに一回転。息を吐き、踵落としと反対の脚を使って刈り取る。鋭く風を切り裂くその様は死神の鎌を連想させた。
「話し聞けよ」
だが、またもネコマタは蹴りを紙一重で避けた。後方へとワンステップ。死神の鎌が描く弧の外側に退く。
「ま…さか…」
そして、貴乃華は見ていた。自分のノーモーションの蹴りに反応すら出来なかったネコマタが、“何も見ずに”避けていたのを―。
「ネコマタ豆知～識。猫のヒゲはとっても敏感なのです。なので、風の流れも感じ取れま～す」
猫のヒゲ、もしくは洞毛〔ドウモウ〕。感覚神経と毛細血管が集まった、鼻の横辺りに生えている長い毛である。危機察知に使われる非常に敏感な毛ではあるのだが、毛を使って風を読めるのはネコマタぐらいだろう。「脚圧を、蹴りで生まれた突風を感じ取ったの！？」

「お前、動きすぎなんだよ。ん？　どうした？　キャピキャピした語尾が無くなってるぜ？」
「……ッ！」
貴乃華は明らかに動揺していた。一匹の黒猫ごときに虚仮〔こけ〕にされるという初めての経験に、冷静さを保てなかったのだ。
貴乃華はこの時、造られて初めて“焦り”の感情を表情に見せた。
ネコマタは後ろへ更にバックステップし、距離を置く。といっても、十何歩程の間隔の至近距離である。
「もうお前なんぞ怖くねえッ！　やられた分、きっちり五万倍にして返してやんよッ！！」
そして、天井を見上げて息を大きく吸い、肺を膨らます。
「…調子に乗らないでよ、黒ニャンコ君☆　火の球はボクには効かなかったでしょ♪？」
息を吸うネコマタに対し、身を屈めてギリギリと両脚の筋肉を締め上げる。ノーモーションの回し蹴りで猫を蹴り飛ばす為にではなく、回し蹴りによって生じる“突風”を起こす為に。
「聞いてなかった☆？　さっき蹴りで火の球消した事忘れたの♪？」
「……フゥッ！！」
（『妖術・四連火球』！）
通路を埋め尽くす四発の火の球。超至近距離で貴乃華を狙い、灰と化す為に飛ぶ。が、
「おっ馬っ鹿さ～ん♪」
脚を上げて跳び上がると同時に、反時計回りに回転を始める。空気を切り裂いて掻き回す脚技が突風を起こし、火球を全て掻き消した。
「アッハハハァ♪♪　楽勝～☆」
「ア～ンド―！」
だが既に、ネコマタは追撃の為に駆け出していた。

「あれ★？」
火球を隠れみのとして、貴乃華の目の前に跳んだのだ。
「『部分変化』『火衣鉄拳〔バーニングフィスト〕』コンボ」
前足を“人の腕”に変化させ、次にその腕に炎を纏わせる。コンマ数秒で一連の動作を行い、貴乃華に殴り掛かった。
身体が宙に浮いた状態の貴乃華が避ける訳も無く、その顔面に拳がぶち当たる。
「ブッ！★！@？」
そして、貴乃華は後方へ殴り飛ばされた。
「カッ…ごふッ？！£¥！」
「まだまだ行くぜ」
「∬！？」
ネコマタは攻め手を緩めない。地面に水平の状態で殴り飛ばされている途中に関わらず、貴乃華に駄目押しの火球攻撃を仕掛ける。
「こ、んな？ッ？！！」
貴乃華とネコマタは完全に、決定的に、攻め手から受け手へと役が入れ代わっていた。それもそのはず、貴乃華は戦闘用に造られてはいたが、それは対人戦を想定しての構造なのだ。それはつまり、戦いの知識、判断、直感が全て人型に当て嵌まった時のみ本領を発揮するという事。たかが猫相手に真面目に考慮などされている訳が無かった。

猫の姿のネコマタの動きが予測出来る訳が無かった。
「ぅ…うッガァアアァァ？∞ッ！！」
致命的な欠点に気づかない貴乃華は無茶苦茶に身をよじり、地に手足を付いて身体を止めた。必然、火球はもろにくらう。
「！？　マジかよ！？」
貴乃華の行動に驚愕するネコマタの目の前で、その貴乃華もろとも通路が燃え広がる。故障しているのか、火事を知らせる火災報知

器もスプリンクラも反応しない。
「何考えてんだあのガキ。あ～…ってか、流石にしんどいなおい。火球はもう無理か…はぁ…」
うなだれ、呼吸を整える。だが休む暇は無い。あの人造人間の事だ、まだ息はあるだろう。油断出来ない。
「……あはは♪」
そして案の定、燃え盛る炎の壁から二本の腕が生えてきた。
「やっぱしなあ…」
「楽しいよ…、凄く楽しい♪　強いんだね黒ニャンコ君♪」
熱さを忘れているような、嬉々とした子供のような笑顔で火の中から現れた。タキシードや髪の毛は僅かに焦げ、頬に黒い煤〔すす〕が付いている。
「流石だなあ人造人間。まだまだ余裕じゃねえかよ。そんだけ動いて疲れねえのか？」
「『疲れ』ってあれでしょ♪？　息がぜぇぜぇになって、心臓がばくばくになって、汗がだらだらになるあれでしょ♪？　それだったらボクには無いよ☆　疲れないように造られてるもん☆」
「…機械の体だからとか？」
「よく分かんな～い♪」
「……」
ネコマタは悟った。真っ向勝負では勝てない、と。
『体力限界精神限界の小さい黒猫妖怪』ＶＳ『スタミナ満タン元気溌剌の小さい最強人造人間』。果たしてどちらが勝つでしょうか？　結果は丸見えである。
「……ん？」
だが、悟ったと同時にネコマタはあることに気づいた。
“疲れ”が無いという事は、“痛み”が無いという事と同義なのか？

貴乃華の最大の強みは『天界式永久機関〔エンドレスハート〕』による“無限のスタミナ”。どれほど身体を酷使しても動きの切れは損なわれず、常に最大出力で技を繰り出せる事にある。いくら攻撃を受たとしても、貴乃華の脚技はその鋭さを保てるのだ。

だが、それは受けたダメージが無くなる訳になるのか？

そう、ダメージは確実に蓄積されているのだ。その証拠に、今の貴乃華は片足を僅かに曲げ、体重の付加を掛けないようにしている。その理由が“疲れ”では無いのなら、それは膝の関節の痛みが限界をきたしているからのはずだ。

―勝つチャンスは……ある！　けど…。

ただでさえ強化された貴乃華の体にどれほど攻撃すればいい？疲れ知らずの人造人間とどれほど戦えばいい？　分厚い鉄板を紙やすりで削り続け、穴を開ける作業くらい途方も無い戦いなのではないか？

「兎にも角にも♪！　黒ニャンコ君は体中ボロボロのヨロヨロ♪対してボクは脚がちょっと痛いだけ☆　このままだったらボクの勝ちは決定だね☆　それともまた鬼ごっこする♪？　どうする♪♪？」

首を傾げ、笑顔で催促する。僅かに引き攣っているのは痛みをやせ我慢しているからだろう。

「……そうだな、確かに逃げてえ。ってか、最初から逃げりゃあ良かったのかもな…」

「じゃあ鬼ごっ―」

「けど、ここで逃げたら雄じゃねえッ！！」

燃え盛る地下街で声を張り上げ、毛を逆立てるネコマタは残る魂と共に、戦う決意を見せる。

「それと、てめぇと戦ってて、恐怖とか憤りとかとは別に感じたモノがある…」

「…え★？」

「この勝負…、俺も、なかなか楽しかったぜ」

「……」

「でも、これで最後だ人造人間！　そろそろ遊び疲れた頃だからなあ！」
「…アッハハハ☆　何言ってるの♪？　黒ニャンコ君が疲れたとか関係無いし、これはボクが飽きるまで続けるんだよ♪」
　逃がさないと言わんばかりにピョンピョンと火炎に囲まれたその場で跳びはね、戦闘体勢をとる。互角、またはそれ以上の実力の相手なんて早々会える機会は無い。貴乃華はネコマタを、最高の遊び相手を逃がしたく無かった。
「脚が使えないと思ったら超大間違いだよ☆　足腰の捻りを使って繰り出すパンチはベルリンの壁でもＡＴフィー〇ドでも何でもドーンと―」
「い～や、もうおしまいだ」
「★？　ケホッ！！」
　突然、貴乃華はその場に膝を付き、口を池の鯉のようにパクパクと開閉させ苦しみだした。
「……やっぱりか」
「は…ぁ、…嘘★　これ…、ボク、っ…疲れてる★？」
「ずっと考えてた…。これだけ戦闘に特化されているのに、何故これ程までに感情豊かに造ってあんのかって」
　もし敵対者との戦闘のみが目的なら、戦闘時に迷いが生じる可能性のある感情は付ける必要が無い。いや、それ以前に人型である必要が無い。自己判断をする機関銃なり、自動追尾する戦車なり、もっと強固な兵器らしい兵器を造れば良かったのに…。
「そんで分かったんだ。お前は戦闘特化の“兵器”以前に、限りなく人に似せた人造“人間”だって事を！」
　つまり、貴乃華の強靭な肉体はついでに付け足したおまけの機能。神之上が人造人間を造った理由、それは兵器の制作ではなく、機械学で“奇跡”を再現するその過程で造ったのだ。だから神之上は人間らしさを持たせた。
「人間である為のルール。感情を持ち、思考し、食べ、眠り、そし

て“呼吸”する！“人間性”がお前の弱点だ！！」
人間である為のルール…。それは、数時間前に神之上が言い放った言葉だった。
「……そ…かぁ、…アッハハ★　じ、自分の…事なのに、…分かん…なかったな★」
「まあ、すぐ分かんないようにやったからな。無理も無いぜ」
地下街は確かに広い。が、それでも空気は次々と火の燃料と化す。等間隔にある通風孔は一番近い位置でネコマタの頭上。火炎の中の貴乃華まではとてもじゃないが風が送られない。
「火に囲まれてりゃあ酸素を吸えない。脳に酸素が行かなきゃ失神、もしくは死亡だ。悪かったな、こんな幕引きで。これしか勝てる方法が思い付かなかったんだわ」
「ううん…。別に…いいや♪　楽し…かったし、ボク…は、…ボクが人間だって…改めて…認識出来た…から、いいや♪」
初めてであろう脂汗を袖で拭い取り、ゆらりと立ち上がる。そして、黒くなりつつある白い天井の、起動しない火災報知器を見上げる。そして、座っているネコマタへ目を向け直した。
「あ～♪　楽しかった♪　…またね、黒ニャンコ君♪」
軽く手を振る貴乃華の言葉にネコマタは首を傾げ、すぐにその意味を理解した。

高く跳躍し、貴乃華は火災報知器を蹴り上げた！

「しまっ…！」
巨大な風穴を天井に開け、蛍光灯もろとも亀裂が走る。ガラガラと崩れ落ち、地下街の店は押し潰されていった。凄まじい轟音が鼓膜に襲い掛かる中、それを背にネコマタは後ろへ駆け出す。
「あんんのクッソガキがあああああああッ！！」
絶叫しても倒壊は止まらない。前脚後ろ脚を激しく前後させ、一気に駆け抜ける。そして、

地下街は崩壊した。

――

縦浅町〔タテアザチョウ〕駅前。縦浅町はマイやネコマタが住む“あの街”の隣街で、デパートと地下鉄が一緒になっている。
（逃げるのに必死過ぎてここまで来ちゃったか…）
ギリギリ二番出口と書かれた階段を駆け上がり、脱出に成功したネコマタは地上にいた。二本の尻尾が丸見えの状態に関わらず、ネコマタはボーッと周りを見渡す。
まず目に付いたのは、地下街の崩落によって前方のデパートから立ち込める大量の土煙りだった。あの後、追い掛けてこない事から、貴乃華も逃げ出したに違いない。
そして次に、通行人も交番にも誰も、誰ひとりとして人間が居なかったのだ。
「なんだこれ？」
首を九十度ピッタリに傾げる。首が痛くなった。考えるのを止め、とりあえず帰る事にした。テクテクと歩く。その間、人を見かける事は無かった。
「……天界の混乱かぁ」
不意に、貴乃華の言葉を思い出してみる。
「……まあ、大体の予想は出来てるがな」
今の天界は“ある現象”によって既に手一杯の状態である。ならば、もしその現状が悪化したら…。
「“アレ”の再現か。出来るとは思えないが…」

ネコマタは走り出す。マイと合流する為に。出来なければ自分一人でも止めに行く為に。

『世界の歪み』の再現を止める為に！

第十二話：ＶＳデストロイ？－猫は死に場所を選ぶ（後書き）

俺：「第一回、チキチキ一番声が大きい人は誰でしょね選手権んんんんんッ！！！」

ネ：「ミィヤアアアアアアァアアアアァアオワアアアアァアアアアアアアアアアッッ！！」

マ：「ンンンンマアアアアアアアアアアアアアアアアンマアアアアアッ！！」

神：「グゲゲググゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲッッ！！」

貴：「ビュピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョッッ！！」

ア：「うるせええええええええええええええええええええええええええええええええええッ！！」

俺：「優勝はアラストル」

第十三話：VSゴッド？- 粗大ごみ！？（前書き）

ネ：「更新がかなり遅いが、大丈夫か？」

俺：「大丈夫だ、問題ない」

マ：「文章力の向上が見られないが、大丈夫か？」

俺：「大丈夫だ、問題ない」

神：「展開が早いと思うんだが、大丈夫か？」

俺：「大丈夫だ、問題ない」

ア：「頭大丈夫か？」

俺：「大丈夫じゃない、問題だ」

第十三話：VSゴッド？- 粗大ごみ！？

このライトノベル風な小説のジャンルは『ファンタジー』である。ではあるが、物語は日本の現代を舞台にして展開する。伝奇小説とでも言うべきか、小説家気取りの痛い妄想と言うべきか…、とにかく現代の設定である。

だから、この世界は現実と同じ、ごく一般的な世界観のはずだ。

“はずだった”はずだ。

だが今、この世界にはある“現象”が起こっていた。それこそが、本作を『ファンタジー』に分類させる原因であり発端でもある。

『世界の歪み』

そう命名された“それ”は、ある日突然、何の前触れもなく、唐突に、不吉を撒き散らしながら出現したのだった。

と、言ってはみたが、それほどまでに仰々しい物という訳では無かったりする。

なぜなら、それ自体はただの自然現象でしかないからだ。

例えるなら、海上で現れ勝手に海上で消える台風。激しい豪雨に直撃した小さい山火事。そういった、勝手に解決してそうな、一般人の誰もが興味を持たなそうな自然現象。それが『世界の歪み』、通称『歪み』と呼ばれるものなのだ。

では何が恐ろしいのかと言うと、それは、『歪み』が人間に及ぼす影響にある。

率直に言えば、『歪み』は人間の体、または脳に影響を及ぼし、超人的な『異能力』を使えるようにする力がある。

理屈はよく分からない――と言うより説明が出来ない。自然災害の発生のメカニズムが解明されていないのと同じで、天界でも実態が全く掴めずにいる。

だが確かに、『異能力者』は増えている。テレビが番組を受信するように、『歪み』は人に向けて『異能力』を発信するのだ。
そして、影響を受けた人間――『異能力者』は、『異能力』の危険さを理解せず、使える事が必然だと思い込んでしまうのだ。
その為『異能力者』は、必ずと言っていい程に犯罪に走る傾向にあると言い切れる。ストレスの解消や発散の為に異能力を利用し、手口も証拠も不明な強盗や殺人、果てにはテロ活動までする能力者もいる始末だ。
それだけに飽き足らず、『異能力者』の出現に合わせ、その『異能力』を利用しようとする組織も現れた。こうなってしまったらもはや収拾が効かないだろう。
“それ”ら全てが入り乱れ、“それ”ら全てが混沌と化す。
『世界の歪み』というただ一つの現象に、世界は掻き乱される。
起こりうる全ての混乱、問題を、天界は解消しなければならない。必要とあれば武力的にでも、犠牲が必要だとしても、
そこに、ただ一人の肉親が含まれていたとしても――。

――

「あれ？　何で人が居ないの？」
石像のように重いアラストルを背負い、複雑に入り組む路地裏を抜けたマイちゃんこと高上　舞〔タカガミ　マイ〕は、長い黒髪のポニーテールを揺らしながら辺りを見回し、早々に疑問符を浮かべべ

た。
「……」
マイに負けた挙げ句に人質状態の人造人間、アラストルは黙りこくっている。女子高生に背負われ、手足をだらりと伸ばすジャージ姿の彼からは、何とも言えない哀愁が漂っていた。つまりカッコ悪かった。
「…何でだろ？　実家に帰ったのかな。どう思うよ負け犬」
「誰が負け犬？　…まあ、知らねえよ」
マイが疑問符を浮かべた理由は、路地裏を出てすぐの表通りにあった。間もなく三時くらいになるにも関わらず、歩道には歩行者が誰も居ない。車道には自動車一台と走ってない。ただ、静かな空間に建物が並んでいるだけだった。
路地裏に数時間居ただけなのに、この街はゴーストタウンと化していた。
マイは路地裏の入口付近、ぎりぎり日陰の位置にアラストルを下ろし、もう一度辺りを見回してから視線を落とす。手足を放り出したアラストルがジロリと、こちらを見上げていた。
「マジで勘弁して欲しいわ～。これじゃあアタシが世界で最後の生き残りみたいじゃん。ね、負け犬」
「だいぶ話が飛んだな。一応、人造人間だが俺も居るんだが」
「負け犬はカウントしない」
「差別？　俺は動物の分類？」
「いや、どちらかと言えば開かなくなったタンスとか、点かないテレビとか、バネの飛び出たソファーとか…」
「粗大ごみ！？」
「誰も居ないと言えば、ＳＩＲＥ〇とか思い出すよね～。怖かったよあのゲーム。屍人死なないんだもん」
「見るからに頭悪そうだもんな、お前。視界ジャックの使い方とか分からなさそうだ」
「でも美耶〇が好きだった。超可愛いよ美〇子。牧〇と宮〇の双子

も捨て難い。〇〇が〇〇で〇〇〇」
「〇が多いよ」
拳を握りしめ、熱弁するゲーマーなマイちゃんだった。アラストルも呆れ返って溜め息をつく始末。
マイはゲームやアニメ、漫画の知識を広く浅く、ジャンルを問わず頭に蓄積している。いわゆる乙女ゲーは勿論、マイナーなゲームなんかは、ほぼ引きこもり状態の兄の影響が大きかったりする。
ちなみに、そんなゲームの豆粒知識は時折、現代の情報を欲するネコマタに半分真面目に半分ふざけて教えており、兄から妹、妹から猫へと知識が流れ、そうしてネコマタはアニメの情報を入手していたりする。
…どうも、ネコマタのウザったいアニメトークは、マイの自業自得らしい。マイ自身も今は相当後悔しているし。
まあ、ここでは関係ない話だけども。
「ったくよぉ、ホラーゲームなんかに一々怖がるような奴に、しかも女に負けるたあ、俺はもうダメだな…」
「まあドンマイ。…慰めてほしい？　ひざ枕する？」
「俺はもうダメだ……」
聞いてない。ただの負け犬のようだ。
「そんな落ち込まないでよ…。落ち込む前にする事あるでしょ？」
「俺はもうダ……何？」
不意に、マイがそんな事を言ったので、落ち込むのを止めて上を向くアラストル。
「何で人が消えちゃったのか。それと、大神様の息子さんの居場所、吐いてもらうからね」
マイの刺し殺すような視線が、更にギロリと、その鋭さを増した。
マイちゃんの基本装備スキル、『冷た過ぎる視線』発動である。若干、刺々しさ多めのため、かなり怖い目付きになっている。それこそ屍人より怖いかもしれない。
「チャッチャと簡潔に答えてよ。今のアンタ程度、赤子の腕を複雑

骨折させるくらいに簡単にボコす事が出来るから、そこんとこ分かった上で考えてね」
「…ホントにおっかねえ奴だな」
本気と書いてマジと読むくらいに本気の眼だった。
抵抗する為の策を練るアラストルだったが、今は身体の至る所の歯車が辛うじて噛み合い、ぎりぎり会話だけが可能という満身創痍の状態だ。
赤子どころか、胎児を握り潰す程にたやすいかもしれない。
「言ったところでどうにもなりゃしねえよ」
「いいから、アンタは黙って、大神様の息子の居場所を教えてくれればいいの」
「いや、黙っちゃダメじゃね？」
「揚げ足を取る暇あるならさっさとする！！」
顔を赤くして地団駄を踏む。…何故か和みますね。
そんなマイを見てほんわかとしたアラストルは、
「……実際、俺にもよく分からん」
ボソッと、小さく呟いた。
「……は？」
「神之上〔かみのじょう〕から受けた指示は、“早朝の間にこの街を練り歩け”ってだけだ。そしたら街中の人間は外出しなくなるんだとよ」
そして指示どおり、アラストルと貴乃華、加えて指示を出した神之上の三人は、早朝から散歩を始めた。表通りから路地裏まで、蜘蛛の巣を張るように――。
「……いや、そんだけでホントに出来るの？」
「出来たから人っ子一人居ないんだろが。まあ、住民全員が消滅した訳じゃあねえらしいがな。見てみろ」
生意気な口に、素直に従いもう一度よく街を見回してみると、向かい側のマンションの窓から、人を数人確認する事が出来た。
監禁されている訳ではなく、休日を過ごしているような様子。た

だ、住人が座っても家事もせず、ボーッと突っ立ている事は気になったが、まあそんな家族も居るだろうと、マイは軽く流した。
流しちゃいけない気がしなくもないが、さらりと喉越し良くスルーした。
とりあえずホッと安心した反面、より訳が分からなくなってきてしまったが…。
「何なの一体…。魔法とか使ってるんじゃない？」
こうなったら直接聞くしかないかな？　と、小さく呟くマイ。
「まあそれは一度置いといて、ＹＯＵ、さっさと奴の居場所を言っちゃいなよ」
「ジャ〇ーさん風に言われたってよお、神之上の居場所はホントに知らねえんだって。この情報だけで勘弁してほしい…」
アラストルはそう言って、小さく頭を下げた。が、マイは釈然とせず、
「情報も何も…、全然意味分からないし。せめて計画の内容とか、どんな仕組みで人を操ったとか、どうしてそうする必要があるのかとか説明せい」
と、しつこく問い質した。
「…お前って理系か？　ファンタジーの設定はそうゆうもんだって思っときゃいいんだよ」
「アンタはロボットでしょが。誰にでも分かるように説明しなさい」
さりげない、読者へのマイの配慮だった。痛み入ります。
しかし、小さいため息をついたアラストルは眉をひそめ、
「俺だって学が有る訳じゃないし、神之上の考えはさっぱりだ。ちょっと頭いいだけのお調子者だし、それゆえに予想がつかねえ」
首を横に振った。
「そんな奴がよく世界征服なんて言ったもんだね」
「ハッ！　確かに言えてるな！　けどなあ、今の今まで、あいつの計画には寸分の狂いすらあった事がねえ。この世界征服計画も、現在進行形で怖いくらい順調に遂行中だ！」

呆れるマイへ、アラストル渾身のどや顔。とりあえずマイはその顔面へ渾身のパンチ。
いぎゃッ！　というくぐもった声を出し、痛みに悶える。身体は動かせないので、首と指先と足先をパタパタさせていた。
「ったく、ホントめんどくさい奴相手にしちゃったよ」
うんうん、と。マイは何度か頷き、
「――って、ちょっとおい」
新たな疑問がすぐに出てきた。
「アタシは平気なんだけど、どうして？」
『神様代行』とは言え、元はただの高校生。何らかの変化があってもおかしくないはず。天界人でも人造人間でもないのに、何故マイには異変がないのだろう？
「……。たぶん、『神様代行』だからじゃないか？　『能力者』みてえに脳の構造が変化してんのかもな」
「え？　『能力者』って何か違うの？」
「あん？　知らねえのかよ。『異能力』発動の為に、身体の構造とか脳みその一部が変化すんだよ」
異能力者。
日常から区別される、非日常の住人。
しかし、元はごく一般の人々。
（それは――つまり……）
『神様代行』と『異能力者』。

一体、どれ程の違いがあるのか――。
「…神之上の居場所は、ホントに知らないの？」
膝をまげてしゃがみ、アラストルと目線を合わせる。
「……」
アラストルは何も言わなかった。ただ、マイを睨むだけだった。
明らかに眼が泳いでいたが、マイは気付いていたが、

「…分かった。じゃあここにいて！　探し出して捕まえて来るから！」
ニコッと笑い、勢いをつけて立ち上がった。壁によっ掛かったアラストルを置き去りにして、背を向け、てくてく歩きだす。
「極力話し合いで解決するから大丈夫。天界に引き渡すだけだし、その後に世界征服だって好きにすればいいじゃん。まあ、指示があったら邪魔はするかもしれないけど」
後ろ向きで軽く手を振った。
「――――マイ」
手を振るマイに、アラストルは、
「お前が天界に従う理由って、何だ？」
問い掛けで返事をした。その問いにマイは、ばつの悪い顔を隠すように、振り向かずに答えた。
実に曖昧に、舌っ足らずに。
「何って…、えと…、バイト代の為…とか…」
「ハッ！　金の為か。俺との戦いの時に、真剣勝負がどうだとか言ってたがそれは立て前か？」
足を止め、背を向けたままその言葉を聞く。
「お前は戦う理由があやふやなんだ。無意識に、ただ天界に良いように利用されてるだけなんだよ」
「それはないって。ただ、辞めたいと思っても辞めさせてくれないし、だったら用済みになるまで働くまでだし」
「けどよ、バイトを辞める理由もないんだろ？　目的がはっきりしてねえから、ダラダラ戦い続ける事になってんじゃねえのか？」
「……」
本当の事だった。マイは当初の、おこずかいを貯めるというただそれだけの小さな目的を忘れていた。
投石　炎岩〔トウセキ　エンガン〕と戦い、鬼懺　槐〔キザン　エンジ〕と死闘を繰り広げ、その二人の前には※　※※〔※※※※※※※※〕と引き分け、

※　※※って、誰だっけ？
マイの心境は僅かに変化していた。
否――。
それは、ずっと心の奥に有ったのかもしれない。戦いは、自覚する為のきっかけに過ぎなかったのかもしれない。
「マイ、お前はただ、感情に関係無く理由も無く、ただ黙って歩く幽鬼だ。…少なくとも、お前は特別なんかじゃない」
「…アタシは別に、バイト代が貰えればそれで良いだけだよ」
「命を張ってでもか…？」
「……」
マイは言葉に詰まった。そしてそのまま深く考え込む。
自分について、深く考え込む。
（やっぱりアタシ……アタシは……）
そして、ゆっくりと口を開く。
「……さっきさあ、感情に関係なくって言ってたけど、それは違うよ？」
落ち着いていて、微笑みかけるような穏やかさで、自分自身の気持ちを確かめるように、高上　舞は口を開く。
「アタシはたぶん、何かを…誰かを助けたいんだと思う。心の何処か、隅っこにあるそんな気持ちが、今のアタシの人格を、精神を、志しを、身体を…、真っ直ぐに立たせてくれているんだよ。アタシは…アタシはこの心を、大切にしたいだけなんだよ」
だから戦っていれるんだと思う……と。
優しげに、力強くそう答えた。
「…まるで、他人の事のような口ぶりだな」
「うん、アタシもよく分かんない。へへ…」
小さく笑ったマイは、再度アラストルに背を向けて歩きだす。もう振り向かず、立ち止まらない。
最後、去り際に一言、
「やっぱ心配してくれて、ありがとね」

とだけ言い残し、路地裏を抜け、道路を横切った。
「し、心配してねえし…。畜生…」
一人動けないアラストルは俯く。表情を隠しているようだった。
「…こりゃあヤバいかもな、神之上…。初の黒星にならねえと良いけど…」

―――――――――――――――――――――

「これは、もしかしたらもしかしてもしかするかもね、俺様…。初の黒星だけは勘弁して欲しいよ…」
この街のほぼ中心にある区民ホール。ライブやコンサート、演劇、講習など、様々な文化活動で使える大ホールなのだが、まさか天界人の拠点として使われるとは思っていなかっただろう。
誰も居ないホールの観客席は一階と二階に別れ、二千人は余裕で座れる程の赤い座席が、やや傾斜にずらりと並んでいる。
そして前方では、間口約二十メートル、高さ約八メートル、奥行き約十四メートルの舞台がライトアップされていた。
そんな舞台の上にたった一人、空席に背を向け、灰色の壁に顔を向ける形で、その男は立っていた。
天界人。
神の息子。
神之上がそこに立っていた。
シルクのように白い長髪。汚れ一つ付いていない白衣と革靴。日本人離れした顔立ちと白い肌。加えて蒼(あお)く濃淡な瞳。白の印象が強すぎて聖人にも死人にも見え、壁の灰色と神之上の純白との区別が明確になりすぎ、くっきりと輪郭が浮き出て見える程の白さだった。

そして何より、神之上が纏う空気、空間は、あまりに“異質”だった。
どう“異質”なのかと言われると正直、文章や言葉では伝えられない…とゆうより伝わらないかもしれない。強いて言うなら、神之上だけが空間から切り離されているような、そこだけ人の形にポッカリと穴が空いているような感じ。

虚空を見つめ続けた時のような、寂しい感覚。

立っているだけの神之上は、その異常な“異質”をじわりじわりと漂わせながら、ぽつりと言葉を発っしていた。
独り言ではなく、観客席の黒猫に向けて―。
「いんじゃね？　黒星でも白星でも北斗七星でも、勝敗なんて実に瑣末（さまつ）な事だぜ」
黒猫妖怪ネコマタは怠そうに言った。
「うん？　その声は数刻前のチャラ男…」
舞台の演目のように、神之上はゆったりと客席側へ振り返る。ぱっと見舞台俳優としか思えない、無駄の無い動きだ…とは些か褒めすぎだろうか？
「そうかそうか、君は“あやかし”の一種か…。化け猫…かな？」
「ノー。俺の名前はカタカナ表記でネ・コ・マ・タ」
ネコマタは最前列の席に猫のように座っていた（猫のようにってか、そのまんま猫なのだが…）。そして、神之上に近寄る為、舞台に乱入するようにぴょんと舞台上に跳び上がった。
「自分で言っちゃうと、俺は結構細かく指摘する奴だから、名前はしっかり記憶して欲しいね」
「猫又…？　ハッハー、あれか。吾輩は猫であるってゆうあれか」
「いや…名前がネコマタなんですはい…」
「なんだ、名前はもうあるのか。せっかく名前を付けようと思ったのに…。吐鵬（はくほう）とかルシファーとか」

「なるほど、人造人間の名付け親はお前か」
強くあって欲しい思いから力士の名前を。かっこよくあって欲しい思いから悪魔の名前を付けるらしい。ややこしい名前を付けたがる、いろいろ間違った親御さんのようだと後に語る。
「…まあ、お約束という事で一応問うてみるか」
神之上は双眸を細め、ネコマタの揺れる二本の尾を目で追いながら、
「貴様ー、何故この俺様の居場所が分かったー」
と。お決まりの台詞を棒読みした。
「ふふん。それは、この俺お得意の情報収集でさ！　人は居なくても、野良猫はこの街に何十匹も居る。お前がこの区民ホールに入るところも丸見えだったぜ？」
したり顔のネコマタにやれやれ…と、ため息を吐いて目線を外す。
「せっかく苦労して天使を陽動したというのに…、どうも調子が悪いね」
「陽動？　何だ、街のあの変貌っぷりは、お前の機械技術じゃなかったのか？」
外した目線を、赤い観客席に向ける。
「まあな。利用出来る奴はいくらでも利用するのが俺様の主義だ。わざと俺様を天界に捕捉させ、慌てふためく奴らに“魔法”の使用を許可させる。まあ、此処までは順調だったかな」
事を隠さず、ありのままを言った。
「って事はつまり、この街の変貌の直接の原因は天界人…いや、天使の仕業って訳か。大方、人避けの“結界”の類いか…」
「お？　なかなか物分かりが早いではないか！」
ネコマタの察しの良さに驚き、そして気を良くして表情が緩んだ。自分の小難しい話しを理解出来る相手を早々に出会えた事に、神之上は純粋に嬉しく思ったのだ。
「貴ちゃんもアラちゃんも、俺様の優しい解説を真面目に聞いてはくれないんだよ…ぐすっ」

「貴乃華とかは確かに聞いてなさそうだな」
「よし、それだけ知能があるなら“結界”を解説してやろうか？」
「いや、別にいい」
「え～……」
しょんぼりと項垂(うなだ)れる神之上を横目に、ぐっと背伸びをするネコマタ。そして、二本に分かれた尾を揺らし、後ろに引くように神之上から距離を取った。
「さてと、そろそろ戦闘パートと行こうぜ？　てめぇの講義はてめぇが負けた後で聞いてやらあ」
にんまりと笑った口から火の粉と黒煙を吹き出す。獲物を狙うような眼光で身構え、獣(けもの)の如く毛を逆立たせた。
だが、神之上がそれで身じろぐ事はなかった。むしろ呵呵大笑(かかたいしょう)に笑い出している。
「ハハハハッ！　冗談は止めてくれよネコマタ！」
「冗談でもギャグでも漫才でもねえよ。勝算はこっちに十二分あるぜ」
ネコマタの言う勝算とは、単にお互いの力の差がありすぎるという推測に過ぎない。マイの足止めを味方に任せ、自分だけは建物の中でやり過ごす神之上の行動。そして何より、
（神様の息子なんて、どうせボンボンのお坊ちゃま生活だったにちげえねえぜ！）
という、勝手に他人の生活っぷりを想像した、ネコマタの慢心から出た結論によるものだった。死亡フラグ立ちまくり。洋画なら真っ先に死んでいるタイプである。
が、案の定ネコマタの思った通り、神之上は苦笑いで、
「う～ん、確かに俺様は“無茶苦茶に弱い”しねぇ…、肉体労働は全部、貴ちゃんアラちゃんの二人がやってるし。だから俺様は戦わない。ってか戦えない。ってか戦いたくない！」
両手を上げ、戦意が無い事をアピールする。
降参する神之上に対し、ネコマタはと言うと、

「うおっしゃ勝ち決定！！　やっと俺の大活躍が華麗に語られるぅ！！」
心の中で言った筈が、大きく腹から出るように声がだだ漏れる程のハイテンションだった。最近は負け続きの良いとこ無しなので、活躍の場を得た事が相当に嬉しかった様子。
「……」
既に文庫化、コミック化、アニメ化（ＣＶ若本　〇夫）、グッズ商品化、ゲーム化、映画化、実写化、舞台化のオファー殺到の夢を見始め、ぐふふっと笑っているネコマタとは対称に、神之上は静かに黙っていた。
黙って、ネコマタの“足元”を手を上げながら確認した。
「時にネコマタ。ただ力比べをするのは、やはりフェアではないと思うんだ、俺様」
唐突に意見を口にする。ネコマタは「へっ？」と妄想を中断し、ワンテンポ遅れて反応する。
「だから、誰だって苦手分野ってあるではないか。お前がやろうとしているのは、金槌（かなづち）に水泳勝負を挑むと同義だぞ？」
「構わん！　俺は勝って人気者になればそれでいいんだよ！」
勿論、ネコマタはそんな事では黙らない。仕方なく、白髪の頭を掻きながら、
「まあいいから、クイズをしよう。全部で三問用意してあるんだ。早速第一問！」
ジャジャン！　と自分で効果音を出し、クイズ番組的なノリで出題する。
「今、この街の住人は建物の中で閉じこもっています。では…何故この区民ホールには、誰も居ないのでしょうか？」
「……は？」
問題に、ネコマタは硬直した。
「時間が勿体ないので第二問。現在この街全体は停電状態にあります。では…何故この舞台はライトアップされているのでしょうか？」

「あ…え、ええっと…ってか何て？」
ネコマタは混乱した。
「第三問。お前の足元のバツ印、それは一体何でしょう？」
ネコマタは自分の体の丁度真下、赤いテープを交差させて作った、小さなバツ印に気付いた。同時に、神之上の意図にも気付き、すぐ跳び退こうと脚に力を入れる。
だが、遅かった。
「てめぇまさか―」
ネコマタの頭上のスポットライトが落下した。
初めから外れるように細工をされた、円柱型の大きなライトが勢いよく落ちてきた。狙ったように…ではなく狙って、ネコマタの頭頂部、正しくは赤いバツ印に向かって正確に落ちてきた。
「ガッ、、、ァ、、、、……」
小さなネコマタの頭はライトごと舞台上にめり込み、血と脳漿（のうしょう）を盛大にぶちまけた。動かぬ頭とは別の生き物のように、ひくひくと身体は痙攣している。
「では解答を述べよう。答えは三問全て共通。それはな――」
神之上はネコマタの側に寄り、潰れた頭を見下（みお）ろす。世界を俯瞰する“神”のように、ネコマタを見下（みくだ）す…。
そして、神とも仏とも思えない、異端で、異様で、異質な、頬を吊り上げた笑顔を向けた。
「罠に決まってんだろこのバァカッ！！！」

第十三話：VSゴッド？- 粗大ごみ！？（後書き）

神：「俺のターン！　カードを一枚、場に召喚するぜ！」

ネ：「ムムッ！　トラップカード、オープン！　そのカードを無効化！」

マ：「何してんの？」

神：ネ：「遊〇王のテンションで大富豪」

マ：「トランプかよ…」

ア：「遊戯〇知ってるぞ。ブルーアイズが最強なんだよな？」

注：召喚＝トランプを出す。トラップカード＝八切り。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8385k/

ネコマタとマイちゃん

2011年5月17日07時00分発行